〈モラトリアム〉

ヨーロッパ旅行記

一九七五年

木寺　佐和記

〈モラトリアム〉ヨーロッパ旅行記一九七五年

木寺　佐和記

一九七五（昭和五十）年四月～六月の約五十日間、ヨーロッパを中心に一人旅をした。二十四歳の時であった。約五十年後、残していた資料・写真を頼りに、当時の行動や思いを旅行記として描いた。また、現在の心境などからの感想も一部付け加えた。

この旅行記が私を知る家族・知人の他、どなたかの目に留まり、何らかの思いを引き起こすことに役立つなら幸いである。

若くして旅をせずば、老いて何を語らん――ゲーテまたは中国古典より

横浜～ナホトカ～ハバロフスク
（国土地理院地図に加筆）

ヨーロッパ・アルジェリア　経路図
（国土地理院地図に加筆）

目次

経路図

第一章　何故ヨーロッパへそして出発まで……1

第二章　横浜～ナホトカ～モスクワ……8

第三章　ウィーン～ベニス……15

第四章　ローマ・ポンペイ・ブリンディジ……22

第五章　ギリシャ……28

第六章　フィレンツェ・ピサ・モナコへ……34

第七章　モナコ・マルセイユ……40

第八章　アルジェリア……47

第九章　スペイン……57

第十章　スイス・マッターホルン……63

第十一章　アムステルダム・ケルン……66

第十二章　パリ……70

第十三章　帰国……78

旅を振り返って……80

資料集（行程表、絵はがき一覧、使っていた地図などの表紙一覧）……83

第一章　何故ヨーロッパへそして出発まで

一、ナホトカ～ハバロフスクの寝台列車

一九七五（昭和五十）年四月二十一日の夜、私はナホトカからハバロフスクへと向かう寝台列車の中にいた。ついさっきまで、今回のヨーロッパへと向かうグループツアー――当時、日本からヨーロッパに入る最安値のツアーで横浜～ナホトカ～ハバロフスク～モスクワ～ウィーン経路（ウィーンで解散）のツアー――のメンバーたちと雑談していたが、夜も更けてきてそれぞれが割り当てられた寝台に分かれていた。

車窓から、明るいうちは林や荒涼たる草原が見えていたが、今は真っ暗で、列車の「ゴットン、ゴットン」という音が聞こえるのみだった。いくばくかの不安はあるが、私はこれから先の旅路について心を躍らせ、この旅行を思い切って実行したことを良かったと思っていた。そして、この旅に就くまでの経緯を思い起こしていた。

二　そうだ、ヨーロッパへ行こう

私は七月下旬の生まれだが、気のせいか誕生日が近づく梅雨どきは、よく気分が落ち込むことが多かったように思う。特に、一九七四（昭和四十九）年の梅雨期はひどかった。福岡市にある大学の卒業を間近に控え、社会に出ることに不安を抱いていた時

車窓からの眺め

寝台列車の中で

に、在籍していた研究室の助手に空きが出て、研究室のT教授から声を掛けていただき、そのおかげで採用され給料を頂いていた。しかし、その二年間も終わりに近づき、モラトリアムの最後も迫ってきていた。その影響も大きかったと思うが、とにかく、この年の六〜七月のメランコリーはひどかった。

この気分から逃れるために、少しの間、実家のある長崎県北松浦郡福島町（現在、松浦市福島町）へ戻ってみようと考えた。しかし、一人で帰ることに不安を覚え——そのくらい落ち込み方がひどかった——未だ学生だった友人のH君[1]に実家までの同行をお願いした。

引き受けてくれたH君とともに実家の両親の元に戻り、しばらく滞在した。H君を遊びに誘う元気も出てきたか、伝馬船（手漕ぎの小舟）を借りて二人で家の前の海へ雑魚釣りに出掛けた。キスやベラ（クサビと呼んでいた）を狙ったと思う。家から一〜二時間ほどの海上にいたが、丁度、梅雨明けと重なり、空は一機に夏空になっていた。青空に入道雲が沸いてきた空であった。その空を見ながら、突然、助手の二年間を終えたならヨーロッパを旅しようとの考えが、それこそ降りてきた。そして、できれば、カミユの『異邦人』（後述）の舞台のアルジェリアまで足を延ばしてみようと考えた。すると、急に目の前が明るくなり、憂鬱な気分は一機に吹き飛んだ。もう一度、猶予の期間を設け、新しい可能性を含む進路を考え、自分を試す機会を設けることとした。この時の夏空は決して忘れない。

こうして、一九七五（昭和五十）年の三月までに、ヨーロッパ旅行の計画を立て、英会話を勉強し、お金を貯め、体も鍛えることにした——鍛錬のためには空手の道場に約半年間通った。ひ弱な自分を意識していたし、ブルース・リーの『燃えよドラゴン』が大人気を博していた年だった——オチャ！……[2]

1　大江健三郎『日常生活の冒険』に出てくる冒険家・哲学家の斎木犀吉のイメージがぴったりと勝手に思っていた友人。犀吉とは違い寡黙なタイプではあったが。私の結婚式以来会っていない。真夏の夜、二人で大学近くの小学校のプールに塀を乗り越えて忍び込み、素っ裸で泳いだ。ささやかな冒険だった。この小説の最後に出てくる「ともかく全力疾走、そしてジャンプだ。錘のような恐怖心から逃れて！」は、若い頃に背中を押してくれていた言葉。犀吉のモデルが伊丹十三とは、ここ頃は知らなかった。

2　ブルース・リーの気合の声。リーは、この映画のヒットの後も世界中で愛され続けたが、後に述べるアルジェの海岸で少年たちからリーの横蹴りのポーズを求められた。上手くはなかったが少し喜んでもらった。ブルース・リーが好きだった飲み物は？　→「お茶＝オチャ」。三十年後か会社人間になってから、中国での仕事で一緒だった人から教えたもらったジョーク。

三　トーマスクックの時刻表とユーレイルパス

冒頭にも書いたがガイドブックなどによると、当時、日本からヨーロッパに入るには、横浜から海路でナホトカに入り、シベリア鉄道またはアエロフロートを利用することが最安であった。ナホトカ航路[3]を利用する入り方である。そして、ヨーロッパ内を格安でしかも快適に回るには、ユールレイルパス（ヨーロッパ内の鉄道を自由に乗れるカード）を購入する方法が最も良いとされていた。そこで、福岡市内の旅行会社に行き、横浜からソビエト経由のグループツアーに申し込んだ。このツアーは、ウィーンで自由解散になるツアーであった。ヨーロッパで何か仕事を見つけ長期滞在する考えも頭には少しあったが、帰ってくることを前提にパリ発の帰りの航空券も購入した。

そして、ガイドブックやトーマスクックの時刻表[4]を見ながら、大筋のルート・日程を定めた。そのルートは経路図に示すとおりであり、モスクワ、ウィーン、ベニス、ローマ、ナポリ、アテネ、フィレンツェ、マルセイユ、アルジェとオラン、マドリッド、バルセロナ、スイスのツェルマット、アムステルダム、ケルンそしてパリである。アルジェリアを除けば、教科書に出てくる有名なスポットを見て回るという、観光名所めぐりという意味合いが中心の計画であった。しかし、それらをこの目で見て、その先の自分の考え方や社会人としての進路に及ぼす影響を知りたいと思ったし、同級生らが就職していくなかで、この時期に自分らしい何かの足跡を残したいとの気持ちがあった。かっこ付けて言えば自分を試したかったとなるが、やはりモラトリアムというところであったと思う。

ギリシアからさらに東方のイスタンブール、北欧のデンマーク・スウェーデンは、治安、物価などから現地で判断するこ

3　日本とソビエト連邦（現：ロシア）のナホトカ港を連絡していた航路である。戦前から活用され、１９９１年、ソビエト連邦の崩壊に伴い翌年に廃止された。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。２０２３年６月15日　（木）　18：01　ＵＴＣ
URL: https://ja.wikipedia.org/wiki/ナホトカ航路

4　時刻表の見方は、父が学校の事務職であったことから詳しく、素早く見る方法などを教えてくれていた。トーマスクック社の時刻表は英語版であったが、時刻表の見方は通用した。なお、父は、写真が趣味の一つであり、旅行の計画を聞くとカメラの使い方を丁寧に教えた。そして一眼レフのカメラをくれた。

ととした。

中学生の頃からのビートルズ[5]の大ファンであったため、イギリスへ渡ることはかなり考えたが、当時、食べ物がまずいとの情報が出回っていたし、ユールレイルパスのルートから外れているので計画には入れなかった。今思えば、イギリスへ行かなかったことには悔いが残っている。

四　『異邦人の』舞台・アルジェと『ペスト』の舞台・オラン

同年代の方や文学好きな方は、アルベール・カミュのことはよくご存じと思うが、カミュは、私らの時代のキーワードの一つ――不条理をテーマにした作家である。その代表作の一つが『異邦人』で、アルジェリアの首都アルジェが舞台となっている。主人公・ムルソーが海岸で動機があるように思えない殺人を犯し、死刑になるといったストーリーである。哲学的な意味は理解できないものの、そこに描かれている海岸の情景や牢獄で感じた夜・大空・潮のにおいの描写、そして主人公が自分に忠実なところが特別に好きだった。そのアルジェの海岸を一度は見てみたいと思っていた。さらに、もう一つの代表作は『ペスト』――ペスト流行に立ち向かう医者・リウー他が奮闘する姿などを描いた小説。今回のコロナ渦で類似の状況の一つとして再び注目された――であるが、こちらの舞台は、アルジェから西へ列車で五時間程度の中都市・オランである。この作品は、ペストによる災禍の始まりから終結までの模様や人々への考察が丹念に描かれている大作だが、私は話の

5　ビートルズは既に解散していた。１９７２頃から吉田拓郎や井上陽水が人気だった。１９７４のレコード大賞は『襟裳岬』。これは拓郎が作曲。ビートルズは、中学2年生（１９６４年）の頃、同級生のＹＳ君が教えてくれた。彼は、イキナ・ハデナ（It's been a hard day's night）といつも歌っていた。それ何?と訊いたら色々教えてくれた。佐世保での高校生の時は、雪が積もった校庭に誰かがＨＥＬＰと大きく描いたとの話を聞いた。ビートルズは不適切な音楽とされていた。

筋や人物描写よりも、当時は、主人公が友人・タルーと夜の海での海水浴をするシーンが特に気に入っていた。

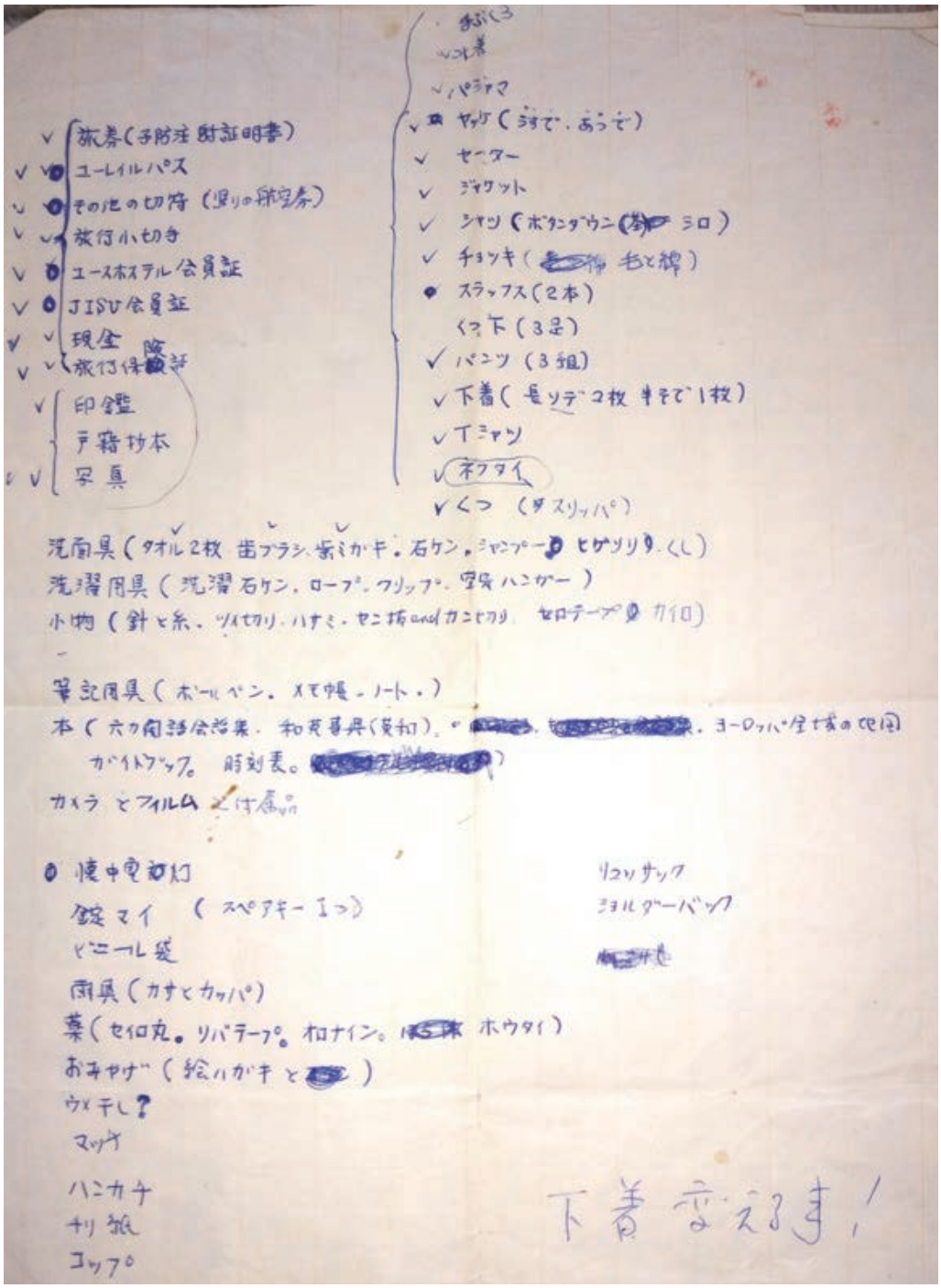
このような理由で、アルジェリアは、この旅の大きな目的地の一つとしていた。

五　持ち物チェックリスト

旅行に携帯するもののチェックリストが残っていたので紹介したい。特に大切なパスポートは、市販のケースに胸から下げるための紐を母に作ってもらい、肌身離さず携帯した。

そのひも付きの入れ物は、その後の一人旅行の時にも大いに役立った。この旅からおおよそ二十年後、バンクーバーでの学会に参加する際に、経由地のサンフランシスコの海岸でボディーボード[6]をした際に、手荷物（大きな荷物は空港に預けていた）をロシア系の運転手に預けたが、パスポートと現金だけは万一を考え、このひも付きケースに入れ胸から下げ、その上にウエットスーツを着て、海に入ったことを思い出す。まったく濡れなかった。そして、運転手は約束通り待っていてくれた。

6　サーフィンの一種で、基本は腹ばいで波に乗る遊び。四十代の半ばから始めた。上手くはないが、海外はサンフランシスコの他、ハワイ、韓国、台湾、イラン（カスピ海）などでの経験がある。現在は、ふつうのサーフィンの一種のロングボードに未だ挑戦中である。ホームポイントは、糸島市の野北海岸や幣の浜。



携行品のチェックリスト

六　博多〜東京

四月十七日、博多駅から新幹線で東京へ向かった。ナホトカ行きのバイカル号は横浜港を十九日に出発するが、そのツアー参加者へ対して横浜港の近くのビルで開かれる直前の説明会に参加する必要があった。そのため東京で二泊した。母の妹弟の多くが東京近郊で生活していたので、一番年齢の近いK叔父のアパートに泊めてもらうことになっていた。叔父から夕食をごちそうしてもらった。ウナギの頭のかば焼きを食べたこと、叔父のアパートが線路沿いにあり（東馬込、横須賀線のそばだったと思われる）列車が通過する音が大きかったことを覚えている。少し寂しく、不安も感じた夜だった。説明会の様子は記憶に薄いが、ツアーメンバーは合計二十二名であった。

次の日は、大学時代の友人二人[7]が既に東京で働いていたので、落ち合って夕食を共にすることとした。友人二人が私の旅路にエールをくれたことを思い出す。

博多駅で

東京でY君と

東京でY君とK君

7　見送ってくれた友人はY君とK君。この二人は私より大学に近いところの同じ下宿にいた。よく遊びに行った。Y君は私よりもビートルズのレコードをたくさん（しかもLPレコードのすべて）を持っており、リクエストに応じて聴かせてくれた。キャロル・キングも教えてくれた（アイヴ・ゴッタ・ア・フレンド）。学生時代の至福の時であった。先に記したH君とY君が私の結婚の披露宴での司会をやってくれた。

第二章　横浜～ナホトカ～モスクワ

一　横浜港とバイカル号

四月十九日、いよいよ出発。ナホトカへと向かうバイカル号は、大桟橋に係留されていた。K叔父が出航を見送ってくれた。忙しかったはずなのに、今思えば本当に感謝したい。船が岸壁を離れ、出航に伴う「テープ投げ」のセレモニーも終わろうとしていたが、不安な気持ちはどこかに飛んでいき、心はこの日の空と同じように晴れやかだった。

バイカル号は、二泊三日で、まず本州の東海岸沿いを北へ向かって航海し、津軽海峡を抜けて日本海に出て、ナホトカ港へ向かう。船からは、最初は本州などの海岸線が眺められ、雪をかぶっているやまなみが見えた。雪をかぶっている山々の景色は、福岡市に住んでいる私には珍しかった。バイカル号が日本海に入ると海しか見えなくなった。

見送ってくれた叔父（後ろがバイカル号）

バイカル号の出航

バイカル号のデッキと見えた本州

二　ロシア人の船乗りと友達に

バイカル号の船内には、自由に出入りできる図書館があった。一日目の夜、そこで写真集などを見ていた時、ロシア人のバレリー君と知り合いになった。彼は、船乗りでアメリカや香港に何度も行っていて英語ができたので、私の単語を並べただけの英語でもコミュニケーションが取れた。一つの航海を終えて故郷のウラジオストックへ帰る途中ということだった。奥さんと三歳になる娘さんもいるとのことであったが、ほぼ同じ年齢と思われ仲良くなった。ゴーゴーを踊ったり五目並べをしたりして夜遅くまで遊んだ。直ぐには友だちを作れない私が、どうして仲良くなれたか今思えば少し不思議である。旅先でやはり解放的になっていたのであろう。

翌日は、彼の船室に案内され、彼の船乗り仲間の二人にも紹介され、ウオッカ、ビール、昼食をごちそうになった。アルコールに強くない私は、船酔いではなく真に酔っぱらってしまい、自分の船室で二時間ほど寝てしまった。

旅行の計画などについて話したと思うが、何を話したかは思い出せない。ただし、彼を含めた仲間たちと何枚も記念写真を撮った。今回のウクライナ侵攻でロシア（当時はソビエト連邦共和国）には良くないイメージが先行するが、彼らは気さくで親切な人たちであった。

なお、バイカル号の船内の様子などは、今では、旅行記のブログ[1]などで詳しく見ることができる。当時は、スマホどころかインターネットもなかった。

バレリーと仲間たち

バレリー

1　例えば、ブログの『青年は荒野をめざす Vol.1 準備～横浜港～ナホトカ航路～シベリア鉄道　ハバロフスク』は詳しい。URL:https://4travel.jp/travelogue/10957307　２０２３年10月17日現在。

三　ナホトカ港が見えてきた

横浜港を出て三日目、ついにナホトカ近郊の陸地が見えてきた。私にとっては初めての外国の地で、その風景に胸が躍った。まずは、遠くの山々が見え、次第にナホトカ港の入り口が見えだし、ついには岸壁で働いている人々や車が見えた。この時の胸の高まりは今でも思い出す。車は日本のものよりも大型であったが年代もののように見えた。ついに外国の地に降り立つことになった。ナホトカからは直ぐにハバロフスクに向かう列車に乗ったが、駅のお土産屋を覗くわずかな時間があり、珍しい切手が目に付いた。ドストエフスキーの肖像画の切手を買って、その切手を日本の女友だち[2]への手紙に使うこととした。その女友だちへは、主要な都市へ移る度に絵はがき――行く先の様々な地で美しい絵はがきが売られており旅の様子を伝えるには最適であった――を送った。手紙はこの時、一回のみだったと思う。

そして、冒頭に書いたハバロフスクへと向かう列車に乗った。

ナホトカ港

ナホトカ駅

ソ連から出した手紙の切手部分

2　合計、三十枚ほどの絵はがきを送った。少々、詳細なことが書けるのは、その絵はがきに書いた文章のおかげである。ドストエフスキーは難解だが当時の文学青年・少女にとってはアイドル。旅行中の夜の大半は、一人で外出し冒険する勇気もお金もなかったので、はがきを書いたりして過ごした。なお、返事は郵便局留めで何回かもらった。そちらは紛失してしまった。ロシア文学では、友人のI君に進められたソルジェニーツィンの『イワン・デニーソヴィッチの一日』が気に入っていた。

四　ハバロフスク～モスクワ

寝台列車は、翌朝にはハバロフスクへ到着した。ツアーメンバーとともに、一台のバスで市内を経由しながら空港についた。飛行機は、国営航空会社アエロフロートのもので、ツアーメンバーは後方の席に案内された。エンジンが出力を上げ滑走路を滑って行くが、離陸するまでにかなりの時間が掛かった。エンジン音がものすごく大きかった。長い滑走の後離陸すると、日本人旅行者の一団であった我々ツアーメンバーから自然と歓声や拍手が上がった。私にとっての初めての飛行機体験であった。

アエロフロート機は、一路、モスクワへと向かった。眼下には、シベリアの凍った台地が広がっていた。機内からの写真撮影は禁じられていたと思うが、学校で教わった大河が流れている模様が見られ、ひそかにシャッターを切った。これらの景色の一つ一つに感激した。

ハバロフスクの街

エニセイ？川

五　モスクワ

モスクワで最初に驚いたことは、案内されたホテルであった。それは、「ホテル・ウクライナ」でその外観の大きさ・見事さに感激した。そのような立派な建物に泊まったことはなく、見たことも初めてあったので嬉しかった。その二十二階の個室に案内され、その広さにも再び感激したが特に驚いたのはバスタブの大きさであった。テレビか小説の影響か、気恥ずかしいがこの頃からリッチな生活への嗜好があった。

その日の夕食は、今回の旅の中で最も豪華なものであった。もちろん、食事代はこのツアーの料金に含まれているため、特にオーダーしたものではないのだが――だからなのであるが様々な料理がテーブルに並べられていた。特に赤い色の付いた料理が多かったように思い出される。おそらくビーツを使ったボルシチなどがあったはずだ。料理の写真を撮っていなかったことは残念である。

次の日からインツーリスト（ソ連の国営の旅行会社）のガイドの案内でモスクワ市内の名所を見学した。有名な赤の広場やモスクワ大学などである。本やテレビで出てくる名所をたくさん案内された。その雄大さや美しさは、欧州世界を代表しているように思われた。ただし、後に述べるローマやパリとは異なり、ロシア正教の影響が感じられる建物が多かったように思う。

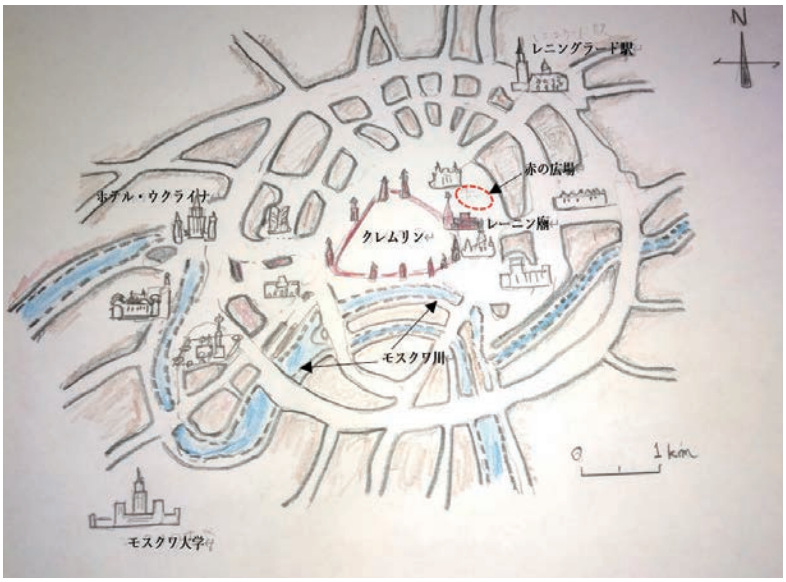
モスクワには二泊したが、夜、一度だけツアーメンバー有志数人でガイド無しで街へ出た。ただし、トロリーバスに乗ったものの、料金の支払い方法がわからずバス内で立ち往生した。結局、お金を支払わなくても降りて良いと言われたようで、ホウホウの体でホテルへ引き返す程度だった。なかなか『青年は荒野をめざす』[3]や『さらばモスクワ愚連隊』[4]に書

3　五木寛之氏が1967年に書いた小説。2章：「モスクワの夜はふけて」では、モスクワ市内でのデートの模様などの冒険が書かれている。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。2021年6月20日（日）05：20　UTC　URL: https://ja.wikipedia.org/wiki/青年は荒野をめざす　私は、出発前には読んでいなかった。読んでいたら……

4　五木寛之氏の小説家としてのデビュー作。1967年、作品集の表題作として講談社から書籍化された。元ピアニストの北見がモスクワの不良少年の溜まり場のレストランで、即興演奏のブルースをモスクワの夜に響かせる。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。2023年6月20日（火）20：15　UTC　URL: https://ja.wikipedia.org/wiki/さらばモスクワ愚連隊　こちらも出発前には読んでいなかった。読んでいたら……

かれているような冒険はできなかった。

なお、詳しい記憶がなくて残念であるが、モスクワでの食事の後か、ツアーメンバーであった一人の女性に声を掛けて別のレストランで「お茶でも」と思って二人で別の店に入ろうとしたところ、店員か警備員かは分からないが厳しい表情で入店を断られた。改めてここは制限が厳しい国であることを認識させられた。女の子の前で格好良いところを見せられなかったどころか、少し怖かった。



モスクワ（かなり不正確）

ホテル・ウクライナの部屋の中で

ホテル・ウクライナの玄関で
（ツアーメンバーたち）

ホテル・ウクライナ

赤の広場
（レーニン廟やクレムリン）

モスクワでの食事

モスクワ大学で
（インツーリストのガイドと）

赤の広場で

第三章　ウィーン～ベニス

一　ウィーンのペンション

モスクワ滞在が終わり、私たち一行は飛行機でウィーンへ向かった。数時間のフライトでウィーンに着いた。そして、空港で私たちのツアーは予定通り解散となった。解散時のことがあまり記憶にないのは不思議である。その先の一人旅のことで精一杯だったので、誰かと別れを惜しむということもなかったということであろう。

さあ、いよいよ一人旅が始まると思った。私の計画ではウィーンには数日滞在し、最初の大きな目的地の一つであるベニスに向かうことにしていた。ウィーンでの宿を思案していたところ、ツアーメンバーの中にウィーンで数日滞在予定のメンバーが何人かおり、それぞれ宿泊先を探していた。その中の一人が「安く泊まれるところ」としてペンションというものがあり、一室を共同で借りるシステムとなっていると教えてくれた――ということで、三人でペンションに泊まることになった。

見知らぬ地で日本人三人が一室に泊まれば、様々な情報交換を行い、場合によっては共同行動することもありそうだが、三人それぞれ既にそれぞれの計画を持っていた。詳しいことを忘れて残念だが、一人はベニスとは違う方向に（不確かだがイギリス方面へ行き、語学の勉強後、コックの修行をするとか）、もう一人は同じベニス方面を目指すとのことであったが、ウィーンでの滞在日数は私より多かった――そういう理由もあり、私は単独行動でウィーンの街を見物することとした。食事はこれまでのパック旅行の豪華な食事と一変し、パンとソーセージ程度で済ませた。りんごが美味しかったことを覚えている。

二　シェーンブルグ宮殿

シェーンブルグ宮殿は、ハプスブルグ王朝の夏の離宮でその美しさは有名とのことであった。市の中心部より南西に約５km の位置にある。建物も優美だがその庭園の広さ・見事さは素晴らしいとされている。ただ、下調べをあまりしていなかった私には、庭園にある樹木のカットの形に驚かされた――というよりも違和感を覚えた。樹木を幾何学的にカットすることは西洋の美しさの様式の一つされているようであるが、日本庭園しか知らなかった私には、その時は正直美しいとは思えなった。建造物の様式には違和感を覚えることはなかったが、植物を幾何学的にカットして見せるという方法には中々慣れなかった。そういうこともあるのか、ウィーンの街の印象は今でも薄い。

なお、ウィーン中心部より、東側――シェーンブルグ宮殿の方向と反対側には、ドナウ川が歩いて行ける距離のところを流れている。今思えば、ドナウ川を見なかったことは残念である。

ウィーン
（ペンションの在った通り）

シェーンブルグ宮殿

三　ベニスへ向けての列車内の出来事

ウィーンからベニスへは夜行の国際列車で向かった。夜のウィーン駅で乗るべき列車を間違わないようにと、駅員に「イズ・ジィス・ザ・ライト・トゥレイン・バーン・フォア・ベニス？」と何度も何度も尋ねた。夜遅くのプラットフォームの情景の記憶は強い。それだけ不安が大きかったと思う。薄暗く人影はまばらだった。心許なかったが何とか間違わずに乗れた。

ここまでは良かったが、その後、この旅の最初のトラブルというものが起こった。このことについては、旅行後、何度も「トラブル伝？」として飲み会などで話したが次のとおりである。

列車内で次のような状況が起きた。

ウィーンを夜遅く出発した列車は、明け方近くとある山あいの駅で泊まった。寒さの中で眠い目で回りを見ると、バックパッカー風のアメリカ人らしき若者たちは荷物を背負い列車を降りようとしていた。私は、トーマスクックの時刻表でベニスへの到着時間は確認しており、まだ到着時間には程遠かった。すると、英語らしきもので次のような会話が始まった。

「さあ、降りるぞ。君も下りよう」
「ノー・ノー。私はベニスまで行くのだ。こんな山の中では降りない」
「いやいや降りる必要があるのだ。降りるぞ」
「親切にありがとう。でも私の目的地はベニスだ。こんなところではない」
「ベニスに行きたいなら、ここで降りるぞ！」
「ありがとう。でもベニスには早すぎる。ここは私の目的地ではない！」
「知らないぞ……」
「？？？……」

国境越えの駅で
（見えにくいが山には雪が）

相手の目はだましているとは思えないし、周りを見渡せば、乗客はみんな降りている。半信半疑だが、ここは他の旅行者に付いて行くしかないと思えてきた。そうして、最終的にはみんなの後ろに付いて行きバスに乗ることとなった。少し走ると係員が乗り込んで来てパスポートを出すように言われた。直ぐに終わり再び列車に乗った。今まで乗っていた列車とは異なっていると思えた。イタリアの列車と思われる。車掌もイタリア語で話しているようであった。なんてことはない。後で分かったことだが、この駅はＴＡＲＶＩＳＯというところで、国境越えのために列車を乗り換える場所であった――現在は、国境が無いためこのような手続きなどは不要なようである。ＴＡＲＶＩＳＩＯという駅名には自信はないが、この辺りがそういう地名であることは間違いない――こうしてなんとか国境を超え、ベニスへと向かうことができた。

これには後日談がある。先に述べたウィーンで別れたツアーメンバーにベニス駅前で偶然に会った。彼も同じ状況に会い、どうしても降りないと抵抗したら、駅員が来て両腕を抱えられ、無理やりに下車させられたということであった。この国境越えの手続きは、トーマスクックの時刻表では読み取れていなかったし。私が持っていた日本のガイドブックにも一切記述がなかった。トラブルに近い出来事であったが、今では懐かしい。

なお、イタリアの列車がベニス方面へ少し走ると、行商人風の地元のオバサンたちが乗ってきた。意味のあることではないが、彼女らの口ひげが異様に濃かったことを覚えている。

四　ベニス散策

ベニスの駅には、午前中の早い時間に着いた。陽のひかりが強く、ウィーンと異なり街全体が急に明るくなった。まずは、宿泊場所の確保だ。駅前のインフォメーションセンターでホテルを紹介してもらおうと捜したが、あいにく日曜日（四

月二十七日）で閉まっていた。しかたなくサン・マルコ広場[1]方面に歩いてホテルを捜したが、どうやらホテルは駅前の方が捜しやすいということで駅前に戻った。しばらくすると、オジサンが寄って来てホテルを紹介するとのことであった。少し不安だったが、４０００リラ（１８００円程度か）の宿が見つかった。

こうして、駅から遠くにないこじんまりしたホテルに落ち着いた。この旅の中では少し高いクラスのホテルであったが、朝食の場所は運河側の二階か三階のテラスで、気持ちが良かった。そのテラスで年配のヨーロッパ系のご夫婦とわずかな会話をしたが、旅を祝福されたように思えた。

そして、ベニスの散策を始めた。

最初の目的地は、サン・マルコ広場である。街のシンボルの鐘楼などなど見どころ満載な場所であるが、予想以上に素晴らしく、観光客で溢れていた。現在ではオーバーツーリズムが課題となっているとのことであるが、それだけの魅力がある名所である。

ホテルから広場への径に架かる橋などからは、有名なゴンドラも多く見られた。『ローマ人の物語』で有名な塩野七生氏の『海の都の物語　ヴェネツィア共和国の一千年　１』[2]では、ベニスの街が作られた背景・その経過が詳しく紹介されているが、そんな知識も十分持たないで歩いて回った。歴史を学んでいたらもっと深い観察ができたと思う。ベニスの景観は、今は映画やＳＮＳなど様々な媒体で鑑賞することができ、どれを見ても私の記念写真より圧倒的にその素晴らしさが分かるが『００７カジノ・ロワイヤル』のラスト近くのシーンも印象的である。

歩き回る中で、ウィーンで別れたグループツアーのメンバーの一人と再会し、国境越えのトラブル談の情報交換を行った。（前述）

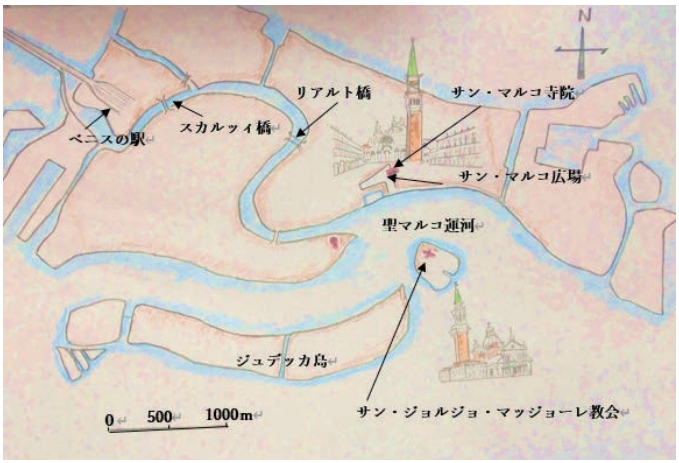
1　ヴェネツィアの中心的な広場で、回廊のある建物に囲まれ、ドゥカーレ宮殿やサン・マルコ寺院などがある。世界で最も美しい広場とも言われている。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。２０２３年7月23日（日）18：11　ＵＴＣ　URL: https://ja.wikipedia.org/サン・マルコ広場

2　冒頭部分での「アッティラが、攻めてくる！」「フン族が、押し寄せてくる！」は迫力満点。ヴェネツィア商人がサン・マルコの遺骨をアレキサンドリアから持ってきた逸話の描写も面白い。新潮文庫　２００９／５／２８

昼食・夕食では、魚介類を食べることができた（８００円程度で）。とても美味しかったとはがきに書いていた。写真がないのは残念である。

次の日は、ベニスのガラス工房を訪ねた。ベニスのお土産は、ベネチアグラスが有名とガイドブックに書かれていたためと思われる。ガラス工房はたくさんあり、自由に見学することができた。ブルーの小さなグラスを一つ買った。

ベニスの大まかな地図を示す。現地で買った素晴らしい観光地図や絵はがきをきちんと紹介したいところだが、著作権を考慮し断念する。なお、最近、温暖化の影響でベニスの街が浸水被害を受けているとのニュースに接する度に、悲しく不安な気持ちになる。



ベニス（ぜひ本物の地図をご参照、それだけでも楽しめる）

スカルツィ橋（駅前にある）と運河

サン・ジョルジョ・マッジョーレ教会と運河

さあ、次はローマである。

サン・マルコ広場（寺院から運河方向を望む）

ゴンドラの溜まり場

サン・マルコ広場（正面が寺院）

お土産のベネチアグラス

ガラス工房にて

第四章　ローマ・ポンペイ・ブリンディジ

一　ローマ・テルミニ駅着と宿さがし

ベニスから列車でローマを目指した。ローマの鉄道の玄関口は、有名なテルミニ駅である。大きな駅で人の数もすごい。まずはこの地での宿泊場所を決めるのが最優先である。駅にはインフォメーションセンターが目立つ場所にあった。決まり文句は「安い宿を紹介ししてもらえますか?」である。比較的スムーズにローマでの宿泊場所を見つけることができた。駅から歩いて十分くらいのバルベニーニ広場の近くであった（一泊１４００円程度）。コロッセオなどの観光名所まで歩いて行ける立地である。とにかく大きくて重いリュックを背負っているので、宿泊先が見つかり荷物を下ろすまでが一苦労である。夕食は宿近くのビュッフェスタイルのレストランを見つけ、そこでお世話になることが多かった。

二　コロッセオ・トレビの泉・スペイン広場

次の日からローマの街、特に観光名所を巡った――コロッセオ、フォロ・ロマーノ、トレビの泉、スペイン広場、バチカン市国などなどである。宿泊先からこれらの場所までは歩いて行ける距離であったので、とにかく、歩いて、歩いて、歩き回った。

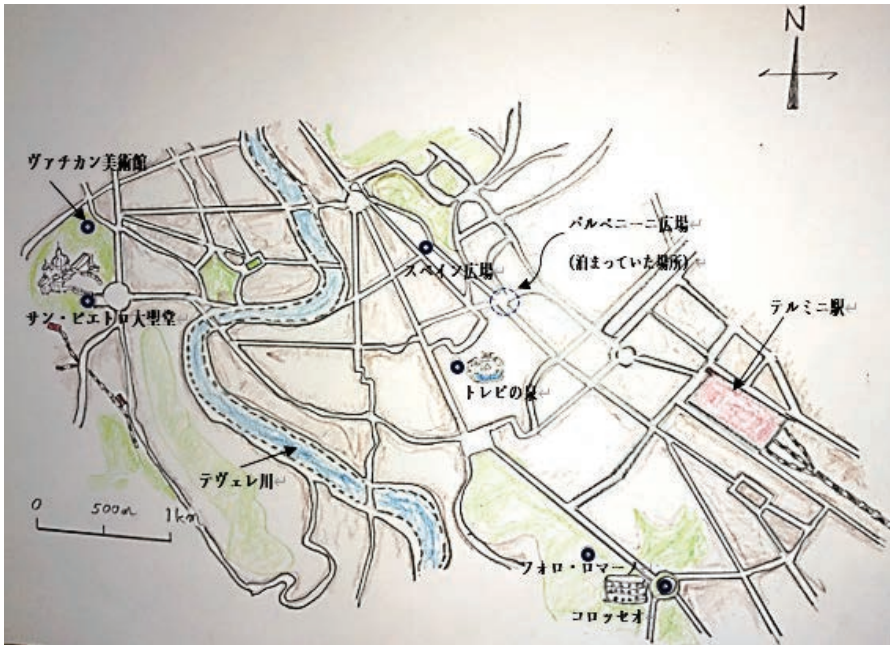
ローマの街は、私の世代であれば、映画『ローマの休日』を見ておられるので観光スポットは、お馴染みであろう。私もそのような場所をこの目で見たいと思った。『ローマの休日』は、学生時代、友人のＹＡ君に誘われて観た。もう一本のライザ・ミネリ主演の映画が良かったと友人と言い争ったが、もちろん、『ローマの休日』の方が後々まで好まれている。当

時の私は少し尖っていたと思う。

フォロ・ロマーノ、コロッセオを見学していた時、イタリアの中学生の修学旅行のグループと出会った。記念写真を撮った。この位の年齢は日本人に興味があるのか、あちこちで話しかけられた。バックパッカーや大人の旅行者よりもコミュニケーションを取る機会が多かったように思う。大人だと話すレベルが高くなるので私の英語力の貧弱さと知識レベルの低さが原因であろう。

トレビの泉はコイン投げで有名だが、私も後ろ向きにコインを投げた。再訪が可能となっているので行きたいが実現していない。それから同じく映画のシーンで有名なスペイン広場も訪れ、「真実の口」にも手を入れてみた。このようにミーハー的な観光を続けた。トレビの泉では、日本人の旅行者とわずかだが情報交換ができた。有名な美味しいパスタを食べてみたいと言ったら、ちゃんとしたレストランで食事をするとべらぼうに高くつくと言われ、もっぱら先に述べたセルフサービスの店に通った。この店でワインの四分の一ビンを時々飲んだ。それで酔っぱらって顔が熱くなっていた。

ローマの歴史をもっと勉強していれば――例えば塩野七生氏の『ローマ人の物語』でも読んでおればと思うが、刊行されたのが一九九二年ということなのでこの本は無理であったが――もっと興味深くローマ市内も回れたと思う。



ローマ

コロッセオ

ローマでの宿の窓から

トレビの泉

スペイン広場

三　バチカン市国

バチカン市国は、テルミニ駅の西方３～４kmにある。サン・ピエトロ広場そして大聖堂の壮大さ・見事さには感激した。さらに、バチカン美術館の美術品にも驚かされた。

サン・ピエトロ大聖堂の内部の写真は撮っていない。写真撮影が禁止されていたのか記憶が曖昧である。有名な『ピエタ像[1]（ミケランジェロ作）』は、聖堂の入り口を入って直ぐ右側にあるとのことだが、写真を撮っていないし、当時の感想も残していないのは大変残念である。

今、ネット上の写真を見る限り、彫刻の中でもう一度観てみたいというのであれば、フィレンツェにある『ダビデ像（ミケランジェロ作）』や『考える人（ロダン作）』よりも、このピエタ像が上げられる。この話を下の弟[2]にすると、彼がヨーロッパを旅行した時に撮った写真を提供してくれた。

サン・ピエトロ広場

サン・ピエトロ広場

ピエタ像（下の弟提供）

1　「ピエタ」は、Pietà、慈悲などの意とされる。この作品にまつわる様々な話は興味深い。マリアの左肩から右脇へ垂れた飾り帯の上にはミケランジェロの現存する唯一の署名があるとのことなど。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。最終更新　２０２３年６月12日（月）18：56　ＵＴＣ　URL: https://ja.wikipedia.org/wiki/ピエタ（ミケランジェロ）

2　下の弟は篠笛奏者で、そのサイトでは篠笛に関する情報の他に、自分の旅行の思い出を『旅日記』として発信している。https://fuenosuke.com/　２０２３年11月現在。

もう一つは、『システィーナ礼拝堂天井画』である。これもミケランジェロの作であるが、天井画は肉眼では細部は見られない。ここは、写真撮影が禁止されており、絵はがきを買った（資料集ご参照）。この他、バチカン美術館の収蔵品の見事さ・多さには感激した。この旅で多くの美術館などを見たが、フレンツェのウフィツ美術館、マドリッドのプラド美術館と並び感銘を受けた美術品の数々であった（もちろん、ルーブルなど他の美術館も素晴らしい。日程などでの心の余裕や予備知識の有無の影響での感想である）。

ローマの一番の思い出は、このバチカン市国の見学かも知れない。もう一度、訪れ、『ピエタ像』や『システィーナ礼拝堂天井画』を観たい。もちろん、パスタをちゃんとした店で食べてみたい。

四　ポンペイ・ナポリ

ポンペイは、ローマから南へ約２００㎞である。ローマから鉄道で往復できると考え、鉄道に乗った。ポンペイの駅に着くまでは良かったが、なんとストライキ中でポンペイの遺跡を見学することができなかった。急遽、予定を変更し、ナポリの街を見学することとした。

ナポリの中央駅から市街部を歩き、当時も有名だった「洗濯ものが干してある街路」を見ながら、海岸に沿い、卵城がある岬まで歩いた。海岸近くまで行けば、ベスビオ火山が見られるのではと思ったが、天気の影響かベスビオ火山はよく分からなかった。また、ピザを食べた記憶がない。食べていないはずだ。食べてみればよかった。街中がきれいでなかったとの感想がある。美術品の見過ぎかも知れない。

ナポリの通り

五　ブリンディジ〜アテネ

次の目的地はアテネである。アテネにはイタリアの長靴のかかと位置にある都市・ブリンディジまで行き、それから船とバスを乗り継いで入る。まずは、ローマから鉄道でブリンディジへ向かうが、列車内で駅弁を食べたことを覚えている。パスタなども入っており美味しかった。

もう一つの記憶が「この頃、どうしても誰かと話したい、それも日本語を使いたい」と強く思ったことである。ブリンディジの鉄道駅で食べ物を売っていたお店の人と注文時に話したか、旅行者の誰かと話をしたか、どうしたか、よくは覚えていないがなんとか解消できた。

アテネへのフェリーに乗るとバックパッカーの旅行者が多かった。話し掛けたか掛けられて、フェリーを降りるギリシャの港名（パトラと思われる）、アテネに行く方法（バスに乗ったはずだが記憶が曖昧）等々を教えてもらい、何とかアテネに着くことができた（五月三日の深夜）。

アテネへの船の船尾より

第五章　ギリシャ

一　アテネの宿とイースターエッグ事件

アテネでの最初の宿は、フェリーとバスで一緒だったイギリス人のバックパッカーたちと同じところだった。ただし、あまりにも騒がしい宿だったので、二日目からは新しい宿に変えた。その宿は、騒がしくはなかったが、大部屋の四隅に寝台のみが置いてある安い宿（一泊５００円程度）であった。朝私が起きるといつもベッドの他の住人はみんな寝ており、私が宿に帰り眠る間までは誰も帰って来ずベッドは空だった。この同宿者たちとのすれ違いには違和感を覚えていた。夜早く寝る自分が変なのかとも思っていた。

そうした日が普通であったが、ある日、その同宿者から声を掛けられた。

「パーティを別の部屋でやっている。一緒に行こう」

「いやいや、僕は遠慮しておく」

「そう言わず、行こう！」

断れず、一緒に行くことにした。部屋に着くと、みんなで飲んだり、食べたりしていた。そして、真っ赤な卵を食べるように勧められた。

「さあ、この卵を食べなさい」

「いやいや、そんな色の着いた変な卵は、日本人は食べない」

想像だが――「これはお祭りの定番の食べ物だから食べなさい」

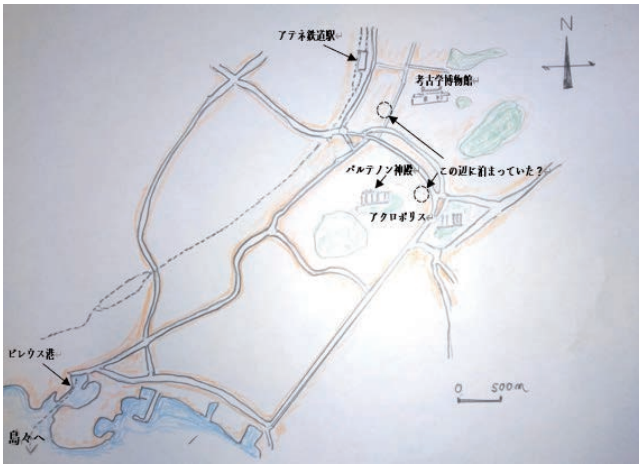
「いやいや、変なものは食べたくない」

押し問答をしたが、結局、断って食べなかった。そして早めに自分の部屋に戻った。旅行から帰ってこの事は忘れていたが、テレビでイースターエッグのことを紹介していた。ギリシャでのイースターの正確な日付は分からないが、お祭り＝復活祭＝イースターのごちそうの一つとして赤く色づけした卵を食べることは慣習とのことであった。そのことを知らなかった自分がお粗末である。知識がなくお祭りムードに参加しなかったことを申し訳ないと今は思う。やはり、旅先の文化などを前もって調べておくこと、もしくは教養として一定レベルの知識を持っておくことの大切さを思い知った出来事であった。こんな時に、ジャンプできない小心な自分が出ていたと思う。

二　パルテノン神殿とアテネの市街部

アテネでのハイライトは、やはりパルテノン神殿の見学である。アテネの中心部にあり、宿から歩いて行くことができた。丘の上にあるので遠くからでもよく見えて迷うことはなかった。遺跡に特に興味があるような自分ではなかったが、これが西洋文化の起源の一つとされる建造物と教科書などで紹介されていたので、何枚も記念写真を撮った。

宿への帰り道の途中、路地裏からエキゾチックな音楽が流れてきた。音楽を奏でて踊っている様子だった。音楽が東方を感じさせ、ヨーロッパというよりも、中東と思われる雰囲気があった。これより、さらに東方に行けば、トルコのイスタンブールである。結局、先の日程を考えてギリシャより東方へは行かなかっ



アテネ

た。イスタンブール[1]へ行かなかったことは残念である。

アテネ市内を歩き回ると大道芸人のショーに出会った。これにもヨーロッパとは違う雰囲気を感じた。

なお、アテネでは、一本五十円くらいのシシカバブを四本も食べたが、安くてしかも美味しかった。

パルテノン神殿

アテネでの宿の前の通り

1　イスタンブールへは行けなかったが、アテネよりさらに中東を感じさせる都市である。最近、テレビで『007／ロシアより愛をこめて』をたまたま観たが、この映画を、1966年、高校進学で佐世保に下宿した直後、下宿を世話してくれたEさんの案内で、佐世保市で最も有名な映画館「カズバ」で観たとの記憶がある。イスタンブールのモスクのシーンは今見てもエキゾチックな雰囲気が十分。この映画の冒頭・ラストではベニスも出てくる。イスタンブールのシーンは、『名探偵ポワロ／オリエンタル急行の殺人』がもっと素晴らしいと思う。なお、佐世保で観たのは『サンダーボルト作戦』かも知れない。記憶が曖昧である。

路地裏から音楽が

大道芸人のショー

三　イドラ島などへの島めぐり日帰りツアー

エーゲ海の島々は、白い家並みなどの景観が有名である。特にミコノス島・サントリーニ島が有名であるが、アテネの港・ピレウス港からの日帰りツアーも用意されていた。こちらは、イドラ島などを巡るもので、料金も手が届く程度だったので参加することにした。上陸した島はイドラ島であった（五月六日であった）。白い家並みは十分見応えがあった。また、上陸した島で革製のベストを自分用に買った。このベストは帰国してからも二十年間程度は愛用したと思うが、その後、誰かにあげてしまった。

また、ギリシャでは、タコを含め魚介類が多く食べられていた。イドラ島でも昼食に食べたが（一皿３００円程度）、美味しかったのでアテネに帰ってからも、また魚介類を食べた（小エビ、カニ、ビール、パンで２２５０円程度、食べ過ぎた）。

イドラ島

イドラ島にて
（購入したベストを着ている）

イドラ島にて

四　デルフィへの日帰りツアーそして再びイタリアへ

デルフィは、アテネの北西約１８０㎞の山間地域にある有名な遺跡である。バスツアーに申し込めば、少し遠いが十分日帰りツアーが可能である。ガイドは英語のみで日本人の参加は私のみであったが、英語の案内は少しだけしか聞き取れなかったが、劇場跡などを楽しめた。

ただし、帰り際に少々不快な思いをした。ツアー一行でお土産屋に寄ったが、万引きか何かがあった模様でツアー一行が疑われ、私一人がアジア人であったためか、疑われたような質問があった。英語の遣り取りで正確には分からないが、疑われたことは間違いないと思う。大きな問題にはならなかったが、アジア人への差別みたいなものを感じた。

ヨーロッパ旅行中、人種差別的なものを感じたのはこの時のみであった。

デルフィ

デルフィの劇場跡

こうしてギリシャの旅を終え、再び、同じ経路でイタリアに戻った。そして、イタリアを北上し、ウフィツ美術館などで有名なフレンツェを目指した。なお、気まずい思いの経験をしたが、ギリシャに悪いイメージはまったくない。

第六章　フィレンツェ・ピサ・モナコへ

一　フィレンツェ

フィレンツェは、イタリアの中部のやや北寄りにある都市で、モナコ・マルセイユへ向かう鉄道の中途でもあり、再びイタリアに戻った旅路での大きな目的地であった。ご存知のように、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂（ドゥオーモ）、ヴッキオ橋、ウフィツ美術館、ダビデ像など、見どころ満載の都市である。

駅に着き、早速、ホテルを紹介してもらい、こじんまりした部屋に落ち着いた（朝食付きで１７００円程度）。観光名所は、すべてホテルから歩いて行ける場所にあった。

早速、ヴッキオ橋、ウフィツ美術館を目指した。

ウフィツ美術館は、ルネサンスを代表している作品を数多く観られる美術館である。また、建物の外観・室内とも美しい。彫刻が並ぶ回廊を通り、ボッティチェリの『春』や『ビーナスの誕生』が飾られている部屋に入った。この目で著名な絵を確認することができた。館内からの眺めと思うが、ドゥモーが見える眺望が完璧であった。

フィレンツェ（道路など適当）

ヴェッキオ橋

ウフィツ美術館前の広場

ウフィツ美術館の中

次にミケランジェロの『ダビデ像』[1]を捜した。ウフィツ美術館近くにもダビデ像があったが、レプリカらしい、本物はアカデミア美術館にあるとのことで、そこへ向かった。着くと大勢の人達が『ダビデ像』を取り巻いていた。写真撮影が許されていたので写真をたくさん撮った。高さが約５ｍもある像で、下から見ると全体のバランスがよく分からない。ミケランジェロの代表作の一つで今にも動き出しそうな気配まで感じさせる像だが、個人的には、前述のピエタ像の方が美しいとは思う。

ウフィツ美術館からのドゥオーモの眺め

フィレンツェの眺め

ダビデ像

1　古代イスラエルの王。羊飼いから身を起こし王となった。羊飼いの杖と石投げだけを持ってゴリアテを倒したとされる。石を投げようと狙いを定めている場面の作品とされている。ドナテッロの『ダビデ像』も有名。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。２０２３年10月20日（金）08：16　ＵＴＣ　URL:https://ja.wikipedia.org/wiki/ダビデ

フィレンツェを見どころなどの詳細については、ぜひガイドブック・美術本・各種のエッセイなどを読んでいただきたい。映画[2]でも素晴らしいシーンを見ることができる。

街の景観や美術館の他に記憶に残っていることは、宿近くの小さなレストランに入った時のことである。ローマではビッフェスタイルを利用することが多かったが、この時は、思い切ってレストランに入った。

さて、メニューリストを持ってきてもらったが、イタリア語は読めない。困った。かろうじて、オムレツ、ビフテキだと思われる料理は何とか分かった。そして、ビフテキを注文した（６００円程度だった）。出てきたのは、骨の付いたビフテキの皿だった。初めての骨付きのビフテキであったが、ものすごく美味しかった。

フィレンツェでは、街中の景観、『ビーナスの誕生』そして『ダビデ像』の印象も強いが、このレストランでメニューが読めなかったこととステーキが美味しかったことの記憶も強い。後で調べてみるとフィレンツェの名物料理[3]とのことであった。なお、宿の近くの通り沿いに様々な手作りパスタを展示している店があった。小さいが様々な形状のものがあり珍しかった。次にチャンスがあればその時は食べてみたい。

花の都と言えば、日本ではパリであるが、フィレンツェも花の都と呼ばれている。美術館に入らなくても街を散策するだけでも、ヨーロッパの歴史や美しさを感じることができる。しかも、パリとは異なり歩いて回ることができ、空がいつも見えるので楽しめると思う。

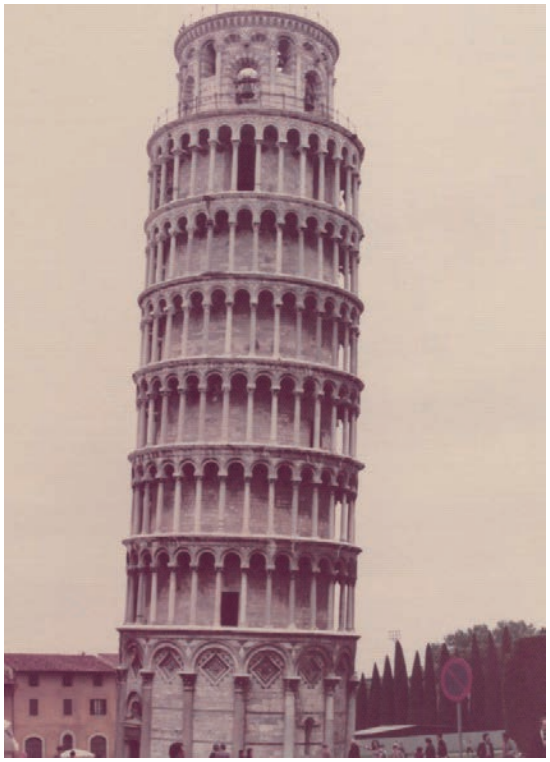
イタリアにもう一度行けるのであれば、フィレンツェはぜひ再訪したい。そして、ビフテキと小さめのパスタを食べたい。

2　例えば、『冷静と情熱のあいだ』２００１年に公開された日本映画。竹野内豊、ケリー・チャンが主演。フィレンツェの他、ミラノの街も出てくるが、ドゥオーモでの再会シーンなど見所がたくさん。ぜひご鑑賞を。イタリアのシーンも楽しめるが映画そのものももちろん楽しめる。ケリー・チャンが魅力的と思う。このタイトルをもじって恥ずかしいが「冷静と欲望のあいだ」とよく使っていた。
『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。２０２３年４月８日（土）ＵＴＣ　URL.https://ja.wikipedia.org/wiki/冷静と情熱の間

3　フィレンツェで一番有名な郷土料理と言えば、間違いなく『ビステッカ アッラ フィオレンティーナ』で、日本ではフィレンツェ風Ｔボーンステーキと表記されることが多い、ボリューム満点の骨付き特大ステーキとのこと。大迫力のフィレンツェ風ステーキトゥッタ・イタリア、URL.https://www.tutta-italia.com/destination/13607.html/　２０２３年10月31日現在。

二　ピサの斜塔

さて、フィレンツェを堪能し、次の目的地のモナコへ向かうことにした。鉄道の経路をユールレイルパスの地図や時刻表で調べてみると、中途にピサ市があり、有名なピサの斜塔が駅から歩いて行ける場所にあることが分かった。ただし、この日中にフランス・モナコに入り、宿泊は、モナコでと決めていたので時間はなかった。時刻表を調べると、ピサの駅で途中下車し、二～三時間以内で次の列車に乗れば、何とか夜遅くでもモナコ着が可能であることを確認した。ピサの斜塔をこの目で見て、写真を撮りたい。なんと、ミーハー的・せわしい予定であろうか。私の性格が出た決定であった――それでも決行。方向を確認し、急ぎ足に歩いた、走った。しばらく行くと、斜塔のテッペンが見えてきた。そして、斜塔の真下近くまで行くことができた。写真撮影をする時間のみがあった。周辺を見たりすることもせず、時計を気にしながら、駅にすぐ逆戻り。そして、予定の列車になんとか乗った。



ピサの斜塔

三　モナコ駅で

予定の列車に乗ったところまでは良かった。少々、夜の遅い時間にはなるが、モナコで下り、小さなホテルに泊まり、翌日より、モナコのカジノや「モナコ海洋博物館」などを観光する予定であった。

しかし、モナコ駅へ着くと、なんと、人、人、人……――これは何だ！　最初は分からなかったが、今日はモナコ・グランプリレース[4]の最終日で先ほどまでレースなどが行われていたことが分かった（五月十一日、日曜日）。困ったが、宿を見つけるしかない。インフォメーションセンターが閉まっていたので街に出た。泊まれそうなホテルの看板を見つけ、手当たり次第に英語で「部屋が空いていませんか？」を繰り返した。答えは「コンプレ・コンプレ」の連続で、フランス語で満室と答えているようである――最初はコンプレという発音が十分聞き取れなかったし、コンプレの意味も知らなかった――ただ、表情から「一杯だよ、こんな日に空き部屋なんかあるはずない」と言っていると推測された。何軒回ったかは覚えていないが、諦めて駅に戻り、モナコ駅のベンチを借りて初めて野宿することとした。

しかし、しばらくすると、駅員から声を掛けられ、「ここは野宿禁止だ」と言われた。正確にはそう言っているように思われた。野宿もあきらめざるを得なかった。

――さぁどうする？

4　モナコグランプリは、モナコ公国のモンテカルロ市街地コースで行われるＦ１世界選手権レースの一戦である。Ｆ１カレンダーのなかでも最も厳しいコースのひとつと言われており「世界３大レース」の１つに数えられ、Ｆ１およびモナコの象徴ともいえる名物レースとなっている。五月の木曜日開催が定例などとのこと。
モナコグランプリ、『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。２０２３年７月２日（日）13：00　ＵＴＣ　URL:https://ja.wikipedia.org/wiki/モナコグランプリ

第七章　モナコ・マルセイユ

一　モナコ駅のつづき

次の手を考えた。モナコが無理なら、少し先のニースまで行って部屋を捜してみよう。深夜近くなってきたがニースに向かった。ニースの中央駅（ニース・ヴィル駅）で降りるべきところを、間違って一つ手前の駅（ニース・リキエ駅）で降りてしまったようだ。アナウンスが「ニース」と聞こえたように思えたので慌ててそこで降りたのだ。寂しそうな駅で人影がほとんどなかった――しまった。降りる駅を間違えた。

バスが止まっていたので運転手に尋ねてみると、そのバスはニース中央駅付近まで行くバスで、中央駅付近にはホテルがあると言っているようである。深夜近くになっていたが、バスに乗り中央駅に向かった。中央駅に着くと、運転手がホテルのありそうな方向を教えてくれた。しばらく歩くと、ホテルのサインが見えてきた。

深夜だったが、そのホテルで尋ねると泊めてくれるとのこと――オウ・マイ・ゴッド。そしてゆっくり休めた（二泊したホテルは一泊１５００円程度だった）。

二　モナコに引き返して

翌日、モナコに引き返し、まずは「モナコ海洋博物館」を訪ねた。この海洋博物館の館長は、ジャック＝イヴ・クストー

氏[1]で、テレビ番組『クストーの海底世界』を見ていた私のあこがれの人物の一人であった。彼の海での仕事振りを観ていてとにかく理想の人物と思っていた。水族館や海洋考古学に関する展示物を見学した。

テラスに出ると、偶然にもなんと「クストー氏」と思われる方が、何人かのメンバーと話をしながらお茶を飲まれている姿を見つけた。失礼だが、そっと写真に収めさせていただいた。海のそばで育ち、海が好きで、海に係る仕事に就くことが中高生からの夢であった。その延長線上で大学は水産関係を希望していたが、就職のことも考えて土木系――海の仕事に関係ありそうと思われた水工土木――を選んだ。結局、海関係の仕事には就けなかったが、波乗り遊びは今も続けている。

モナコ

クストー氏（海洋博物館にて、右端）

1　水中考古学の先駆者。調査船カリプソ号で海や海洋生物の研究を行う一方、書籍の出版や記録映画の放映により一般市民への啓蒙活動も行った。日本では、1970年代から1980年代にかけてのテレビドキュメンタリー番組『驚異の世界・ノンフィクションアワー』（日本テレビ系列）で放送された、自身も出演する『クストーの海底世界』シリーズで知られる。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。2022年1月28日（金）04：17ＵＴＣ　URL:https://ja.wikipedia.org/wiki/ジャック=イヴ・クストー

次にカジノに向かった。

ラフな服装ではあったが、カジノの玄関は通過させてくれた。スロットマシンを通り過ぎ、ルーレットの会場を覗いたが、言葉は一切聞き取れないし、雰囲気にも参加できそうな気配はまったく感じられなかった。ただし、スロットマシンなら簡単である。初めてのカジノ経験[2]として、スロットマシンに挑戦した。少しは勝つ瞬間もあったが、あっという間に手元のお金はなくなった。

三　マルセイユ

マルセイユは、この旅の大きな目的地のアルジェリア訪問の基地であった。もちろん、街としても十分楽しめる場所であった。まず、宿泊場所に落ち着いたが、この宿は、マルセイユの旧港に面した位置にあり、歩きまわるのに最適であった。宿は古い建物で、エレベータは鉄製でかごの上下が鉄の柵から透けて見えるしろものであった。日本では中々お目にかかれない旧式なものであったことが思い出される。

2　カジノ経験としては、その後、新婚旅行時のマカオでの「大小」、ソウルでの「スロット」、プサンでの「ルーレット」、済州島での「ルーレット」の経験があるが、マカオで少し勝てた記憶以外は全敗。

マルセイユ

宿を出て、まずは中央郵便局を目指した。そこに、絵はがきを送っていた女友達からの返事が来ているはずだった。半信半疑であったが、訪ねるとちゃんと返事が来ていて感激した。次に、丘の上に有る「ノートルダム・ドゥ・ラ・ガルド寺院」を目指した。丘を登るとこの場所からは、旧港のある辺りのマルセイユの古い市街部がよく見えた。なかなかの眺望である。また、観光客が多くはなく寺院内の喫茶室でくつろげた。

マルセイユの旧港

マルセイユの旧港

丘を下り、旧港近くをブラブラした。魚を売っている屋台や魚釣りをしている風景があり、私にはなじみやすい情景であった。食事は、有名なブイヤベースなどを旧港に面したレストランで食べた。ブイヤベースは特段に美味しかったとの記憶はないが、生ガキの一皿（五～六個入り、４００円程度）やイワシのフライ（５００円程度）はとても美味しかった。

ノートルダム・ドゥ・ラ・ガルド寺院

寺院の中で

旧港の屋台

3　生まれた家の前に汽水の池があり小さい頃からよく釣りをしていた。そのこともあるのか、釣りに関する文学も若い頃はよく読んだ。開口健氏の『フィッシュ・オン』やヘミングウェイの『大きな二つの心臓の川』が特に好きだった。この旅では釣りはできなかったが、家族とのニュージーランド旅行ではクイーンズタウンの湖でマスを釣った。釣ったマスを中華料理店に持ち込み調理してもらった。美味しかった。なお、この時、13歳の息子は家族を代表して初めてバンジージャンプをした。一皮むけた感じとなり子供から少年になったようだった。私は怖くてできなかった。

四　イフ島（岩窟王の舞台）見学

子供の頃に読んだ『巌窟王』（正式名は『モンテ・クリスト伯』）の小説の舞台のイフ島は、旧港から船で二十分ほどの沖合に浮かぶ小さな島である。小説のイメージで、絶海の孤島と想像していたが、船に乗ると直ぐついた。また、断崖絶壁のイメージもあったが、それほど険しい断崖はなかった。上陸もでき、他の観光客とともに牢獄跡などを見て回った。教科書や本で有名な場所を数々回ったが、このイフ島のみが唯一、期待外れと言える場所であった。本[4]で読み想像するほうが良かった。

イフ島

イフ島の牢獄

4　子供の頃に読んだ冒険小説としては、『巌窟王』の他、コナン・ドイルの『失われた世界』が思い出される。ジャングルでの焚火の時、恐竜に襲われるが、主人公が火の付いた大きな枝で撃退するシーンが印象的。こちらのモデルは、南米のギアナ高地とのこと。こっちには行けないだろう。

五　アルルとアルジェリアのビザ

ゴッホの『アルルの跳ね橋』で有名なアルルが、マルセイユから西に３０kmの位置にある。マルセイユから日帰りでアルルに向かった。跳ね橋を目指したが、どうしても分からない。ただし、アルルの街中で地元のオジサン達が「ボーリング原型みたいなゲーム」をしているところやローマ時代の遺跡を見物できた。また、フランスの大河の一つローヌ川の流れを確認した。ドナウ川と比較すると小さな川かもしれないが、私には十分に大きな川で豊かな流れであった。

アルルでのおじさん達の遊び

ローヌ川

アルジェリアに入国するには、ヨーロッパ諸国と異なり入国ビザが必要である。地図でアルジェリア領事館を捜し訪問した。領事館の職員は、目鼻立ちがすっきりしており対応も的確で、『千夜一夜物語』の王族のイメージが浮かんだ。何とかビザを取得することができ、アルジェリア訪問の第一関門が突破できた。地中海をアルジェへと渡る船は、新港から出ているようだ。新港は、旧港の北にあり、波止場はそう遠くはなかった（往復約３万円のチケットを購入した）。

予定通り、大きな荷物は宿が預かってくれるとのことで荷物を減らしてアルジェへ向かうこととした。

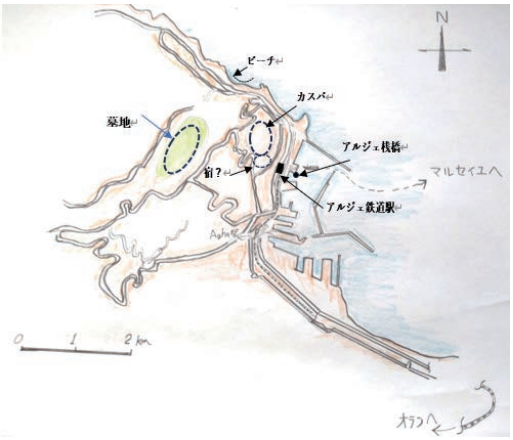
第八章　アルジェリア

一　船旅・アルジェ着

アルジェリアの首都・アルジェまでは地中海を一泊二日で渡る船旅である（五月十六日午後四時半発、十七日午後三時着予定）。船は、バイカル号と比較すると、やや小さく思われた。この船の記憶として、乗客のほとんどが出稼ぎ労働者風のアラビア人と思われ領事館の職員のイメージと異なっていたこと、船室、特にトイレが汚かったことが思い出される。船室の椅子で一晩を過ごしたが夜は少し寒く中々眠れなかった。

ようやくアルジェの港が見えてきた。上陸前、不安そうな旅行者の一人に話しかけられたが、こちらも不安でありアドバイスができなかった。

船からのアルジェ



アルジェ
（道路などはおおまか）

下船し、最初はいつもの宿探しである。

インフォメーションセンターみたいなところは分からず、看板を捜しながら街を歩いた。ホテルそのものが少ないように思われた。四軒目でやっと泊めてくれる場所が見つかった。きれいな地区から少し外れ、カスバ[1]地区の近くであった。個室ではあったが、古く、設備もきれいではなかった。アテネの安宿と同じレベルの宿と思われた。しかし、やっと見つかって一安心であった。

アルジェのメイン通り

カスバ地区

1　カスバはアラビア語で「城塞」という意味がある。オスマン帝国領下の16世紀において、アルジェの丘に建てられたオスマン帝国の太守の城塞のことである。この城塞と海岸線と起伏のある地形に囲まれた一帯で人口が増加し、アルジェの旧市街が形成された。そして時代が下ると、この旧市街自体のことも「カスバ」と呼ばれるようになったとのこと。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。２０２１年３月11日（木）02：00　ＵＴＣ　URL: https://ja.wikipedia.org/アルジェのカスバ

二　市内散策・カドゥ君との出会い

到着日、未だ明るかったのでホテルを出て、海岸沿いの大通りを散策した。東洋人はいない。大通りの外観はフランス国内とさほど変わらいように思えた。ただし、通行人はやはり違う。マルセイユでもそれまでのヨーロッパの街中の通行人と少し変わってアラブ系の人達が目立ったが、ここはアラブ人達の街である。

そんな風に歩いていたら、一人の青年から声を掛けられた。英語で――

「どこから来ましたか?」

「日本です」

「私は数学を勉強している学生です。英語も勉強をしています。ボブ・ディランのファンです。英語の勉強のためアルジェの街を案内しましょうか?」

少し怪しさを感じたが、ボブ・ディランのレコードも持っているとのことを聞いて、ひとまず信用することにした。

そうして、彼の案内で、その日はカスバ地区やモスクを見物した。一人では、カスバ地区の中へ入る勇気がなかったので幸運と思われた。カスバ地区の中の食堂で一人５００円ほどの夕食（イワシのフライだったと思う。美味しかった）を取り、ホテル近くに戻ったのは、夜の十時くらいだった。

彼は、帰りのタクシー代をくれと言った。家がかなり遠いとのことで、少し怪しんだが、２０ディナール（１６００百円）を渡した。明日は、午前八時に迎えに来て、カスバ地区の中心部などを案内してくれることとなった。

アルジェの通り

アルジェの公園で

三　トラブルの予感

次の日は、約束通り、カドゥ君の案内でカスバの中心地区を訪ねた。

案内されたのは、中心地区の他、近くにある墓地であった。なぜ墓地を案内されたかはよく分からなかったが、今での推測は、アルジェリア戦争[2]のことを私に教えるためではなかったと思われる。その戦争が終わり、未だ十数年しか経過していないこと、そのおかげでアルジェリアが独立したことなど、アルジェリアの歴史を勉強しておらず、植民地時代のカミュの小説に描かれている街や海の風景（一九三〇年後半の頃か?）以外は基礎知識がなかった。本当に不勉強であった。反省される。

墓地では、彼は墓から頭蓋骨を取り出し、私に見せた。その意味はよく分からなかったが、さすがに写真撮影はためらわれた。

帰り際になると、「講義に使う本代のため、６０ディナールを貸してくれ」とか「娼家の中を撮影するからカメラを5分間預けろ」とか言いだした。これは変だと思い始め、「君の家へ連れて行きボブディアンのレコードを見せて欲しい」と要求すると、上手くはぐらかされた。

2　１９５４年から１９６２年にかけて主にフランス領アルジェリアで勃発した、フランスとその植民地支配に対抗するアルジェリアとの間の独立戦争。この戦争は双方に多くの犠牲があったが、結果的にはアルジェリア側の勝利に終わりエビアン協定が締結され停戦しアルジェリアは独立を達成したとのこと。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。２０２３年9月13日（水）14：37　ＵＴＣ URL: https://ja.wikipedia.org/アルジェリア戦争　映画『アルジェの戦い』でも有名である。

四　海岸へ

翌日は、一人で待望のアルジェの海岸などを訪れた。異邦人の舞台の海岸と同じかどうかは確信が持てないが、岩肌と砂浜からなる海岸があったので散策した。海水浴のシーズンには早いのか泳いでいる人は見なかった。『異邦人』に出てくる海岸を少しだけだが味わった。歩いていると少年たちが寄ってきた。どこから来たのかなどを尋ねられ、身振り・手振りを交え話していたら、空手やブルース・リーのことが話題となった。日本人なら空手は知っているだろうということで、空手のポーズを要求された。決してうまくはなかったが、横蹴りのポーズを行い少し納得してもらった。なお、大通りを散策中、アルジェで働いているという三人の日本人に会い、お茶（コーラ）を飲んだ。何を話したか覚えていないが、この時以外は、日本人には会わなかった。

アルジェの海岸

海岸で

五　オランへ日帰り旅行

オランは、カミユのもう一つの小説『ペスト』の舞台である。アルジェから西へ列車で五時間程度の中都市である。日帰りで行けそうなので、朝早く列車に乗り、オランへ向かった。鉄道のルートを見ていると一部砂漠地帯を通るように思われた。

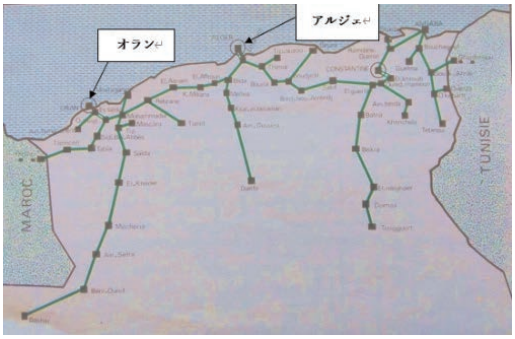
オランに着き、早速、街中を見物した。今度は、ラバ君という少年が寄って来て、街を案内するとのことであった。この少年には何らあやしい点は感じられず、街中や公園を案内してもらった。時間をかけてじっくり観れば、アルジェとの違いが分かったと思うが、特別なことはその時は感じられなかった。後日、『ペスト』を詳細に読むと、「街が海に背を向けて建てられている」「中心部から海岸までの距離がアルジェと比較して少し遠い」ことなど、街の特徴として興味深い記述があるが、そこまでは、当時読み込めておらず、これも勉強不足だった。

ラバ君とは記念写真を帰国してから送るという約束をして、手紙も一度もらったが、書いてある住所が判読できないなどの理由で写真を送っていない。大変申し訳なく思っている。

なお、この旅からかなり経ち会社人生を送っていた四十代の頃、上司の紹介がきっかけでイラン人のエマミ[3]さんと仲良くなった。夫婦でテヘラン、カスピ海、ヤズドを案内し

3　エマミさんからは、たくさんのことを教えてもらった。バス・ウィンドウ・セオリーは、「バス内から外を見ると、回りが動いているように見えるが、本当は自分が動いている」のが真実という話。世の中が動いているように見えるが自分が動いている。時間は常に過ぎて行っている。一瞬一瞬を大切に！と解釈していた。

オランへの列車から（砂漠が見えた）



アルジェ〜オランの鉄道経路
（当時入手した案内図を使用）

てもらった。また、彼の家族（ヤズド在住）からも歓待してもらった。こんなこともあり中東の人達には親近感がある。このイラン旅行の時は、本格的な砂漠にも案内してもらった（ヤズド近郊の砂漠）。そこで薬莢を拾った。イラン・イラク戦争の時のものとの説明であったが、本当かどうかは分からない。しばらくはテレビ台の上に飾っていたが今は失くしてしまった。

オランの街

ラバ君と

六　口論・アルジェリアを出国

アルジェに戻ると宿にカドゥ君が訪ねてきた。再現すると次のようなやりとりをしたと思う。

「街を案内したのに、十分なお礼をもらっていない」
「君は英語の勉強のため、案内すると言ったはずだ」
「僕は自分の時間を犠牲にして案内した。お礼は当然だ」
「食事代、交通費は僕が払った。余分なお金は持っていない」
「お金がないなら、カメラが欲しい」
「何を馬鹿なことを言う。カメラはこの一台だけだ」

こうして、だんだん声が大きくなっていき、つかみ合いにはならなかったが、大そうな口論となった。英語で口論したはずだが日本語も交えていたかも知れない。なんとか、お金もカメラも渡さずおしまいとなって部屋にも戻ったが、次第にその夜が怖くなってきた。彼が訪ねてきて、もう一度口論になったらどうしようと思った。部屋の鍵を厳重にロックしようと試みたが、ロックの調子がおかしいことに気づいた。なんというオンボロな部屋――あわてて、ドアの場所にバリケードを作ることとした。机や椅子などを積み上げた。明日は、帰りの船便がある日だ。便があって良かった。少しでも早く、アルジェを離れたいと思った。結局、彼は訪ねては来なかったので安堵した。

明くる日、マルセイユへ戻るための船着き場へ行き、アルジェリア出国の手続きをしている時だった。担当の役人と次のようなやりとりがあった。語学力のせいで正確には分からないが――

「どこのホテルに泊まっていましたか?」
「……リッツホテルとかいう小さなホテルです」
「アルジェには、そのような名前のホテルはない」
「間違いなく、そのような名前のホテルであった。発音は確かではないが、うそは言っていない」
「……」

信用されていないようである。

「別室に来て欲しい」

出航の時間が迫っているし、早くアルジェリアを出国したいのに「何てことだ」と思ったが、別室でまた似たような問答をした。後日、考えてみると、日本赤軍のメンバーと疑われていたのではと推測された。一九七五年前後、日本赤軍は、ヨーロッパや中東などでテロなど[4]を起こしていた。

結局、一時間程度の拘束で解放され、乗船できた。泊まったホテルは正確に覚えておくことが重要だと思った。

このような嫌なこともあったが、カドゥ君には彼なりの言い分があったと思う。彼やアルジェの街に悪い気持ちは抱いていない。

なお、日本赤軍は、当初、パレスチナ解放人民戦線（ＰＦＬＰ）への義勇軍として活動を開始し、一九七四年に正式の日本赤軍と名乗った[5]とのことであるが、当時、その名前は知ってはいたが自分の旅行に影響が出るとはまったく予想していなかった。今起きている「ロシアのウクライナ侵攻」や「イスラエルとハマスの戦い」のことを思うと、当時は、情報網も発達しておらずそのせいもあるだろうが、平和だったと思われる。安全に旅行ができるということはいかに素晴らしいことか、今、身に染みてそう思う。

4　日本赤軍事件、一九七二年のテルアビブ空港乱射事件、一九七三年のドバイ日航ハイジャック事件、一九七四年のハーグ事件など。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。２０２３年5月7日（日）07：57　ＵＴＣ　URL: https://ja.wikipedia.org/日本赤軍事件
なお、あさま山荘事件は一九七二年の出来事。

5　日本赤軍の名称は以下を参照。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。２０２３年10月15日（日）03：33　ＵＴＣ
URL: https://ja.wikipedia.org/wiki/日本赤軍

第九章　スペイン

一　アビニョン経由でマドリッドへ

マルセイユで預けていた荷物を受け取り、マドリッドに向かうこととした。途中、『アビニョンの橋の上で』の歌で有名なアビニョンに寄った。今度は、スムーズにアビニョンの橋を見つけることができた。

マドリッドに着き（五月二十四日早朝）、小さいがきれいなホテルに泊まった（一泊１０００円程度）。マドリッドの街は、街路などの清掃が行き届いており、大変美しいとの印象を持った。街中の公園を散策し、まずプラド美術館を訪れた。

プラド美術館には、『裸のマヤ』や『着衣のマヤ』などで有名なゴヤ[1]の作品が多数展示されている。また、エル・グレコやベラスケスなどのスペイン絵画の他、イタリア絵画なども多数展示されている。展示数と広さの関係などから、ルーブル美術館よりも鑑賞しやすいかも知れない（昔の個人的感想である）。なお、このプラド美術館でのゴヤの絵画をきっかけで帰国後、堀田善衛作の『ゴヤ』を読んだ。「不気味だが人を引き付ける絵が数多い」「数奇な運命であった」程度の記憶なので読み直してみたい。

1　代表作として『カルロス4世の家族』、『着衣のマハ』、『裸のマハ』、『マドリード、１８０８年5月3日』、『巨人』などがある。プラド美術館所蔵。これらは聴力を失って以後の後半生に描かれたものであるとのこと。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』２０２３年10月25日（水）04：59　ＵＴＣ　URL: https://ja.wikipedia.org/wiki/フランシスコ・デ・ゴヤ

二　闘牛見物

スペインといえば、プラド美術館の他は、フラメンコと闘牛程度の知識しかなかった。フラメンコはハードルが高そうであったので、闘牛見物を目指した。会場を地図で見つけその場所に行った。しかし、チケットは売り切れていた。悩んでいると、転売しているオジサンが寄ってきて、正規の値段の二倍を提示してきた。迷ったが、毎日は開催していないようなので、この機会を逃すと観られないと思い、チケットを買った。屋根と太陽の関係で、陽が射す席、陰になる席で値段がかな

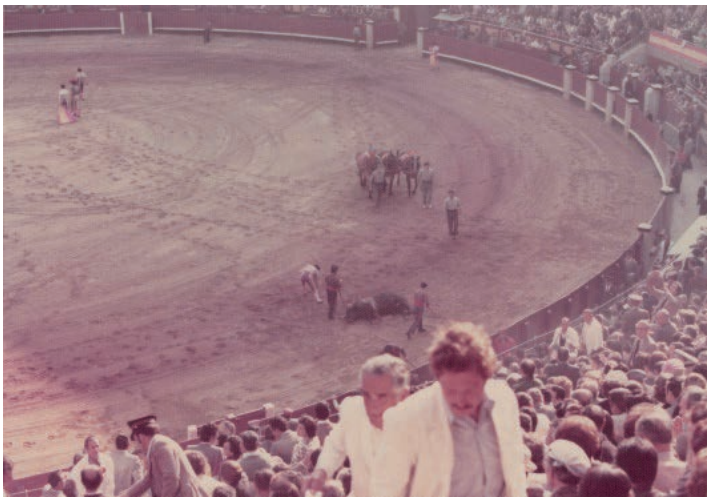
マドリッドの街

マドリッドの街

り異なっていた。もちろん、安い方を買った（約２０００円）。

闘牛が始まった。順番で出し物が変わっていく。詳細を述べることはしないが、最後、牛が殺されるのを見て良い印象はなかった。もっと、闘牛の見どころを勉強しておけば違った感想があったかも知れないがその程度の感想であった。

闘牛場にて



闘牛の最後のシーン

闘牛場のチケット

三　トレド日帰りツアー

トレドは、マドリッドの南方約７０kmにある古い街である。街並み全体の景観、トレド大聖堂、エル・グレコの絵画などで有名な観光名所である。マドリッド市内からの日帰りツアーに申し込み、訪問した。

このツアーには特別の思い出がある。昼食にパエリアが出た。大鍋で作られたものがツアーメンバーに配られたが、初めてのパエリアだったし、ずっと米を食べていなかったのでとても感激した。トレド大聖堂や街並みも良かったが、このパエリアがトレドというよりもスペインの一番の思い出かも知れない。帰国後、パエリアが福岡でも食べられるようになったので何度も食べた。

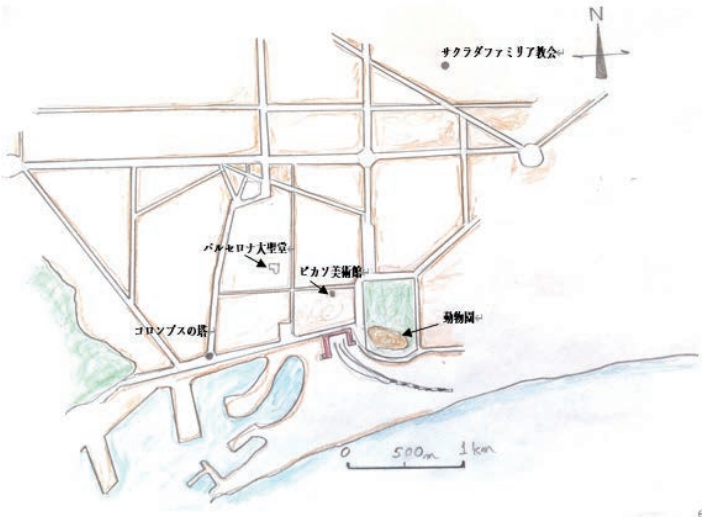
なお、西へ進むとポルトガルであるが、日程を考えて行かなかった。少し残念である。また、後日バスク地方のことを知った。今なら、訪問していただろう。そして、パエリア以外の料理も楽しんだであろう。

トレドへ向かう途中のエスコリアか

トレドの遠景

四　バルセロナ

バルセロナと言えば、今では『サクラダ・ファミリア』が最も有名であろう。当時は、そこまでは有名な教会とは知らなかった。自分の知識不足であった。ガイドブックを参照して、まずは『ピカソ美術館』を訪れた。細い路地にある古い建物に在ったように思う。この美術館は、ピカソの若い頃の作品――「青の時代」として有名な頃の作品などが展示されているとのことであった。ピカソから一般的に想像される抽象画の他に、この美術館には写実的な作品も数多く展示されており私には十分楽しめた。



バルセロナ

ピカソ美術館

ピカソ美術館

次に、港に「コロンブスが乗った船（レプリカ？）」があるとのことでそこに行った。乗船できた。

その次に動物園を訪ねた。白いゴリラで有名とのことで惹かれた。確かにそこにいた。動物園などは、公園を兼ねているような場所であるのでくつろげた。

『サクラダ・ファミリア』を訪問しなかったのは残念である。白いゴリラよりもそっちを見るべきであった（当時は、水族館や動物園が好きだった）。サクラダ・ファミリアは観なかったが、バルセロナ大聖堂は訪問した。見事な建築物であった。

コロンブスの塔

コロンブスの船

白いゴリラ

バルセロナ大聖堂

そして、次の目的地、スイスのツェルマットを目指した。

移動の列車で、欧米人のバックパッカーのグループと一緒になった。中にはきれいな女の子もいたが、そのグループの輪の中へ入れなかった。私の性格の問題もあったが、やはり語学の壁が大きかった。その後、英語を勉強する機会もあり、当時よりは少しはマシになったが、現在もまったく不十分である。

第十章　スイス・マッターホルン

一　ツェルマット

ツェルマットは、マッターホルンへのアクセスの町として有名である。フィスプ（ＶＩＳＰ）まで行き、乗り換えてツェルマットの町に着いた（五月二十九日の午後）。この町は、自動車の乗り入れが禁止されており、馬車が走っていた。また、山小屋風のきれいな建物[1]が並んでおり、これまでの大都市とは雰囲気がまったく違っていた。早速、宿を捜した。少し高かったがこじんまりしたきれいな部屋を紹介してもらった。ずっと、石材を使った山小屋風の建物からなるこの町は、心地が良かった。

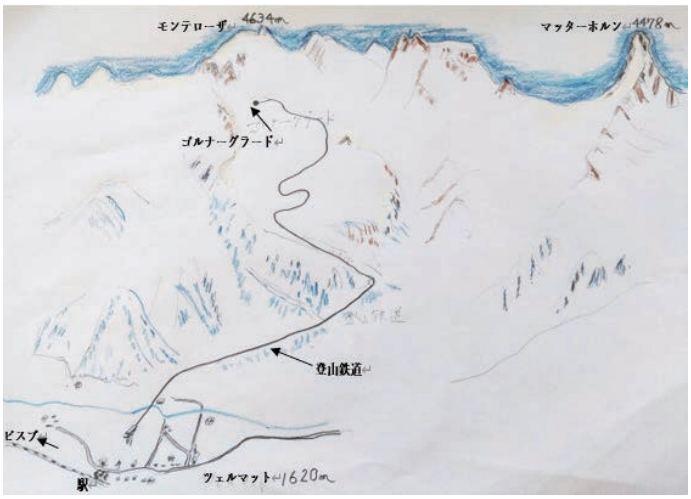
ツェルマット

1　山小屋風の建物といえば、バンクーバー近郊のウィスラーが思い出される。冬季オリンピック開催で有名だが、一九九八年の秋にバンクーバーから日帰りで旅行した。山小屋風のホテルなどが立派だったが、それと比べるとツェルマットの建物はこじんまりしていた印象がある。

二　マッターホルン

町中からも、マッターホルンが見え隠れし感激した。マッターホルンを間近に見るためには、登山列車を利用してゴールナーグラート展望台へ行けば良いとのことであった。しかし、切符の値段が高く断念した。

その代わり、町中から少し高台まで歩いて行けば展望が良さそうな場所があると思われたので一人で高台を目指した。登山ではなく軽いハイキング程度のものであり、危険はまったくないと判断した。丘を目指して登って行くと、誰もいない丘にたどり着き、素晴らしい眺望のきく場所を見つけた。記念写真を撮った。



ツェルマット（1620m）とマッターホルン（4478m）
（当時入手したパンフを参考）

マッターホルン（山頂が見えにくいが）

マッターホルン（こちらも見えにくい）

アルジェ訪問でも達成感を感じたが、マッターホルンが一望できる場所まで来て、この旅行の達成感をまた感じた。立派な建造物、街並みのたたずまい、有名な美術品などの人工物もヨーロッパならではと思われたが、アルプスのやまなみはヨーロッパを代表している景観と思う。

その後、ユングフラウへの基地があるインターラーケンも訪れたが、天候が良いとは思われなかったこと、やはり登山鉄道は相当に高かったことから、乗るのはあきらめた。今思えば、無理をしてでも登山列車に乗るべきであったと思う。スイスでは、これまでの都市部から離れ、自然に触れることができたので、都市部とは異なる新鮮さを感じた。

他の人も同じと思うが、アルプスなどの険しい山岳の景観には「何故か」惹かれる。「何故か」を追及してみたいと思うが話が難しくなりそうである。マッターホルン以外の山を少し思い出すと、ニュージーランドのマウントクック――この時はセスナ機で氷河にも着陸した。イラン最高峰ダマバンド山――この時はテヘランからカスピ海へと向かう車から眺めた。ウィスラーから望んだやまなみ――この時は雪上車に乗って氷河近くまで行った。その他、九州でも由布岳、久住連山、屋久島のモッチョム岳などなど素晴らしい景観はいつも胸を高鳴らせてくれる。

次は、山を抜けアムステルダムだ。

インターラーケンの近く

インターラーケンの近く

第十一章　アムステルダム・ケルン

一　国境を越えアムステルダムへ

スイスから次の目的地のアムステルダムを目指したが、ルートの記憶が不確かである。おそらく西ドイツを経由しないとアムステルダムには行けないと思うが、スイスと西ドイツ間の国境か、西ドイツとオランダ間の国境か、真夜中、起こされた。そして、リュクサックの中を徹底的に調べられた。ここでも、日本赤軍事件が関係しているように思われた。そういうこともあったが、無事、朝方、アムステルダムに着いた。

駅前の広場から空を見上げると、これまでの空と異なり、冬の日本海側のような雲がありかなり北に来たと感じられた。駅前では、名物のニシンの酢漬けを売っており、早速一匹買って食べた。なかなかの味であり日本の食べ物が思い出された。

二　街中とゴッホ美術館

有名な運河の風景やチューリップの花を捜した。運河の風景は至るところで見られたが、チューリップは、着いた直後はなかなか見つけられなかった。アムステルダムは大きな街で観光に値する場所はたくさんあるが、『ゴッホ美術館』を目指した。大きく、立派な建物であった。『ひまわり』など有名な絵がたくさんあった。ゴッホの絵については、「有名な作品をこの目で観た」といった程度の感想であった。情けないが、写実的な作品以外の鑑賞能力は私にはない。チューリップは、公園などに入ると多く咲いていた。その他、運河を跨ぐ「跳ね橋」なども多く見られた。

今思えば、アムステルダムには「アムステルダム国立美術館」「レンブラントの家」「アンネ・フランクの家」[1]「各種公園・動植物園」等々、多くの見どころがある。これらは訪問できなかった。南ヨーロッパと異なり、街全体の雰囲気は緯度が高いせいか少し暗いように思われた。また、人々の背丈がものすごく大きいと感じ、南ヨーロッパを懐かしく感じた。

アムステルダム（運河を中心に描いた）

ゴッホ美術館

アムステルダムの運河

公園のチューリップ

運河に架かる跳ね橋

1　アンネの日記は読んでいなかった。この家にも関心がなかった。ユダヤ人迫害の歴史についても当時は知識も乏しかった。最近、怖くて読めなかったフランクルの『夜と霧』が読めた。読むべき本と言える本だと思う。しかし、このユダヤ人の問題が現在のハマス・イスラエル戦争と繋がっていると思うと複雑である。

三　飾り窓の女とポルノ映画館

オランダには公娼制度があり飾り窓の女という場所があるのは、当時も有名であった。見物するとしても夜が妥当かも知れないが、夜の街は少し怖いので、昼間に捜してみた。手元の地図ではよく分からなかったので、近い場所と思われるところまで行き、通行人に尋ねたらかなり変な対応――というか軽蔑しているような対応をされ恥ずかしかった。それでもくじけず、それらしい場所を見つけ写真を撮った。

当時、「フリーセックス」は北欧の代名詞のように思っていたので、気恥ずかしいが、夜――夜は出歩かないようにしていたが珍しく外出した――ポルノ映画を観に行った。映画のタイトルや内容は分からず、それらしい映画館に入った。シートに座り画面に集中していると、隣に大きな西洋人の男が座った。しばらくすると、座り方を変え私の足にその男の足が触れた。最初は、体が大きいのでやむを得ないと思って我慢していたら、さらに足をこすり付けてきた。これはおかしい、ひょっとするとホモかもと思えだした。やはり不自然である。私は、足と体で大きく相手を押して強く拒絶したところ、男は座席から立ち去った。

それ以上、大きな問題にならずに良かった。ちょっとした事件であり暗くて人相などは分かなかったが、今でもよく覚えている。みなさま、一人でのポルノ映画鑑賞時はご用心を！　と言っても一人でのポルノ映画鑑賞の時代は過ぎ去ってしまったか。

飾り窓があった地区（SEXSHOPの看板が見える）

四　ケルン

オランダから北の北欧は、物価が高いとのことであった。それと予定の日数もお金も少なくなってきたので、北欧は断念し、アムステルダムから最終目的地のパリを目指したが、ケルンで途中下車した。当時、ドイツの街にはあまり関心がなかったが、パリへの経路にケルンがあったので寄ったという程度だった。観光名所はケルン大聖堂であり、そこを目指した。

また、お土産に「ゾーリンゲン製の包丁」を買いたいと思っていたので必死に探したが、中々見つけられなかった。ようやく小さな店を見つけ、あまり上等とは思えなかったが買った。

ケルン

さあ、いよいよパリだ。

第十二章　パリ

一　帰りの航空チケット

六月二日、パリに着いた。直ぐ小さいながらも清潔な宿に落ち着くことができた。宿の場所がどの辺りであったか分からないのが残念である。現時点での推測だが、アムステルダム方面からの国際列車は、「北駅」に着くとのことであるので、この北駅近くの宿を紹介してもらったのではと思われる。部屋から階段を一階へ下った直ぐところに朝食会場があり、こぎれいであったこと、クロワッサンと思われるパンが出たとの記憶がある。

落ち着くと直ぐに帰りの航空便の確認を行うことにした。当時、日本国際学生連合（ＪＩＳＵ）という組織が格安航空券販売などをしており、そこでチケットを買っていたので、そのパリ事務所を訪れた。日本で、六月七日、日本着の便を仮押さえしていたはずだ。事務所を訪ねると、運航計画が変更されているか何かの都合で、一週間遅れの六月十五日にしか飛行機に乗れないとのことであった。困った。お金がかなり減ってきており、帰国が延びるとぎりぎりに近かった。また、予定どおり帰れないとなると「帰りたい」との気持ちが湧いてきた。困ると伝えると、最終確定ではないのでまた来て欲しいと言われた。

しょうがない。再度、訪ねることにして、パリ市内を見て回ることとした。

二　ノートルダム大聖堂

パリでは、これまでの徒歩での名所巡りと異なり、地下鉄を利用した。歩いて回るにはパリは広すぎた。

路線図があったので、目的地に近い駅を地図で見つけ、そこまでのルートや乗り継ぎ駅を確認して何とか乗れた。地下通路が長かったとの思い出がある。また、地下通路ではストリートミュージシャンが演奏していたとの記憶もある。

まずはノートルダム大聖堂（寺院）を訪ねた。ヴィクトル・ユーゴーの小説『ノートルダム・ド・パリ』（「ノートルダムのせむし男」）の舞台となった寺院である。小説をいつ頃読んだかは不確かだが、この小説の舞台ということで行きたかった場所である。塔の頂上まで登ることができ、期待どおり怪物などをかたどった彫刻[1]も身近に見られ、その不気味さは迫力満点であった。写真からでもその迫力が分かる。

塔からは、パリ市内の三六〇度の眺望が見られ、遠くにはエッフェル塔が望めた。

この大聖堂については、二〇一九年の大火事のニュースが記憶に新しい。二〇二四年末までの修復完了を目指しているらしい。

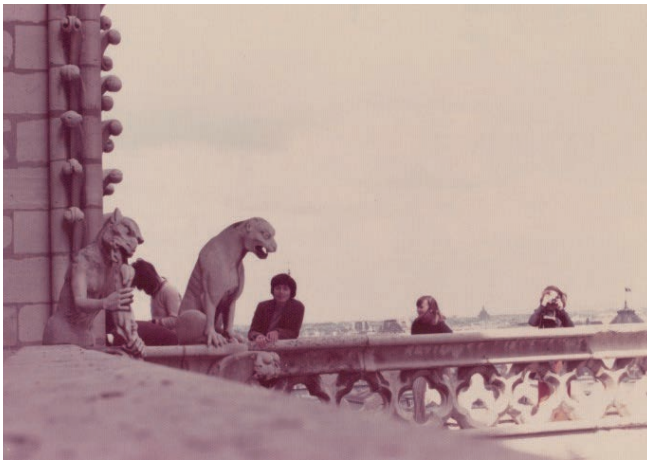
パリ

1　ガーゴイルと呼ばれる。ガーゴイルはもともと、教会の壁面に突き出した形で取り付けられ雨どいの役割があり、建物が傷まないように、雨水を集めて離れた場所に放出しているとのこと。フランスエクスプレス、https://www.france-ex.com/blog/item/12930.html、２０２３年10月31日現在。

三　エッフェル塔と凱旋門

次にエッフェル塔を目指した。塔には登れるが料金が高かったので止めた。下から眺めるだけで十分であった。また、凱旋門へも行った。

この両者については、特別に感動したとの記憶がない。あまりにも名所を見過ぎてしまったというよりも、歴史的背景など知識がなかったことが理由と思われる。



ノートルダム

ノートルダムのガーゴイル

パリを舞台とした小説と言えば、私たちの世代で言えば、『ノートルダムのせむし男』と同じくヴィクトル・ユーゴー作の『レ・ミゼラブル』であろうか？　一八六二年の作とのことであるので、エッフェル塔はなかったが、凱旋門は完成していたはずである。苦難の連続のストーリーなので苦しくて読み切れていない。ノートルダム大聖堂のあるシテ島やリュクサンブール公園が出てくるらしいので[2]、これもよく読んでいれば、パリの街をもっと感慨を持って観られたと思う。ヘミングウェイの『日はまた昇る』でもパリの情景が出てくる。『移動祝祭日』は、パリの街と若い作家時代のヘミングウェイとその妻との暮し振りなどが主題だ。やはり、好きな小説を読んだり映画を鑑賞したりしていれば、当時のパリをもっと深く味わうことができたはずだ。これも残念であった。

旅も終わりに近づき、旅そのものよりも帰国の可否や帰国後の生活のことが気になってきたことも、パリの印象に影響したかも知れない。

エッフェル塔

エッフェル塔

凱旋門

2　パリと印象派の世界へ、夫婦のパリ旅行記、https://parisit-info.com/2019/04/07/luxembourg/参照。２０２３年11月21日現在。

四　ルーブル美術館は

ルーブル美術館は、ご承知のとおり広大で展示作品もものすごく多い。有名な作品のみは見逃すまいとした。私としては『モナリザ』と『ミロのビーナス』を見れば十分と思ったが、当然のことながら素晴らしい王冠などの展示もあった。また、古代エジプトの彫像などの展示も多くあった。当然ではあるが絵画のコレクションも膨大で、有名な作品が数多くあった。また行く機会があれば、事前に下調べを十分にした上で見学に臨まなければならない。

さすがに『モナリザ』の周りは人だかりがあったが、『ミロのビーナス』の回りの人だかりはそこまでではなかった。

古代エジプトの彫像

素晴らしい王冠

モナリザ

ミロのビーナス

五　モンマントルの丘

モンマルトルの丘は、パリで最も標高が高い場所で、昔、多くの芸術家がこの周辺に集まったことでも知られている。丘の上には、サクレ・クール寺院があり、近くには、ムーランルージュもある。ムーランルージュは入りたかったが敷居が高そうであきらめた。モンマルトルの丘の上からの眺望は承知のとおり抜群であった。広場には、敷ものを広げただけのお土産屋がたくさんあった。そして、売っている人はアフリカ系と思われる黒人が多かった。

私は、記念に「顔を彫刻した金属性の首飾り（皮ひも付き）」を買った。値段は覚えていないが気に入っており、現在も金属の顔の部分をキーホルダーとして使っている。

エッフェル塔やルーブル美術館よりも、こんな記憶の方が強い。

サクレ・クール寺院

モンマルトルの丘の上

金属製の首飾り

ムーランルージュ

六　ロダン美術館

『考える人』などで有名なロダンの作品などが展示されている「ロダン美術館」を訪れた。考える人のオリジナル作品はいくつもあるとのことであるが、ここに展示されている作品はオリジナル中のオリジナルと思われた。

『考える人』は一九七五年当時、日本では最も有名な彫刻作品の一つであったであろう。ロダンの言葉「都会は石の墓場です。人の住むところではありません」は、開口健の『フィッシュ・オン』で紹介されている。この言葉と『考える人』とには直接関係はないが、『考える人』の本物はぜひ観たいと思っていた。当時の若者の迷いを象徴している作品と思っていたのかも知れない。本物は観たが、特別な感情は沸いてこなかったと思う。当時、迷っていたし、自称、考えている人のつもりだったが、『ピエタ像』や『ダビデ像』の方が、印象が大きかった。

ただし、他にも、見事な彫刻、絵画がたくさんあり、十分楽しめた。

考える人

ロダン美術館にて

七　エスカルゴの晩餐

いよいよこの旅も終わりである。お金も少しは残っていたのでお祝いにちょっぴり良さそうなレストランに入り、夕食を取ることとした。少し、敷居が高そうな店だったが思いきって入った。店員がメニューを持ってきた。フランス語のメニューを見ながらなんとかエスカルゴを注文した。

給仕が「君はエスカルゴを知っているのか素晴らしい」とか言ったように思う。私は褒められたように受け止めて嬉しかった。他に何をオーダーしたかよく覚えていない。エスカルゴは特段に美味しかった[3]との記憶はないが、帰国できることを祝っての一人での晩餐であった。

そして、旅のことを振り返っていた。新たな可能性を探ってみたいとは思っていたが、帰国が遅れるかも知れないと聞いた時、正直帰りたいと思った。モラトリアムのための旅行はその目的を果たせたのだ。

トラブルのことも思い出していた。「ベニスへの国境越え」「アテネでの万引き疑惑」「モナコでのコンプレ事件」そして「アルジェでのトラブル」と「アムステルダムでのホモ事件」。なんとか乗り越えて、今、旅の終着の地に居り、一人だがお祝いをしている。もう一度言うが「目的を果たせたのだ」、そして無事であった。

ヨーロッパ、アルジェリアを巡った少し長い旅の終わりであった。

3　この時は、エスカルゴが特に美味しかったとの記憶はないが、帰国後かなり経過したのち、イタリア料理店でエスカルゴのつぼ焼きを何度か食べた。にんにくとバターの香りの方が強いと思うが美味しかった。エスカルゴは、フランス料理として有名だが、イタリア料理やスペイン料理でも出てくる。

第十三章　帰国

帰りのルートは、アンカレジ経由ソウル一泊で羽田着であった（成田は未開港）。アンカレジで給油のために一時着陸した際、二時間程度機外に出た。滑走路から見える山々の雪景色はやはり珍しかった。

ソウルでは一泊したがソウル市内を観光する時間はなく、タクシーの中から建物の写真を撮った程度だった。

こうして、六月七日、無事、帰国となった。

帰国後、東京で二泊、また、K叔父のアパートに泊めてもらった。ヨーロッパで多くの古い建物などを見て感銘を受けた影響か、日本の古い建物や有名な観光地を見たくなった。選んだのは浅草の浅草寺である。日本らしさを感じつつ、旅行の延長のようにも覚えた。

そして、新幹線に乗り、六月九日、博多駅に着いた。

駅には到着日をはがきで知らせていた女友達が迎えに来てくれていた。

こうして、今回の私の旅は完全に終わった。

アンカレジ

ソウル

浅草

旅を振り返って

私のモラトリアムは、こうして終わった。

普通の進路から外れ、試してみて、ヨーロッパで働いてみるといった能力や志も十分には持ち合わせていないことが分かった。そして、働いて収入を得て、社会の一員となる気持ちが固まった。その前にやりたいことが何とかやれたのである。

今思えば、当時の日本は、高度成長期を迎え、きちんとした進路に乗り社会に出て、そこで活躍することが当然という風潮であったと思われる。自由度が低い社会システムと私には映っていた。しかし、ビートルズやボブディランの少々反体制的かつ自由で生き生きした雰囲気に影響を受けていた私、そしていくつかの文学作品から普通の進路ではない経験の影響を受けていた私には、望ましいと思われる進路に乗りながらの生き方は息苦しくかつ怖いと感じていたのだ。

そんな私が、この旅を終えた後では、怖いと感じながらも自分を保ちながら、日本での社会生活に挑戦していく気持ちが固まってきていた。

帰国後、再び、実家に身を寄せて就職の道を探った。地方公務員の試験を受けたが、あっけなく不合格となった。実家で近くの海や汽水の沼で釣りなどをしながら時を過ごした。

具体的な就職先が見つけられない中、大学の恩師であるT教授から電話を頂いた。福岡市内の建設コンサルタント会社を受験してみないかとのことであった。なるべく福岡市で就職したいと思っていたので喜んだ。試験は面接のみであった。過激派の学生かどうかを心配されたようだ。体制寄りではなかったが（昔の大学生はほとんどそうだったと思う）過激な思想もなく行動もしていなかったので、入社させていただいた。T先生にはまたしても助けていただいた。感謝しても感謝しきれない。

一九七五（昭和五十）年の一〇月一日より出社し、会社人生を送ることとなった。就職後、しばらくしてから絵はがきを

送っていた女友だち（現在の妻）と結婚した。

この旅行は何だったのか？

一つは、不安だった会社人生などの進路へ挑戦するといった気持ちを固めさせてくれた。

二つ目は、普通のコースからわずかな期間だが外れ、自分なりの考えを実行できたので自分にすこしばかり納得することができた。

三つ目は、トラブルの折などには、直観力や判断力をフルに働かせる必要があったが、何とか凌ぐことができたので自分に自信がでてきた。

四つ目は、映画、小説、随想などの外国のシーンや外国で起きている事件などが、身近に感じられるようになった。そして、ふとした時にこの旅のシーンやその時の気持ち、時にはにおいみたいなものが思い出され、そんな時は心持が少しだけだが豊かになれるようになった。

五つ目は、日本に来ている留学生などの外国人に接しやすくなった。そのおかげでわずかだが友達もできた。

六つ目は、私のこの旅行が、弟や息子に影響を与えたか、彼らも一人で海外を回った。息子は、私よりもかなり冒険的な旅をした。

七つ目は、飲み会の場などで、若い人と話す時、貴重な経験を自慢話として披露できるようになっていた。これは嫌がられた時もあったであろう。

とにかく、大きな事故・事件にも合わず、また体調も崩さず、無事、帰国できたことは幸いであった。冷戦時代ではあったが、日本赤軍を除けば国際テロは今のように活発ではなく、パンデミックという言葉も知らず、地球温暖化とそれが引き起こしている様々な問題も認識されていなかった。今思えば、少しぜいたくかつ幸運な旅行であったと言えるかも知れない。

亡き父や母には心配を掛けたであろうが、あたたかく見守ってくれた。当時は、父母の心境などはまったく考えていなかったが、今は子供や孫を持って少しは想像できる。

父母の他、エールをくれた友達、東京での宿を提供し横浜港まで見送ってくれたK叔父、旅先で親交を交わした方々、私を旅に誘った文学作品の数々やビートルズ、私の自慢話を聞いてくれた方々、今ネットなどで有用な情報を提供しておられる方々、この旅行記が楽しみとお世辞でも言ってくれた同世代の友人達、そしてこの原稿にアドバイスをくれた二人の弟、最後に、私からの絵はがきをきちんと取っておいてくれた妻に感謝したい。

もう一度、この言葉を引用したい――ともかく全力疾走、そしてジャンプだ。錘のような恐怖心から逃れて！

（大江健三郎の『日常生活の冒険より』）

令和五年十二月　　木寺　佐和記

資料集その1

〈モラトリアム〉ヨーロッパ旅行記1975　概略行程表

月	日	曜日	出発・滞在先など
4月	17	木	博多〜東京
	18	金	
	19	土	横浜港発
	20	日	バイカル号船室への招待
	21	月	ナホトカ〜ハバロフスク
	22	火	モスクワ着
	23	水	
	24	木	ウィーン着
	25	金	
	26	土	夜、列車でベニスへ向かう
	27	日	国境越え事件、ベニス着
	28	月	ローマ着
	29	火	
	30	水	
5月	1	木	ナポリ日帰り
	2	金	
	3	土	アテネ着
	4	日	

月	日	曜日	出発・滞在先など
5月	5	月	
	6	火	イドラ島日帰りツアー
	7	水	デルフィ日帰りツアー
	8	木	再びイタリアへ
	9	金	フィレンツェ着
	10	土	
	11	日	モナコ着、コンプレ事件
	12	月	
	13	火	マルセイユ着
	14	水	
	15	木	イフ城見学
	16	金	マルセイユ発、地中海へ
	17	土	アルジェ着
	18	日	
	19	月	
	20	火	オラン日帰り、揉め事
	21	水	アルジェ発
	22	木	マルセイユ着

月	日	曜日	出発・滞在先など
5月	23	金	
	24	土	マドリッド着
	25	日	闘牛見物
	26	月	トレド日帰りツアー
	27	火	バルセロナ着
	28	水	
	29	木	ツェルマット着
	30	金	
	31	土	アムス着、ホモ事件
6月	1	日	ケルンへ
	2	月	パリ着
	3	火	
	4	水	
	5	木	
	6	金	パリ発、ソウル着
	7	土	日本着（羽田空港）
	8	日	
	9	月	博多着

資料集その2

送った絵はがき一覧 1

送った絵はがき一覧2

⑱アルジェ
㉓着衣のマハ
㉗マッターホルン
⑲アルジェ
㉔裸のマハ
㉘アムステルダ
⑳アルジェリア
㉕1808年5月3日
㉑アルジェの海岸
㉖白いゴリラ
㉙ゴッホ美術館
㉚ケルン
㉒オラン
㉛パリ

資料集その3

使っていた地図などの表紙一覧

〈モラトリアム〉ヨーロッパ旅行記一九七五年

――木寺　佐和記――

発行日　：令和五年十二月
発　行　：木寺　佐和記
デザイン・印刷：（株）星光社

〈モラトリアム〉

ヨーロッパ旅行記

一九七五年

木寺　佐和記

〈モラトリアム〉ヨーロッパ旅行記一九七五年

木寺　佐和記

一九七五（昭和五十）年四月～六月の約五十日間、ヨーロッパを中心に一人旅をした。二十四歳の時であった。約五十年後、残していた資料・写真を頼りに、当時の行動や思いを旅行記として描いた。また、現在の心境などからの感想も一部付け加えた。

この旅行記が私を知る家族・知人の他、どなたかの目に留まり、何らかの思いを引き起こすことに役立つなら幸いである。

若くして旅をせずば、老いて何を語らん――ゲーテまたは中国古典より

横浜～ナホトカ～ハバロフスク
（国土地理院地図に加筆）

ヨーロッパ・アルジェリア　経路図
（国土地理院地図に加筆）

目次

経路図

第一章　何故ヨーロッパへそして出発まで……1

第二章　横浜～ナホトカ～モスクワ……8

第三章　ウィーン～ベニス……15

第四章　ローマ・ポンペイ・ブリンディジ……22

第五章　ギリシャ……28

第六章　フィレンツェ・ピサ・モナコへ……34

第七章　モナコ・マルセイユ……40

第八章　アルジェリア……47

第九章　スペイン……57

第十章　スイス・マッターホルン……63

第十一章　アムステルダム・ケルン……66

第十二章　パリ……70

第十三章　帰国……78

旅を振り返って……80

資料集（行程表、絵はがき一覧、使っていた地図などの表紙一覧）……83

第一章　何故ヨーロッパへそして出発まで

一、ナホトカ～ハバロフスクの寝台列車

一九七五（昭和五十）年四月二十一日の夜、私はナホトカからハバロフスクへと向かう寝台列車の中にいた。ついさっきまで、今回のヨーロッパへと向かうグループツアー――当時、日本からヨーロッパに入る最安値のツアーで横浜～ナホトカ～ハバロフスク～モスクワ～ウィーン経路（ウィーンで解散）のツアー――のメンバーたちと雑談していたが、夜も更けてきてそれぞれが割り当てられた寝台に分かれていた。

車窓から、明るいうちは林や荒涼たる草原が見えていたが、今は真っ暗で、列車の「ゴットン、ゴットン」という音が聞こえるのみだった。いくばくかの不安はあるが、私はこれから先の旅路について心を躍らせ、この旅行を思い切って実行したことを良かったと思っていた。そして、この旅に就くまでの経緯を思い起こしていた。

二　そうだ、ヨーロッパへ行こう

私は七月下旬の生まれだが、気のせいか誕生日が近づく梅雨どきは、よく気分が落ち込むことが多かったように思う。特に、一九七四（昭和四十九）年の梅雨期はひどかった。福岡市にある大学の卒業を間近に控え、社会に出ることに不安を抱いていた時

車窓からの眺め

寝台列車の中で

に、在籍していた研究室の助手に空きが出て、研究室のT教授から声を掛けていただき、そのおかげで採用され給料を頂いていた。しかし、その二年間も終わりに近づき、モラトリアムの最後も迫ってきていた。その影響も大きかったと思うが、とにかく、この年の六〜七月のメランコリーはひどかった。

この気分から逃れるために、少しの間、実家のある長崎県北松浦郡福島町（現在、松浦市福島町）へ戻ってみようと考えた。しかし、一人で帰ることに不安を覚え——そのくらい落ち込み方がひどかった——未だ学生だった友人のH君[1]に実家までの同行をお願いした。

引き受けてくれたH君とともに実家の両親の元に戻り、しばらく滞在した。H君を遊びに誘う元気も出てきたか、伝馬船（手漕ぎの小舟）を借りて二人で家の前の海へ雑魚釣りに出掛けた。キスやベラ（クサビと呼んでいた）を狙ったと思う。家から一〜二時間ほどの海上にいたが、丁度、梅雨明けと重なり、空は一機に夏空になっていた。青空に入道雲が沸いてきた空であった。その空を見ながら、突然、助手の二年間を終えたならヨーロッパを旅しようとの考えが、それこそ降りてきた。そして、できれば、カミユの『異邦人』（後述）の舞台のアルジェリアまで足を延ばしてみようと考えた。すると、急に目の前が明るくなり、憂鬱な気分は一機に吹き飛んだ。もう一度、猶予の期間を設け、新しい可能性を含む進路を考え、自分を試す機会を設けることとした。この時の夏空は決して忘れない。

こうして、一九七五（昭和五十）年の三月までに、ヨーロッパ旅行の計画を立て、英会話を勉強し、お金を貯め、体も鍛えることにした——鍛錬のためには空手の道場に約半年間通った。ひ弱な自分を意識していたし、ブルース・リーの『燃えよドラゴン』が大人気を博していた年だった——オチャ！……[2]

1　大江健三郎『日常生活の冒険』に出てくる冒険家・哲学家の斎木犀吉のイメージがぴったりと勝手に思っていた友人。犀吉とは違い寡黙なタイプではあったが。私の結婚式以来会っていない。真夏の夜、二人で大学近くの小学校のプールに塀を乗り越えて忍び込み、素っ裸で泳いだ。ささやかな冒険だった。この小説の最後に出てくる「ともかく全力疾走、そしてジャンプだ。錘のような恐怖心から逃れて！」は、若い頃に背中を押してくれていた言葉。犀吉のモデルが伊丹十三とは、ここ頃は知らなかった。

2　ブルース・リーの気合の声。リーは、この映画のヒットの後も世界中で愛され続けたが、後に述べるアルジェの海岸で少年たちからリーの横蹴りのポーズを求められた。上手くはなかったが少し喜んでもらった。ブルース・リーが好きだった飲み物は？　→「お茶＝オチャ」。三十年後か会社人間になってから、中国での仕事で一緒だった人から教えたもらったジョーク。

三　トーマスクックの時刻表とユーレイルパス

冒頭にも書いたがガイドブックなどによると、当時、日本からヨーロッパに入るには、横浜から海路でナホトカに入り、シベリア鉄道またはアエロフロートを利用することが最安であった。ナホトカ航路[3]を利用する入り方である。そして、ヨーロッパ内を格安でしかも快適に回るには、ユールレイルパス（ヨーロッパ内の鉄道を自由に乗れるカード）を購入する方法が最も良いとされていた。そこで、福岡市内の旅行会社に行き、横浜からソビエト経由のグループツアーに申し込んだ。このツアーは、ウィーンで自由解散になるツアーであった。ヨーロッパで何か仕事を見つけ長期滞在する考えも頭には少しあったが、帰ってくることを前提にパリ発の帰りの航空券も購入した。

そして、ガイドブックやトーマスクックの時刻表[4]を見ながら、大筋のルート・日程を定めた。そのルートは経路図に示すとおりであり、モスクワ、ウィーン、ベニス、ローマ、ナポリ、アテネ、フィレンツェ、マルセイユ、アルジェとオラン、マドリッド、バルセロナ、スイスのツェルマット、アムステルダム、ケルンそしてパリである。アルジェリアを除けば、教科書に出てくる有名なスポットを見て回るという、観光名所めぐりという意味合いが中心の計画であった。しかし、それらをこの目で見て、その先の自分の考え方や社会人としての進路に及ぼす影響を知りたいと思ったし、同級生らが就職していくなかで、この時期に自分らしい何かの足跡を残したいとの気持ちがあった。かっこ付けて言えば自分を試したかったとなるが、やはりモラトリアムというところであったと思う。

ギリシアからさらに東方のイスタンブール、北欧のデンマーク・スウェーデンは、治安、物価などから現地で判断するこ

3　日本とソビエト連邦（現：ロシア）のナホトカ港を連絡していた航路である。戦前から活用され、１９９１年、ソビエト連邦の崩壊に伴い翌年に廃止された。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。２０２３年６月15日　（木）　18：01　ＵＴＣ
URL: https://ja.wikipedia.org/wiki/ナホトカ航路

4　時刻表の見方は、父が学校の事務職であったことから詳しく、素早く見る方法などを教えてくれていた。トーマスクック社の時刻表は英語版であったが、時刻表の見方は通用した。なお、父は、写真が趣味の一つであり、旅行の計画を聞くとカメラの使い方を丁寧に教えた。そして一眼レフのカメラをくれた。

ととした。

中学生の頃からのビートルズ[5]の大ファンであったため、イギリスへ渡ることはかなり考えたが、当時、食べ物がまずいとの情報が出回っていたし、ユールレイルパスのルートから外れているので計画には入れなかった。今思えば、イギリスへ行かなかったことには悔いが残っている。

四　『異邦人の』舞台・アルジェと『ペスト』の舞台・オラン

同年代の方や文学好きな方は、アルベール・カミュのことはよくご存じと思うが、カミュは、私らの時代のキーワードの一つ――不条理をテーマにした作家である。その代表作の一つが『異邦人』で、アルジェリアの首都アルジェが舞台となっている。主人公・ムルソーが海岸で動機があるように思えない殺人を犯し、死刑になるといったストーリーである。哲学的な意味は理解できないものの、そこに描かれている海岸の情景や牢獄で感じた夜・大空・潮のにおいの描写、そして主人公が自分に忠実なところが特別に好きだった。そのアルジェの海岸を一度は見てみたいと思っていた。さらに、もう一つの代表作は『ペスト』――ペスト流行に立ち向かう医者・リウー他が奮闘する姿などを描いた小説。今回のコロナ渦で類似の状況の一つとして再び注目された――であるが、こちらの舞台は、アルジェから西へ列車で五時間程度の中都市・オランである。この作品は、ペストによる災禍の始まりから終結までの模様や人々への考察が丹念に描かれている大作だが、私は話の

5　ビートルズは既に解散していた。１９７２頃から吉田拓郎や井上陽水が人気だった。１９７４のレコード大賞は『襟裳岬』。これは拓郎が作曲。ビートルズは、中学2年生（１９６４年）の頃、同級生のＹＳ君が教えてくれた。彼は、イキナ・ハデナ（It's been a hard day's night）といつも歌っていた。それ何?と訊いたら色々教えてくれた。佐世保での高校生の時は、雪が積もった校庭に誰かがＨＥＬＰと大きく描いたとの話を聞いた。ビートルズは不適切な音楽とされていた。

筋や人物描写よりも、当時は、主人公が友人・タルーと夜の海での海水浴をするシーンが特に気に入っていた。

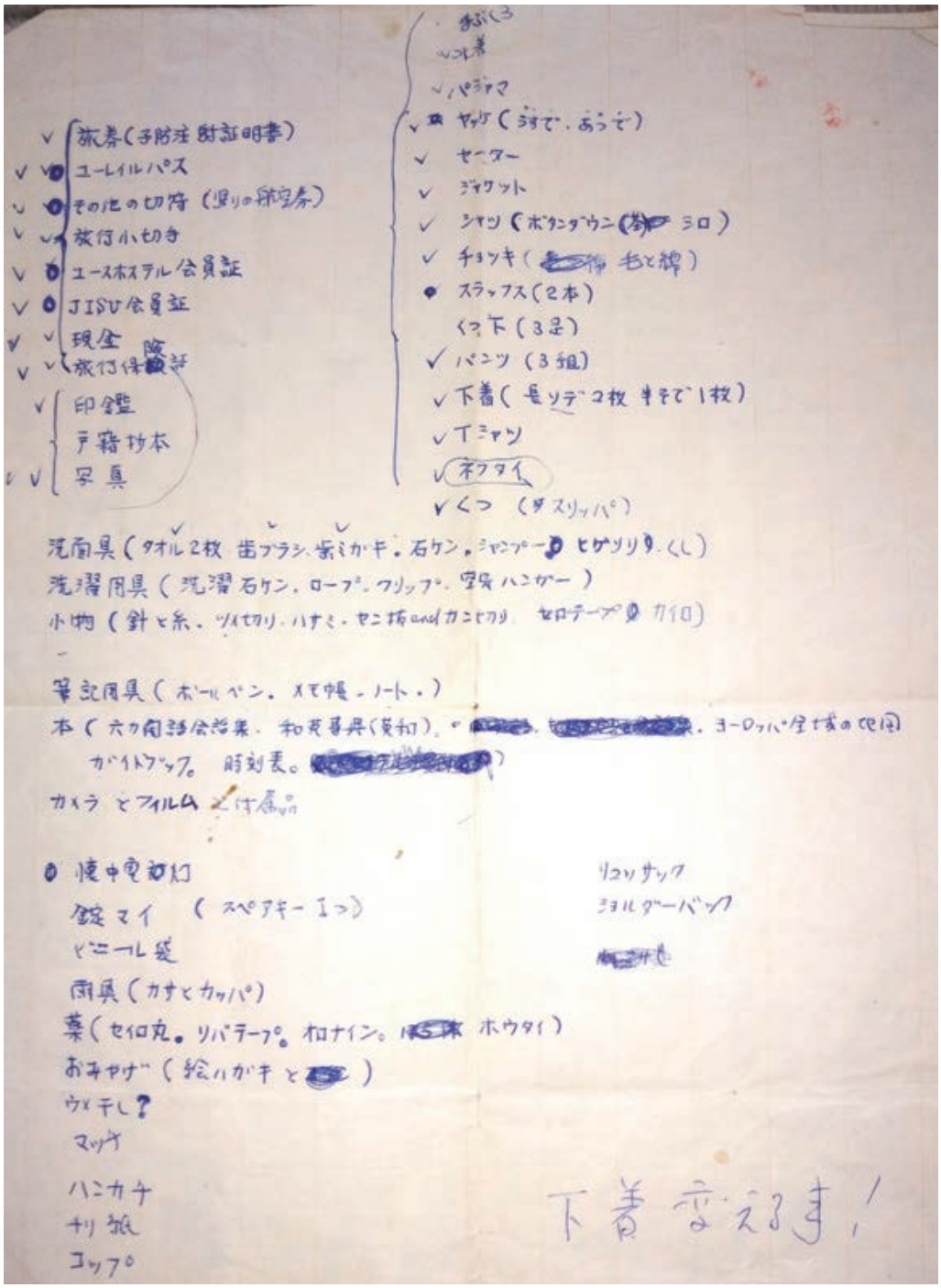
このような理由で、アルジェリアは、この旅の大きな目的地の一つとしていた。

五　持ち物チェックリスト

旅行に携帯するもののチェックリストが残っていたので紹介したい。特に大切なパスポートは、市販のケースに胸から下げるための紐を母に作ってもらい、肌身離さず携帯した。

そのひも付きの入れ物は、その後の一人旅行の時にも大いに役立った。この旅からおおよそ二十年後、バンクーバーでの学会に参加する際に、経由地のサンフランシスコの海岸でボディーボード[6]をした際に、手荷物（大きな荷物は空港に預けていた）をロシア系の運転手に預けたが、パスポートと現金だけは万一を考え、このひも付きケースに入れ胸から下げ、その上にウエットスーツを着て、海に入ったことを思い出す。まったく濡れなかった。そして、運転手は約束通り待っていてくれた。

6　サーフィンの一種で、基本は腹ばいで波に乗る遊び。四十代の半ばから始めた。上手くはないが、海外はサンフランシスコの他、ハワイ、韓国、台湾、イラン（カスピ海）などでの経験がある。現在は、ふつうのサーフィンの一種のロングボードに未だ挑戦中である。ホームポイントは、糸島市の野北海岸や幣の浜。



携行品のチェックリスト

六　博多〜東京

四月十七日、博多駅から新幹線で東京へ向かった。ナホトカ行きのバイカル号は横浜港を十九日に出発するが、そのツアー参加者へ対して横浜港の近くのビルで開かれる直前の説明会に参加する必要があった。そのため東京で二泊した。母の妹弟の多くが東京近郊で生活していたので、一番年齢の近いK叔父のアパートに泊めてもらうことになっていた。叔父から夕食をごちそうしてもらった。ウナギの頭のかば焼きを食べたこと、叔父のアパートが線路沿いにあり（東馬込、横須賀線のそばだったと思われる）列車が通過する音が大きかったことを覚えている。少し寂しく、不安も感じた夜だった。説明会の様子は記憶に薄いが、ツアーメンバーは合計二十二名であった。

次の日は、大学時代の友人二人[7]が既に東京で働いていたので、落ち合って夕食を共にすることとした。友人二人が私の旅路にエールをくれたことを思い出す。

博多駅で

東京でY君と

東京でY君とK君

7　見送ってくれた友人はY君とK君。この二人は私より大学に近いところの同じ下宿にいた。よく遊びに行った。Y君は私よりもビートルズのレコードをたくさん（しかもLPレコードのすべて）を持っており、リクエストに応じて聴かせてくれた。キャロル・キングも教えてくれた（アイヴ・ゴッタ・ア・フレンド）。学生時代の至福の時であった。先に記したH君とY君が私の結婚の披露宴での司会をやってくれた。

第二章　横浜～ナホトカ～モスクワ

一　横浜港とバイカル号

四月十九日、いよいよ出発。ナホトカへと向かうバイカル号は、大桟橋に係留されていた。K叔父が出航を見送ってくれた。忙しかったはずなのに、今思えば本当に感謝したい。船が岸壁を離れ、出航に伴う「テープ投げ」のセレモニーも終わろうとしていたが、不安な気持ちはどこかに飛んでいき、心はこの日の空と同じように晴れやかだった。

バイカル号は、二泊三日で、まず本州の東海岸沿いを北へ向かって航海し、津軽海峡を抜けて日本海に出て、ナホトカ港へ向かう。船からは、最初は本州などの海岸線が眺められ、雪をかぶっているやまなみが見えた。雪をかぶっている山々の景色は、福岡市に住んでいる私には珍しかった。バイカル号が日本海に入ると海しか見えなくなった。

見送ってくれた叔父（後ろがバイカル号）

バイカル号の出航

バイカル号のデッキと見えた本州

二　ロシア人の船乗りと友達に

バイカル号の船内には、自由に出入りできる図書館があった。一日目の夜、そこで写真集などを見ていた時、ロシア人のバレリー君と知り合いになった。彼は、船乗りでアメリカや香港に何度も行っていて英語ができたので、私の単語を並べただけの英語でもコミュニケーションが取れた。一つの航海を終えて故郷のウラジオストックへ帰る途中ということだった。奥さんと三歳になる娘さんもいるとのことであったが、ほぼ同じ年齢と思われ仲良くなった。ゴーゴーを踊ったり五目並べをしたりして夜遅くまで遊んだ。直ぐには友だちを作れない私が、どうして仲良くなれたか今思えば少し不思議である。旅先でやはり解放的になっていたのであろう。

翌日は、彼の船室に案内され、彼の船乗り仲間の二人にも紹介され、ウオッカ、ビール、昼食をごちそうになった。アルコールに強くない私は、船酔いではなく真に酔っぱらってしまい、自分の船室で二時間ほど寝てしまった。

旅行の計画などについて話したと思うが、何を話したかは思い出せない。ただし、彼を含めた仲間たちと何枚も記念写真を撮った。今回のウクライナ侵攻でロシア（当時はソビエト連邦共和国）には良くないイメージが先行するが、彼らは気さくで親切な人たちであった。

なお、バイカル号の船内の様子などは、今では、旅行記のブログ[1]などで詳しく見ることができる。当時は、スマホどころかインターネットもなかった。

バレリーと仲間たち

バレリー

1　例えば、ブログの『青年は荒野をめざす Vol.1 準備～横浜港～ナホトカ航路～シベリア鉄道　ハバロフスク』は詳しい。URL:https://4travel.jp/travelogue/10957307　２０２３年10月17日現在。

三　ナホトカ港が見えてきた

横浜港を出て三日目、ついにナホトカ近郊の陸地が見えてきた。私にとっては初めての外国の地で、その風景に胸が躍った。まずは、遠くの山々が見え、次第にナホトカ港の入り口が見えだし、ついには岸壁で働いている人々や車が見えた。この時の胸の高まりは今でも思い出す。車は日本のものよりも大型であったが年代もののように見えた。ついに外国の地に降り立つことになった。ナホトカからは直ぐにハバロフスクに向かう列車に乗ったが、駅のお土産屋を覗くわずかな時間があり、珍しい切手が目に付いた。ドストエフスキーの肖像画の切手を買って、その切手を日本の女友だち[2]への手紙に使うこととした。その女友だちへは、主要な都市へ移る度に絵はがき――行く先の様々な地で美しい絵はがきが売られており旅の様子を伝えるには最適であった――を送った。手紙はこの時、一回のみだったと思う。

そして、冒頭に書いたハバロフスクへと向かう列車に乗った。

ナホトカ港

ナホトカ駅

ソ連から出した手紙の切手部分

2　合計、三十枚ほどの絵はがきを送った。少々、詳細なことが書けるのは、その絵はがきに書いた文章のおかげである。ドストエフスキーは難解だが当時の文学青年・少女にとってはアイドル。旅行中の夜の大半は、一人で外出し冒険する勇気もお金もなかったので、はがきを書いたりして過ごした。なお、返事は郵便局留めで何回かもらった。そちらは紛失してしまった。ロシア文学では、友人のI君に進められたソルジェニーツィンの『イワン・デニーソヴィッチの一日』が気に入っていた。

四　ハバロフスク～モスクワ

寝台列車は、翌朝にはハバロフスクへ到着した。ツアーメンバーとともに、一台のバスで市内を経由しながら空港についた。飛行機は、国営航空会社アエロフロートのもので、ツアーメンバーは後方の席に案内された。エンジンが出力を上げ滑走路を滑って行くが、離陸するまでにかなりの時間が掛かった。エンジン音がものすごく大きかった。長い滑走の後離陸すると、日本人旅行者の一団であった我々ツアーメンバーから自然と歓声や拍手が上がった。私にとっての初めての飛行機体験であった。

アエロフロート機は、一路、モスクワへと向かった。眼下には、シベリアの凍った台地が広がっていた。機内からの写真撮影は禁じられていたと思うが、学校で教わった大河が流れている模様が見られ、ひそかにシャッターを切った。これらの景色の一つ一つに感激した。

ハバロフスクの街

エニセイ？川

五　モスクワ

モスクワで最初に驚いたことは、案内されたホテルであった。それは、「ホテル・ウクライナ」でその外観の大きさ・見事さに感激した。そのような立派な建物に泊まったことはなく、見たことも初めてあったので嬉しかった。その二十二階の個室に案内され、その広さにも再び感激したが特に驚いたのはバスタブの大きさであった。テレビか小説の影響か、気恥ずかしいがこの頃からリッチな生活への嗜好があった。

その日の夕食は、今回の旅の中で最も豪華なものであった。もちろん、食事代はこのツアーの料金に含まれているため、特にオーダーしたものではないのだが――だからなのであるが様々な料理がテーブルに並べられていた。特に赤い色の付いた料理が多かったように思い出される。おそらくビーツを使ったボルシチなどがあったはずだ。料理の写真を撮っていなかったことは残念である。

次の日からインツーリスト（ソ連の国営の旅行会社）のガイドの案内でモスクワ市内の名所を見学した。有名な赤の広場やモスクワ大学などである。本やテレビで出てくる名所をたくさん案内された。その雄大さや美しさは、欧州世界を代表しているように思われた。ただし、後に述べるローマやパリとは異なり、ロシア正教の影響が感じられる建物が多かったように思う。

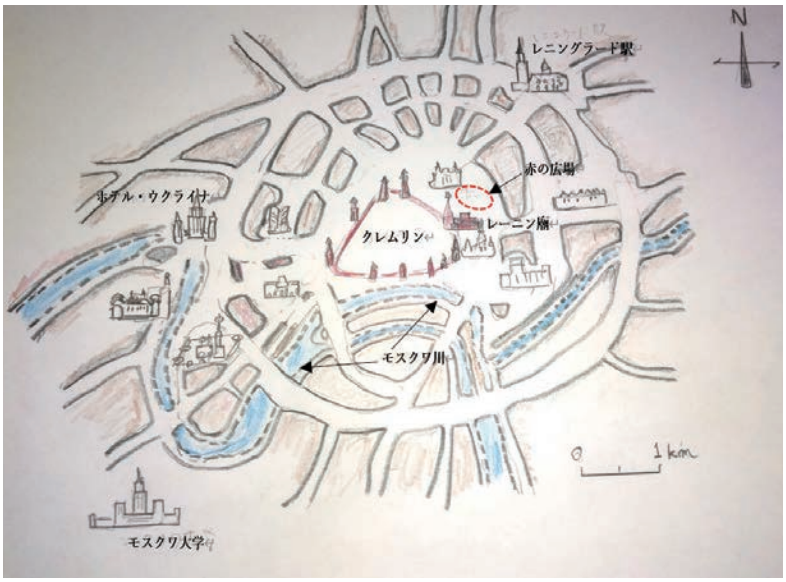
モスクワには二泊したが、夜、一度だけツアーメンバー有志数人でガイド無しで街へ出た。ただし、トロリーバスに乗ったものの、料金の支払い方法がわからずバス内で立ち往生した。結局、お金を支払わなくても降りて良いと言われたようで、ホウホウの体でホテルへ引き返す程度だった。なかなか『青年は荒野をめざす』[3]や『さらばモスクワ愚連隊』[4]に書

3　五木寛之氏が1967年に書いた小説。2章：「モスクワの夜はふけて」では、モスクワ市内でのデートの模様などの冒険が書かれている。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。2021年6月20日（日）05：20　UTC　URL: https://ja.wikipedia.org/wiki/青年は荒野をめざす　私は、出発前には読んでいなかった。読んでいたら……

4　五木寛之氏の小説家としてのデビュー作。1967年、作品集の表題作として講談社から書籍化された。元ピアニストの北見がモスクワの不良少年の溜まり場のレストランで、即興演奏のブルースをモスクワの夜に響かせる。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。2023年6月20日（火）20：15　UTC　URL: https://ja.wikipedia.org/wiki/さらばモスクワ愚連隊　こちらも出発前には読んでいなかった。読んでいたら……

かれているような冒険はできなかった。

なお、詳しい記憶がなくて残念であるが、モスクワでの食事の後か、ツアーメンバーであった一人の女性に声を掛けて別のレストランで「お茶でも」と思って二人で別の店に入ろうとしたところ、店員か警備員かは分からないが厳しい表情で入店を断られた。改めてここは制限が厳しい国であることを認識させられた。女の子の前で格好良いところを見せられなかったどころか、少し怖かった。



モスクワ（かなり不正確）

ホテル・ウクライナの部屋の中で

ホテル・ウクライナの玄関で
（ツアーメンバーたち）

ホテル・ウクライナ

赤の広場
（レーニン廟やクレムリン）

モスクワでの食事

モスクワ大学で
（インツーリストのガイドと）

赤の広場で

第三章　ウィーン～ベニス

一　ウィーンのペンション

モスクワ滞在が終わり、私たち一行は飛行機でウィーンへ向かった。数時間のフライトでウィーンに着いた。そして、空港で私たちのツアーは予定通り解散となった。解散時のことがあまり記憶にないのは不思議である。その先の一人旅のことで精一杯だったので、誰かと別れを惜しむということもなかったということであろう。

さあ、いよいよ一人旅が始まると思った。私の計画ではウィーンには数日滞在し、最初の大きな目的地の一つであるベニスに向かうことにしていた。ウィーンでの宿を思案していたところ、ツアーメンバーの中にウィーンで数日滞在予定のメンバーが何人かおり、それぞれ宿泊先を探していた。その中の一人が「安く泊まれるところ」としてペンションというものがあり、一室を共同で借りるシステムとなっていると教えてくれた――ということで、三人でペンションに泊まることになった。

見知らぬ地で日本人三人が一室に泊まれば、様々な情報交換を行い、場合によっては共同行動することもありそうだが、三人それぞれ既にそれぞれの計画を持っていた。詳しいことを忘れて残念だが、一人はベニスとは違う方向に（不確かだがイギリス方面へ行き、語学の勉強後、コックの修行をするとか）、もう一人は同じベニス方面を目指すとのことであったが、ウィーンでの滞在日数は私より多かった――そういう理由もあり、私は単独行動でウィーンの街を見物することとした。食事はこれまでのパック旅行の豪華な食事と一変し、パンとソーセージ程度で済ませた。りんごが美味しかったことを覚えている。

二　シェーンブルグ宮殿

シェーンブルグ宮殿は、ハプスブルグ王朝の夏の離宮でその美しさは有名とのことであった。市の中心部より南西に約５km の位置にある。建物も優美だがその庭園の広さ・見事さは素晴らしいとされている。ただ、下調べをあまりしていなかった私には、庭園にある樹木のカットの形に驚かされた――というよりも違和感を覚えた。樹木を幾何学的にカットすることは西洋の美しさの様式の一つされているようであるが、日本庭園しか知らなかった私には、その時は正直美しいとは思えなった。建造物の様式には違和感を覚えることはなかったが、植物を幾何学的にカットして見せるという方法には中々慣れなかった。そういうこともあるのか、ウィーンの街の印象は今でも薄い。

なお、ウィーン中心部より、東側――シェーンブルグ宮殿の方向と反対側には、ドナウ川が歩いて行ける距離のところを流れている。今思えば、ドナウ川を見なかったことは残念である。

ウィーン
（ペンションの在った通り）

シェーンブルグ宮殿

三　ベニスへ向けての列車内の出来事

ウィーンからベニスへは夜行の国際列車で向かった。夜のウィーン駅で乗るべき列車を間違わないようにと、駅員に「イズ・ジィス・ザ・ライト・トゥレイン・バーン・フォア・ベニス？」と何度も何度も尋ねた。夜遅くのプラットフォームの情景の記憶は強い。それだけ不安が大きかったと思う。薄暗く人影はまばらだった。心許なかったが何とか間違わずに乗れた。

ここまでは良かったが、その後、この旅の最初のトラブルというものが起こった。このことについては、旅行後、何度も「トラブル伝？」として飲み会などで話したが次のとおりである。

列車内で次のような状況が起きた。

ウィーンを夜遅く出発した列車は、明け方近くとある山あいの駅で泊まった。寒さの中で眠い目で回りを見ると、バックパッカー風のアメリカ人らしき若者たちは荷物を背負い列車を降りようとしていた。私は、トーマスクックの時刻表でベニスへの到着時間は確認しており、まだ到着時間には程遠かった。すると、英語らしきもので次のような会話が始まった。

「さあ、降りるぞ。君も下りよう」
「ノー・ノー。私はベニスまで行くのだ。こんな山の中では降りない」
「いやいや降りる必要があるのだ。降りるぞ」
「親切にありがとう。でも私の目的地はベニスだ。こんなところではない」
「ベニスに行きたいなら、ここで降りるぞ！」
「ありがとう。でもベニスには早すぎる。ここは私の目的地ではない！」
「知らないぞ……」
「？？？……」

国境越えの駅で
（見えにくいが山には雪が）

相手の目はだましているとは思えないし、周りを見渡せば、乗客はみんな降りている。半信半疑だが、ここは他の旅行者に付いて行くしかないと思えてきた。そうして、最終的にはみんなの後ろに付いて行きバスに乗ることとなった。少し走ると係員が乗り込んで来てパスポートを出すように言われた。直ぐに終わり再び列車に乗った。今まで乗っていた列車とは異なっていると思えた。イタリアの列車と思われる。車掌もイタリア語で話しているようであった。なんてことはない。後で分かったことだが、この駅はＴＡＲＶＩＳＯというところで、国境越えのために列車を乗り換える場所であった――現在は、国境が無いためこのような手続きなどは不要なようである。ＴＡＲＶＩＳＩＯという駅名には自信はないが、この辺りがそういう地名であることは間違いない――こうしてなんとか国境を超え、ベニスへと向かうことができた。

これには後日談がある。先に述べたウィーンで別れたツアーメンバーにベニス駅前で偶然に会った。彼も同じ状況に会い、どうしても降りないと抵抗したら、駅員が来て両腕を抱えられ、無理やりに下車させられたということであった。この国境越えの手続きは、トーマスクックの時刻表では読み取れていなかったし。私が持っていた日本のガイドブックにも一切記述がなかった。トラブルに近い出来事であったが、今では懐かしい。

なお、イタリアの列車がベニス方面へ少し走ると、行商人風の地元のオバサンたちが乗ってきた。意味のあることではないが、彼女らの口ひげが異様に濃かったことを覚えている。

四　ベニス散策

ベニスの駅には、午前中の早い時間に着いた。陽のひかりが強く、ウィーンと異なり街全体が急に明るくなった。まずは、宿泊場所の確保だ。駅前のインフォメーションセンターでホテルを紹介してもらおうと捜したが、あいにく日曜日（四

月二十七日）で閉まっていた。しかたなくサン・マルコ広場[1]方面に歩いてホテルを捜したが、どうやらホテルは駅前の方が捜しやすいということで駅前に戻った。しばらくすると、オジサンが寄って来てホテルを紹介するとのことであった。少し不安だったが、４０００リラ（１８００円程度か）の宿が見つかった。

こうして、駅から遠くにないこじんまりしたホテルに落ち着いた。この旅の中では少し高いクラスのホテルであったが、朝食の場所は運河側の二階か三階のテラスで、気持ちが良かった。そのテラスで年配のヨーロッパ系のご夫婦とわずかな会話をしたが、旅を祝福されたように思えた。

そして、ベニスの散策を始めた。

最初の目的地は、サン・マルコ広場である。街のシンボルの鐘楼などなど見どころ満載な場所であるが、予想以上に素晴らしく、観光客で溢れていた。現在ではオーバーツーリズムが課題となっているとのことであるが、それだけの魅力がある名所である。

ホテルから広場への径に架かる橋などからは、有名なゴンドラも多く見られた。『ローマ人の物語』で有名な塩野七生氏の『海の都の物語　ヴェネツィア共和国の一千年　１』[2]では、ベニスの街が作られた背景・その経過が詳しく紹介されているが、そんな知識も十分持たないで歩いて回った。歴史を学んでいたらもっと深い観察ができたと思う。ベニスの景観は、今は映画やＳＮＳなど様々な媒体で鑑賞することができ、どれを見ても私の記念写真より圧倒的にその素晴らしさが分かるが『００７カジノ・ロワイヤル』のラスト近くのシーンも印象的である。

歩き回る中で、ウィーンで別れたグループツアーのメンバーの一人と再会し、国境越えのトラブル談の情報交換を行った。（前述）

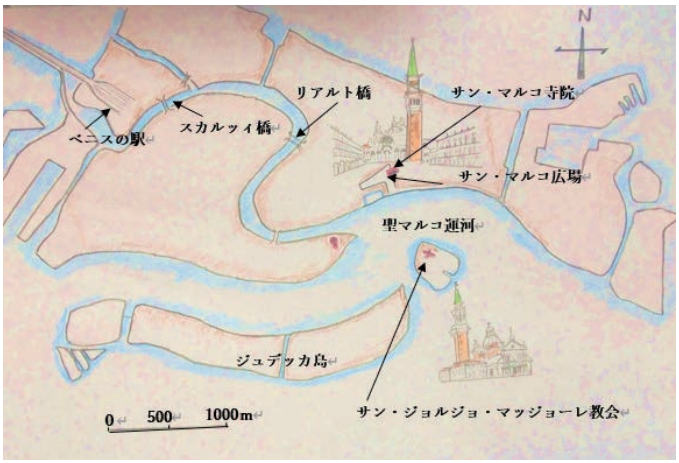
1　ヴェネツィアの中心的な広場で、回廊のある建物に囲まれ、ドゥカーレ宮殿やサン・マルコ寺院などがある。世界で最も美しい広場とも言われている。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。２０２３年7月23日（日）18：11　ＵＴＣ　URL: https://ja.wikipedia.org/サン・マルコ広場

2　冒頭部分での「アッティラが、攻めてくる！」「フン族が、押し寄せてくる！」は迫力満点。ヴェネツィア商人がサン・マルコの遺骨をアレキサンドリアから持ってきた逸話の描写も面白い。新潮文庫　２００９／５／２８

昼食・夕食では、魚介類を食べることができた（８００円程度で）。とても美味しかったとはがきに書いていた。写真がないのは残念である。

次の日は、ベニスのガラス工房を訪ねた。ベニスのお土産は、ベネチアグラスが有名とガイドブックに書かれていたためと思われる。ガラス工房はたくさんあり、自由に見学することができた。ブルーの小さなグラスを一つ買った。

ベニスの大まかな地図を示す。現地で買った素晴らしい観光地図や絵はがきをきちんと紹介したいところだが、著作権を考慮し断念する。なお、最近、温暖化の影響でベニスの街が浸水被害を受けているとのニュースに接する度に、悲しく不安な気持ちになる。



ベニス（ぜひ本物の地図をご参照、それだけでも楽しめる）

スカルツィ橋（駅前にある）と運河

サン・ジョルジョ・マッジョーレ教会と運河

さあ、次はローマである。

サン・マルコ広場（寺院から運河方向を望む）

ゴンドラの溜まり場

サン・マルコ広場（正面が寺院）

お土産のベネチアグラス

ガラス工房にて

第四章　ローマ・ポンペイ・ブリンディジ

一　ローマ・テルミニ駅着と宿さがし

ベニスから列車でローマを目指した。ローマの鉄道の玄関口は、有名なテルミニ駅である。大きな駅で人の数もすごい。まずはこの地での宿泊場所を決めるのが最優先である。駅にはインフォメーションセンターが目立つ場所にあった。決まり文句は「安い宿を紹介ししてもらえますか?」である。比較的スムーズにローマでの宿泊場所を見つけることができた。駅から歩いて十分くらいのバルベニーニ広場の近くであった（一泊１４００円程度）。コロッセオなどの観光名所まで歩いて行ける立地である。とにかく大きくて重いリュックを背負っているので、宿泊先が見つかり荷物を下ろすまでが一苦労である。夕食は宿近くのビュッフェスタイルのレストランを見つけ、そこでお世話になることが多かった。

二　コロッセオ・トレビの泉・スペイン広場

次の日からローマの街、特に観光名所を巡った――コロッセオ、フォロ・ロマーノ、トレビの泉、スペイン広場、バチカン市国などなどである。宿泊先からこれらの場所までは歩いて行ける距離であったので、とにかく、歩いて、歩いて、歩き回った。

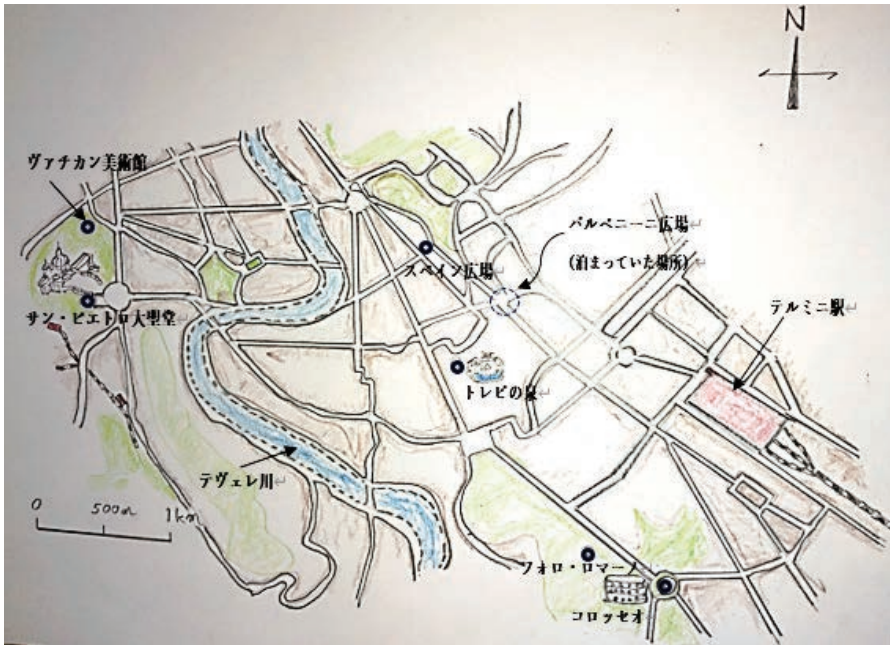
ローマの街は、私の世代であれば、映画『ローマの休日』を見ておられるので観光スポットは、お馴染みであろう。私もそのような場所をこの目で見たいと思った。『ローマの休日』は、学生時代、友人のＹＡ君に誘われて観た。もう一本のライザ・ミネリ主演の映画が良かったと友人と言い争ったが、もちろん、『ローマの休日』の方が後々まで好まれている。当

時の私は少し尖っていたと思う。

フォロ・ロマーノ、コロッセオを見学していた時、イタリアの中学生の修学旅行のグループと出会った。記念写真を撮った。この位の年齢は日本人に興味があるのか、あちこちで話しかけられた。バックパッカーや大人の旅行者よりもコミュニケーションを取る機会が多かったように思う。大人だと話すレベルが高くなるので私の英語力の貧弱さと知識レベルの低さが原因であろう。

トレビの泉はコイン投げで有名だが、私も後ろ向きにコインを投げた。再訪が可能となっているので行きたいが実現していない。それから同じく映画のシーンで有名なスペイン広場も訪れ、「真実の口」にも手を入れてみた。このようにミーハー的な観光を続けた。トレビの泉では、日本人の旅行者とわずかだが情報交換ができた。有名な美味しいパスタを食べてみたいと言ったら、ちゃんとしたレストランで食事をするとべらぼうに高くつくと言われ、もっぱら先に述べたセルフサービスの店に通った。この店でワインの四分の一ビンを時々飲んだ。それで酔っぱらって顔が熱くなっていた。

ローマの歴史をもっと勉強していれば――例えば塩野七生氏の『ローマ人の物語』でも読んでおればと思うが、刊行されたのが一九九二年ということなのでこの本は無理であったが――もっと興味深くローマ市内も回れたと思う。



ローマ

コロッセオ

ローマでの宿の窓から

トレビの泉

スペイン広場

三　バチカン市国

バチカン市国は、テルミニ駅の西方３～４kmにある。サン・ピエトロ広場そして大聖堂の壮大さ・見事さには感激した。さらに、バチカン美術館の美術品にも驚かされた。

サン・ピエトロ大聖堂の内部の写真は撮っていない。写真撮影が禁止されていたのか記憶が曖昧である。有名な『ピエタ像[1]（ミケランジェロ作）』は、聖堂の入り口を入って直ぐ右側にあるとのことだが、写真を撮っていないし、当時の感想も残していないのは大変残念である。

今、ネット上の写真を見る限り、彫刻の中でもう一度観てみたいというのであれば、フィレンツェにある『ダビデ像（ミケランジェロ作）』や『考える人（ロダン作）』よりも、このピエタ像が上げられる。この話を下の弟[2]にすると、彼がヨーロッパを旅行した時に撮った写真を提供してくれた。

サン・ピエトロ広場

サン・ピエトロ広場

ピエタ像（下の弟提供）

1　「ピエタ」は、Pietà、慈悲などの意とされる。この作品にまつわる様々な話は興味深い。マリアの左肩から右脇へ垂れた飾り帯の上にはミケランジェロの現存する唯一の署名があるとのことなど。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。最終更新　２０２３年６月12日（月）18：56　ＵＴＣ　URL: https://ja.wikipedia.org/wiki/ピエタ（ミケランジェロ）

2　下の弟は篠笛奏者で、そのサイトでは篠笛に関する情報の他に、自分の旅行の思い出を『旅日記』として発信している。https://fuenosuke.com/　２０２３年11月現在。

もう一つは、『システィーナ礼拝堂天井画』である。これもミケランジェロの作であるが、天井画は肉眼では細部は見られない。ここは、写真撮影が禁止されており、絵はがきを買った（資料集ご参照）。この他、バチカン美術館の収蔵品の見事さ・多さには感激した。この旅で多くの美術館などを見たが、フレンツェのウフィツ美術館、マドリッドのプラド美術館と並び感銘を受けた美術品の数々であった（もちろん、ルーブルなど他の美術館も素晴らしい。日程などでの心の余裕や予備知識の有無の影響での感想である）。

ローマの一番の思い出は、このバチカン市国の見学かも知れない。もう一度、訪れ、『ピエタ像』や『システィーナ礼拝堂天井画』を観たい。もちろん、パスタをちゃんとした店で食べてみたい。

四　ポンペイ・ナポリ

ポンペイは、ローマから南へ約２００㎞である。ローマから鉄道で往復できると考え、鉄道に乗った。ポンペイの駅に着くまでは良かったが、なんとストライキ中でポンペイの遺跡を見学することができなかった。急遽、予定を変更し、ナポリの街を見学することとした。

ナポリの中央駅から市街部を歩き、当時も有名だった「洗濯ものが干してある街路」を見ながら、海岸に沿い、卵城がある岬まで歩いた。海岸近くまで行けば、ベスビオ火山が見られるのではと思ったが、天気の影響かベスビオ火山はよく分からなかった。また、ピザを食べた記憶がない。食べていないはずだ。食べてみればよかった。街中がきれいでなかったとの感想がある。美術品の見過ぎかも知れない。

ナポリの通り

五　ブリンディジ〜アテネ

次の目的地はアテネである。アテネにはイタリアの長靴のかかと位置にある都市・ブリンディジまで行き、それから船とバスを乗り継いで入る。まずは、ローマから鉄道でブリンディジへ向かうが、列車内で駅弁を食べたことを覚えている。パスタなども入っており美味しかった。

もう一つの記憶が「この頃、どうしても誰かと話したい、それも日本語を使いたい」と強く思ったことである。ブリンディジの鉄道駅で食べ物を売っていたお店の人と注文時に話したか、旅行者の誰かと話をしたか、どうしたか、よくは覚えていないがなんとか解消できた。

アテネへのフェリーに乗るとバックパッカーの旅行者が多かった。話し掛けたか掛けられて、フェリーを降りるギリシャの港名（パトラと思われる）、アテネに行く方法（バスに乗ったはずだが記憶が曖昧）等々を教えてもらい、何とかアテネに着くことができた（五月三日の深夜）。

アテネへの船の船尾より

第五章　ギリシャ

一　アテネの宿とイースターエッグ事件

アテネでの最初の宿は、フェリーとバスで一緒だったイギリス人のバックパッカーたちと同じところだった。ただし、あまりにも騒がしい宿だったので、二日目からは新しい宿に変えた。その宿は、騒がしくはなかったが、大部屋の四隅に寝台のみが置いてある安い宿（一泊５００円程度）であった。朝私が起きるといつもベッドの他の住人はみんな寝ており、私が宿に帰り眠る間までは誰も帰って来ずベッドは空だった。この同宿者たちとのすれ違いには違和感を覚えていた。夜早く寝る自分が変なのかとも思っていた。

そうした日が普通であったが、ある日、その同宿者から声を掛けられた。

「パーティを別の部屋でやっている。一緒に行こう」

「いやいや、僕は遠慮しておく」

「そう言わず、行こう！」

断れず、一緒に行くことにした。部屋に着くと、みんなで飲んだり、食べたりしていた。そして、真っ赤な卵を食べるように勧められた。

「さあ、この卵を食べなさい」

「いやいや、そんな色の着いた変な卵は、日本人は食べない」

想像だが――「これはお祭りの定番の食べ物だから食べなさい」

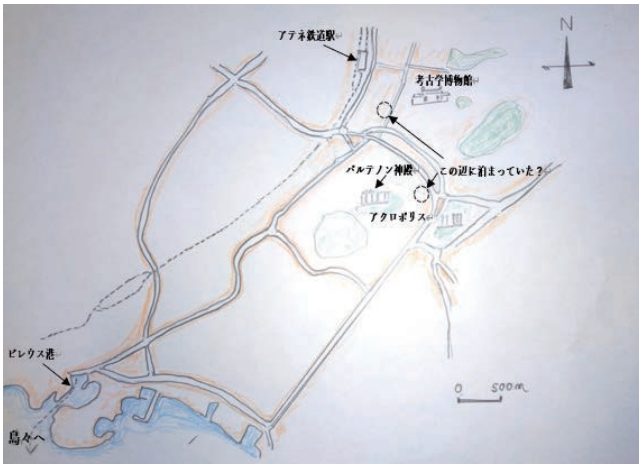
「いやいや、変なものは食べたくない」

押し問答をしたが、結局、断って食べなかった。そして早めに自分の部屋に戻った。旅行から帰ってこの事は忘れていたが、テレビでイースターエッグのことを紹介していた。ギリシャでのイースターの正確な日付は分からないが、お祭り＝復活祭＝イースターのごちそうの一つとして赤く色づけした卵を食べることは慣習とのことであった。そのことを知らなかった自分がお粗末である。知識がなくお祭りムードに参加しなかったことを申し訳ないと今は思う。やはり、旅先の文化などを前もって調べておくこと、もしくは教養として一定レベルの知識を持っておくことの大切さを思い知った出来事であった。こんな時に、ジャンプできない小心な自分が出ていたと思う。

二　パルテノン神殿とアテネの市街部

アテネでのハイライトは、やはりパルテノン神殿の見学である。アテネの中心部にあり、宿から歩いて行くことができた。丘の上にあるので遠くからでもよく見えて迷うことはなかった。遺跡に特に興味があるような自分ではなかったが、これが西洋文化の起源の一つとされる建造物と教科書などで紹介されていたので、何枚も記念写真を撮った。

宿への帰り道の途中、路地裏からエキゾチックな音楽が流れてきた。音楽を奏でて踊っている様子だった。音楽が東方を感じさせ、ヨーロッパというよりも、中東と思われる雰囲気があった。これより、さらに東方に行けば、トルコのイスタンブールである。結局、先の日程を考えてギリシャより東方へは行かなかっ



アテネ

た。イスタンブール[1]へ行かなかったことは残念である。

アテネ市内を歩き回ると大道芸人のショーに出会った。これにもヨーロッパとは違う雰囲気を感じた。

なお、アテネでは、一本五十円くらいのシシカバブを四本も食べたが、安くてしかも美味しかった。

パルテノン神殿

アテネでの宿の前の通り

1　イスタンブールへは行けなかったが、アテネよりさらに中東を感じさせる都市である。最近、テレビで『007／ロシアより愛をこめて』をたまたま観たが、この映画を、1966年、高校進学で佐世保に下宿した直後、下宿を世話してくれたEさんの案内で、佐世保市で最も有名な映画館「カズバ」で観たとの記憶がある。イスタンブールのモスクのシーンは今見てもエキゾチックな雰囲気が十分。この映画の冒頭・ラストではベニスも出てくる。イスタンブールのシーンは、『名探偵ポワロ／オリエンタル急行の殺人』がもっと素晴らしいと思う。なお、佐世保で観たのは『サンダーボルト作戦』かも知れない。記憶が曖昧である。

路地裏から音楽が

大道芸人のショー

三　イドラ島などへの島めぐり日帰りツアー

エーゲ海の島々は、白い家並みなどの景観が有名である。特にミコノス島・サントリーニ島が有名であるが、アテネの港・ピレウス港からの日帰りツアーも用意されていた。こちらは、イドラ島などを巡るもので、料金も手が届く程度だったので参加することにした。上陸した島はイドラ島であった（五月六日であった）。白い家並みは十分見応えがあった。また、上陸した島で革製のベストを自分用に買った。このベストは帰国してからも二十年間程度は愛用したと思うが、その後、誰かにあげてしまった。

また、ギリシャでは、タコを含め魚介類が多く食べられていた。イドラ島でも昼食に食べたが（一皿３００円程度）、美味しかったのでアテネに帰ってからも、また魚介類を食べた（小エビ、カニ、ビール、パンで２２５０円程度、食べ過ぎた）。

イドラ島

イドラ島にて
（購入したベストを着ている）

イドラ島にて

四　デルフィへの日帰りツアーそして再びイタリアへ

デルフィは、アテネの北西約１８０㎞の山間地域にある有名な遺跡である。バスツアーに申し込めば、少し遠いが十分日帰りツアーが可能である。ガイドは英語のみで日本人の参加は私のみであったが、英語の案内は少しだけしか聞き取れなかったが、劇場跡などを楽しめた。

ただし、帰り際に少々不快な思いをした。ツアー一行でお土産屋に寄ったが、万引きか何かがあった模様でツアー一行が疑われ、私一人がアジア人であったためか、疑われたような質問があった。英語の遣り取りで正確には分からないが、疑われたことは間違いないと思う。大きな問題にはならなかったが、アジア人への差別みたいなものを感じた。

ヨーロッパ旅行中、人種差別的なものを感じたのはこの時のみであった。

デルフィ

デルフィの劇場跡

こうしてギリシャの旅を終え、再び、同じ経路でイタリアに戻った。そして、イタリアを北上し、ウフィツ美術館などで有名なフレンツェを目指した。なお、気まずい思いの経験をしたが、ギリシャに悪いイメージはまったくない。

第六章　フィレンツェ・ピサ・モナコへ

一　フィレンツェ

フィレンツェは、イタリアの中部のやや北寄りにある都市で、モナコ・マルセイユへ向かう鉄道の中途でもあり、再びイタリアに戻った旅路での大きな目的地であった。ご存知のように、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂（ドゥオーモ）、ヴッキオ橋、ウフィツ美術館、ダビデ像など、見どころ満載の都市である。

駅に着き、早速、ホテルを紹介してもらい、こじんまりした部屋に落ち着いた（朝食付きで１７００円程度）。観光名所は、すべてホテルから歩いて行ける場所にあった。

早速、ヴッキオ橋、ウフィツ美術館を目指した。

ウフィツ美術館は、ルネサンスを代表している作品を数多く観られる美術館である。また、建物の外観・室内とも美しい。彫刻が並ぶ回廊を通り、ボッティチェリの『春』や『ビーナスの誕生』が飾られている部屋に入った。この目で著名な絵を確認することができた。館内からの眺めと思うが、ドゥモーが見える眺望が完璧であった。

フィレンツェ（道路など適当）

ヴェッキオ橋

ウフィツ美術館前の広場

ウフィツ美術館の中

次にミケランジェロの『ダビデ像』[1]を捜した。ウフィツ美術館近くにもダビデ像があったが、レプリカらしい、本物はアカデミア美術館にあるとのことで、そこへ向かった。着くと大勢の人達が『ダビデ像』を取り巻いていた。写真撮影が許されていたので写真をたくさん撮った。高さが約５ｍもある像で、下から見ると全体のバランスがよく分からない。ミケランジェロの代表作の一つで今にも動き出しそうな気配まで感じさせる像だが、個人的には、前述のピエタ像の方が美しいとは思う。

ウフィツ美術館からのドゥオーモの眺め

フィレンツェの眺め

ダビデ像

1　古代イスラエルの王。羊飼いから身を起こし王となった。羊飼いの杖と石投げだけを持ってゴリアテを倒したとされる。石を投げようと狙いを定めている場面の作品とされている。ドナテッロの『ダビデ像』も有名。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。２０２３年10月20日（金）08：16　ＵＴＣ　URL:https://ja.wikipedia.org/wiki/ダビデ

フィレンツェを見どころなどの詳細については、ぜひガイドブック・美術本・各種のエッセイなどを読んでいただきたい。映画[2]でも素晴らしいシーンを見ることができる。

街の景観や美術館の他に記憶に残っていることは、宿近くの小さなレストランに入った時のことである。ローマではビッフェスタイルを利用することが多かったが、この時は、思い切ってレストランに入った。

さて、メニューリストを持ってきてもらったが、イタリア語は読めない。困った。かろうじて、オムレツ、ビフテキだと思われる料理は何とか分かった。そして、ビフテキを注文した（６００円程度だった）。出てきたのは、骨の付いたビフテキの皿だった。初めての骨付きのビフテキであったが、ものすごく美味しかった。

フィレンツェでは、街中の景観、『ビーナスの誕生』そして『ダビデ像』の印象も強いが、このレストランでメニューが読めなかったこととステーキが美味しかったことの記憶も強い。後で調べてみるとフィレンツェの名物料理[3]とのことであった。なお、宿の近くの通り沿いに様々な手作りパスタを展示している店があった。小さいが様々な形状のものがあり珍しかった。次にチャンスがあればその時は食べてみたい。

花の都と言えば、日本ではパリであるが、フィレンツェも花の都と呼ばれている。美術館に入らなくても街を散策するだけでも、ヨーロッパの歴史や美しさを感じることができる。しかも、パリとは異なり歩いて回ることができ、空がいつも見えるので楽しめると思う。

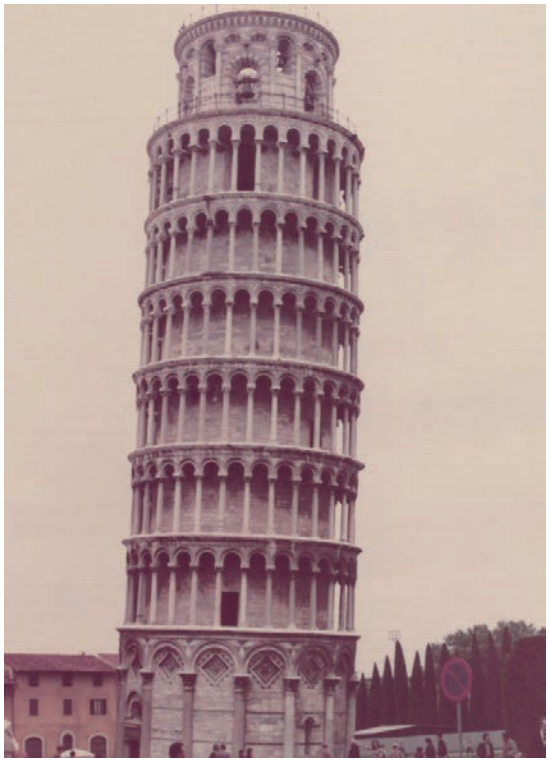
イタリアにもう一度行けるのであれば、フィレンツェはぜひ再訪したい。そして、ビフテキと小さめのパスタを食べたい。

2　例えば、『冷静と情熱のあいだ』２００１年に公開された日本映画。竹野内豊、ケリー・チャンが主演。フィレンツェの他、ミラノの街も出てくるが、ドゥオーモでの再会シーンなど見所がたくさん。ぜひご鑑賞を。イタリアのシーンも楽しめるが映画そのものももちろん楽しめる。ケリー・チャンが魅力的と思う。このタイトルをもじって恥ずかしいが「冷静と欲望のあいだ」とよく使っていた。
『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。２０２３年４月８日（土）ＵＴＣ　URL.https://ja.wikipedia.org/wiki/冷静と情熱の間

3　フィレンツェで一番有名な郷土料理と言えば、間違いなく『ビステッカ アッラ フィオレンティーナ』で、日本ではフィレンツェ風Ｔボーンステーキと表記されることが多い、ボリューム満点の骨付き特大ステーキとのこと。大迫力のフィレンツェ風ステーキトゥッタ・イタリア、URL.https://www.tutta-italia.com/destination/13607.html/　２０２３年10月31日現在。

二　ピサの斜塔

さて、フィレンツェを堪能し、次の目的地のモナコへ向かうことにした。鉄道の経路をユールレイルパスの地図や時刻表で調べてみると、中途にピサ市があり、有名なピサの斜塔が駅から歩いて行ける場所にあることが分かった。ただし、この日中にフランス・モナコに入り、宿泊は、モナコでと決めていたので時間はなかった。時刻表を調べると、ピサの駅で途中下車し、二～三時間以内で次の列車に乗れば、何とか夜遅くでもモナコ着が可能であることを確認した。ピサの斜塔をこの目で見て、写真を撮りたい。なんと、ミーハー的・せわしい予定であろうか。私の性格が出た決定であった――それでも決行。方向を確認し、急ぎ足に歩いた、走った。しばらく行くと、斜塔のテッペンが見えてきた。そして、斜塔の真下近くまで行くことができた。写真撮影をする時間のみがあった。周辺を見たりすることもせず、時計を気にしながら、駅にすぐ逆戻り。そして、予定の列車になんとか乗った。



ピサの斜塔

三　モナコ駅で

予定の列車に乗ったところまでは良かった。少々、夜の遅い時間にはなるが、モナコで下り、小さなホテルに泊まり、翌日より、モナコのカジノや「モナコ海洋博物館」などを観光する予定であった。

しかし、モナコ駅へ着くと、なんと、人、人、人……――これは何だ！　最初は分からなかったが、今日はモナコ・グランプリレース[4]の最終日で先ほどまでレースなどが行われていたことが分かった（五月十一日、日曜日）。困ったが、宿を見つけるしかない。インフォメーションセンターが閉まっていたので街に出た。泊まれそうなホテルの看板を見つけ、手当たり次第に英語で「部屋が空いていませんか？」を繰り返した。答えは「コンプレ・コンプレ」の連続で、フランス語で満室と答えているようである――最初はコンプレという発音が十分聞き取れなかったし、コンプレの意味も知らなかった――ただ、表情から「一杯だよ、こんな日に空き部屋なんかあるはずない」と言っていると推測された。何軒回ったかは覚えていないが、諦めて駅に戻り、モナコ駅のベンチを借りて初めて野宿することとした。

しかし、しばらくすると、駅員から声を掛けられ、「ここは野宿禁止だ」と言われた。正確にはそう言っているように思われた。野宿もあきらめざるを得なかった。

――さぁどうする？

4　モナコグランプリは、モナコ公国のモンテカルロ市街地コースで行われるＦ１世界選手権レースの一戦である。Ｆ１カレンダーのなかでも最も厳しいコースのひとつと言われており「世界３大レース」の１つに数えられ、Ｆ１およびモナコの象徴ともいえる名物レースとなっている。五月の木曜日開催が定例などとのこと。
モナコグランプリ、『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。２０２３年７月２日（日）13：00　ＵＴＣ　URL:https://ja.wikipedia.org/wiki/モナコグランプリ

第七章　モナコ・マルセイユ

一　モナコ駅のつづき

次の手を考えた。モナコが無理なら、少し先のニースまで行って部屋を捜してみよう。深夜近くなってきたがニースに向かった。ニースの中央駅（ニース・ヴィル駅）で降りるべきところを、間違って一つ手前の駅（ニース・リキエ駅）で降りてしまったようだ。アナウンスが「ニース」と聞こえたように思えたので慌ててそこで降りたのだ。寂しそうな駅で人影がほとんどなかった――しまった。降りる駅を間違えた。

バスが止まっていたので運転手に尋ねてみると、そのバスはニース中央駅付近まで行くバスで、中央駅付近にはホテルがあると言っているようである。深夜近くになっていたが、バスに乗り中央駅に向かった。中央駅に着くと、運転手がホテルのありそうな方向を教えてくれた。しばらく歩くと、ホテルのサインが見えてきた。

深夜だったが、そのホテルで尋ねると泊めてくれるとのこと――オウ・マイ・ゴッド。そしてゆっくり休めた（二泊したホテルは一泊１５００円程度だった）。

二　モナコに引き返して

翌日、モナコに引き返し、まずは「モナコ海洋博物館」を訪ねた。この海洋博物館の館長は、ジャック＝イヴ・クストー

氏[1]で、テレビ番組『クストーの海底世界』を見ていた私のあこがれの人物の一人であった。彼の海での仕事振りを観ていてとにかく理想の人物と思っていた。水族館や海洋考古学に関する展示物を見学した。

テラスに出ると、偶然にもなんと「クストー氏」と思われる方が、何人かのメンバーと話をしながらお茶を飲まれている姿を見つけた。失礼だが、そっと写真に収めさせていただいた。海のそばで育ち、海が好きで、海に係る仕事に就くことが中高生からの夢であった。その延長線上で大学は水産関係を希望していたが、就職のことも考えて土木系――海の仕事に関係ありそうと思われた水工土木――を選んだ。結局、海関係の仕事には就けなかったが、波乗り遊びは今も続けている。

モナコ

クストー氏（海洋博物館にて、右端）

1　水中考古学の先駆者。調査船カリプソ号で海や海洋生物の研究を行う一方、書籍の出版や記録映画の放映により一般市民への啓蒙活動も行った。日本では、1970年代から1980年代にかけてのテレビドキュメンタリー番組『驚異の世界・ノンフィクションアワー』（日本テレビ系列）で放送された、自身も出演する『クストーの海底世界』シリーズで知られる。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。2022年1月28日（金）04：17ＵＴＣ　URL:https://ja.wikipedia.org/wiki/ジャック=イヴ・クストー

次にカジノに向かった。

ラフな服装ではあったが、カジノの玄関は通過させてくれた。スロットマシンを通り過ぎ、ルーレットの会場を覗いたが、言葉は一切聞き取れないし、雰囲気にも参加できそうな気配はまったく感じられなかった。ただし、スロットマシンなら簡単である。初めてのカジノ経験[2]として、スロットマシンに挑戦した。少しは勝つ瞬間もあったが、あっという間に手元のお金はなくなった。

三　マルセイユ

マルセイユは、この旅の大きな目的地のアルジェリア訪問の基地であった。もちろん、街としても十分楽しめる場所であった。まず、宿泊場所に落ち着いたが、この宿は、マルセイユの旧港に面した位置にあり、歩きまわるのに最適であった。宿は古い建物で、エレベータは鉄製でかごの上下が鉄の柵から透けて見えるしろものであった。日本では中々お目にかかれない旧式なものであったことが思い出される。

2　カジノ経験としては、その後、新婚旅行時のマカオでの「大小」、ソウルでの「スロット」、プサンでの「ルーレット」、済州島での「ルーレット」の経験があるが、マカオで少し勝てた記憶以外は全敗。

マルセイユ

宿を出て、まずは中央郵便局を目指した。そこに、絵はがきを送っていた女友達からの返事が来ているはずだった。半信半疑であったが、訪ねるとちゃんと返事が来ていて感激した。次に、丘の上に有る「ノートルダム・ドゥ・ラ・ガルド寺院」を目指した。丘を登るとこの場所からは、旧港のある辺りのマルセイユの古い市街部がよく見えた。なかなかの眺望である。また、観光客が多くはなく寺院内の喫茶室でくつろげた。

マルセイユの旧港

マルセイユの旧港

丘を下り、旧港近くをブラブラした。魚を売っている屋台や魚釣りをしている風景があり、私にはなじみやすい情景であった。食事は、有名なブイヤベースなどを旧港に面したレストランで食べた。ブイヤベースは特段に美味しかったとの記憶はないが、生ガキの一皿（五～六個入り、４００円程度）やイワシのフライ（５００円程度）はとても美味しかった。

ノートルダム・ドゥ・ラ・ガルド寺院

寺院の中で

旧港の屋台

3　生まれた家の前に汽水の池があり小さい頃からよく釣りをしていた。そのこともあるのか、釣りに関する文学も若い頃はよく読んだ。開口健氏の『フィッシュ・オン』やヘミングウェイの『大きな二つの心臓の川』が特に好きだった。この旅では釣りはできなかったが、家族とのニュージーランド旅行ではクイーンズタウンの湖でマスを釣った。釣ったマスを中華料理店に持ち込み調理してもらった。美味しかった。なお、この時、13歳の息子は家族を代表して初めてバンジージャンプをした。一皮むけた感じとなり子供から少年になったようだった。私は怖くてできなかった。

四　イフ島（岩窟王の舞台）見学

子供の頃に読んだ『巌窟王』（正式名は『モンテ・クリスト伯』）の小説の舞台のイフ島は、旧港から船で二十分ほどの沖合に浮かぶ小さな島である。小説のイメージで、絶海の孤島と想像していたが、船に乗ると直ぐついた。また、断崖絶壁のイメージもあったが、それほど険しい断崖はなかった。上陸もでき、他の観光客とともに牢獄跡などを見て回った。教科書や本で有名な場所を数々回ったが、このイフ島のみが唯一、期待外れと言える場所であった。本[4]で読み想像するほうが良かった。

イフ島

イフ島の牢獄

4　子供の頃に読んだ冒険小説としては、『巌窟王』の他、コナン・ドイルの『失われた世界』が思い出される。ジャングルでの焚火の時、恐竜に襲われるが、主人公が火の付いた大きな枝で撃退するシーンが印象的。こちらのモデルは、南米のギアナ高地とのこと。こっちには行けないだろう。

五　アルルとアルジェリアのビザ

ゴッホの『アルルの跳ね橋』で有名なアルルが、マルセイユから西に３０kmの位置にある。マルセイユから日帰りでアルルに向かった。跳ね橋を目指したが、どうしても分からない。ただし、アルルの街中で地元のオジサン達が「ボーリング原型みたいなゲーム」をしているところやローマ時代の遺跡を見物できた。また、フランスの大河の一つローヌ川の流れを確認した。ドナウ川と比較すると小さな川かもしれないが、私には十分に大きな川で豊かな流れであった。

アルルでのおじさん達の遊び

ローヌ川

アルジェリアに入国するには、ヨーロッパ諸国と異なり入国ビザが必要である。地図でアルジェリア領事館を捜し訪問した。領事館の職員は、目鼻立ちがすっきりしており対応も的確で、『千夜一夜物語』の王族のイメージが浮かんだ。何とかビザを取得することができ、アルジェリア訪問の第一関門が突破できた。地中海をアルジェへと渡る船は、新港から出ているようだ。新港は、旧港の北にあり、波止場はそう遠くはなかった（往復約３万円のチケットを購入した）。

予定通り、大きな荷物は宿が預かってくれるとのことで荷物を減らしてアルジェへ向かうこととした。

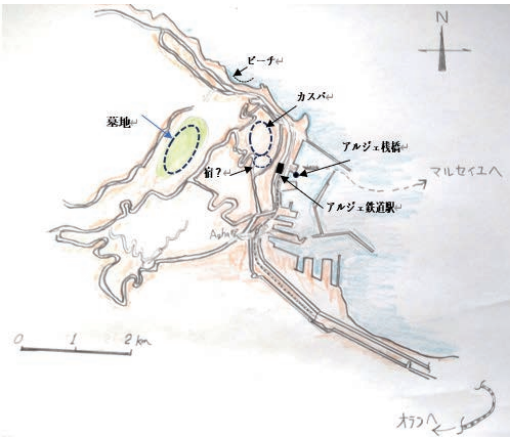
第八章　アルジェリア

一　船旅・アルジェ着

アルジェリアの首都・アルジェまでは地中海を一泊二日で渡る船旅である（五月十六日午後四時半発、十七日午後三時着予定）。船は、バイカル号と比較すると、やや小さく思われた。この船の記憶として、乗客のほとんどが出稼ぎ労働者風のアラビア人と思われ領事館の職員のイメージと異なっていたこと、船室、特にトイレが汚かったことが思い出される。船室の椅子で一晩を過ごしたが夜は少し寒く中々眠れなかった。

ようやくアルジェの港が見えてきた。上陸前、不安そうな旅行者の一人に話しかけられたが、こちらも不安でありアドバイスができなかった。

船からのアルジェ



アルジェ
（道路などはおおまか）

下船し、最初はいつもの宿探しである。

インフォメーションセンターみたいなところは分からず、看板を捜しながら街を歩いた。ホテルそのものが少ないように思われた。四軒目でやっと泊めてくれる場所が見つかった。きれいな地区から少し外れ、カスバ[1]地区の近くであった。個室ではあったが、古く、設備もきれいではなかった。アテネの安宿と同じレベルの宿と思われた。しかし、やっと見つかって一安心であった。

アルジェのメイン通り

カスバ地区

1　カスバはアラビア語で「城塞」という意味がある。オスマン帝国領下の16世紀において、アルジェの丘に建てられたオスマン帝国の太守の城塞のことである。この城塞と海岸線と起伏のある地形に囲まれた一帯で人口が増加し、アルジェの旧市街が形成された。そして時代が下ると、この旧市街自体のことも「カスバ」と呼ばれるようになったとのこと。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。２０２１年３月11日（木）02：00　ＵＴＣ　URL: https://ja.wikipedia.org/アルジェのカスバ

二　市内散策・カドゥ君との出会い

到着日、未だ明るかったのでホテルを出て、海岸沿いの大通りを散策した。東洋人はいない。大通りの外観はフランス国内とさほど変わらいように思えた。ただし、通行人はやはり違う。マルセイユでもそれまでのヨーロッパの街中の通行人と少し変わってアラブ系の人達が目立ったが、ここはアラブ人達の街である。

そんな風に歩いていたら、一人の青年から声を掛けられた。英語で――

「どこから来ましたか?」

「日本です」

「私は数学を勉強している学生です。英語も勉強をしています。ボブ・ディランのファンです。英語の勉強のためアルジェの街を案内しましょうか?」

少し怪しさを感じたが、ボブ・ディランのレコードも持っているとのことを聞いて、ひとまず信用することにした。

そうして、彼の案内で、その日はカスバ地区やモスクを見物した。一人では、カスバ地区の中へ入る勇気がなかったので幸運と思われた。カスバ地区の中の食堂で一人５００円ほどの夕食（イワシのフライだったと思う。美味しかった）を取り、ホテル近くに戻ったのは、夜の十時くらいだった。

彼は、帰りのタクシー代をくれと言った。家がかなり遠いとのことで、少し怪しんだが、２０ディナール（１６００百円）を渡した。明日は、午前八時に迎えに来て、カスバ地区の中心部などを案内してくれることとなった。

アルジェの通り

アルジェの公園で

三　トラブルの予感

次の日は、約束通り、カドゥ君の案内でカスバの中心地区を訪ねた。

案内されたのは、中心地区の他、近くにある墓地であった。なぜ墓地を案内されたかはよく分からなかったが、今での推測は、アルジェリア戦争[2]のことを私に教えるためではなかったと思われる。その戦争が終わり、未だ十数年しか経過していないこと、そのおかげでアルジェリアが独立したことなど、アルジェリアの歴史を勉強しておらず、植民地時代のカミュの小説に描かれている街や海の風景（一九三〇年後半の頃か?）以外は基礎知識がなかった。本当に不勉強であった。反省される。

墓地では、彼は墓から頭蓋骨を取り出し、私に見せた。その意味はよく分からなかったが、さすがに写真撮影はためらわれた。

帰り際になると、「講義に使う本代のため、６０ディナールを貸してくれ」とか「娼家の中を撮影するからカメラを5分間預けろ」とか言いだした。これは変だと思い始め、「君の家へ連れて行きボブディアンのレコードを見せて欲しい」と要求すると、上手くはぐらかされた。

2　１９５４年から１９６２年にかけて主にフランス領アルジェリアで勃発した、フランスとその植民地支配に対抗するアルジェリアとの間の独立戦争。この戦争は双方に多くの犠牲があったが、結果的にはアルジェリア側の勝利に終わりエビアン協定が締結され停戦しアルジェリアは独立を達成したとのこと。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。２０２３年9月13日（水）14：37　ＵＴＣ URL: https://ja.wikipedia.org/アルジェリア戦争　映画『アルジェの戦い』でも有名である。

四　海岸へ

翌日は、一人で待望のアルジェの海岸などを訪れた。異邦人の舞台の海岸と同じかどうかは確信が持てないが、岩肌と砂浜からなる海岸があったので散策した。海水浴のシーズンには早いのか泳いでいる人は見なかった。『異邦人』に出てくる海岸を少しだけだが味わった。歩いていると少年たちが寄ってきた。どこから来たのかなどを尋ねられ、身振り・手振りを交え話していたら、空手やブルース・リーのことが話題となった。日本人なら空手は知っているだろうということで、空手のポーズを要求された。決してうまくはなかったが、横蹴りのポーズを行い少し納得してもらった。なお、大通りを散策中、アルジェで働いているという三人の日本人に会い、お茶（コーラ）を飲んだ。何を話したか覚えていないが、この時以外は、日本人には会わなかった。

アルジェの海岸

海岸で

五　オランへ日帰り旅行

オランは、カミユのもう一つの小説『ペスト』の舞台である。アルジェから西へ列車で五時間程度の中都市である。日帰りで行けそうなので、朝早く列車に乗り、オランへ向かった。鉄道のルートを見ていると一部砂漠地帯を通るように思われた。

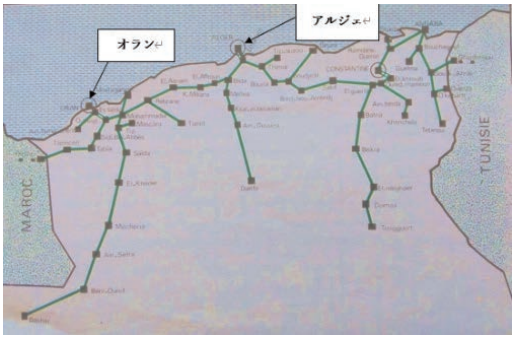
オランに着き、早速、街中を見物した。今度は、ラバ君という少年が寄って来て、街を案内するとのことであった。この少年には何らあやしい点は感じられず、街中や公園を案内してもらった。時間をかけてじっくり観れば、アルジェとの違いが分かったと思うが、特別なことはその時は感じられなかった。後日、『ペスト』を詳細に読むと、「街が海に背を向けて建てられている」「中心部から海岸までの距離がアルジェと比較して少し遠い」ことなど、街の特徴として興味深い記述があるが、そこまでは、当時読み込めておらず、これも勉強不足だった。

ラバ君とは記念写真を帰国してから送るという約束をして、手紙も一度もらったが、書いてある住所が判読できないなどの理由で写真を送っていない。大変申し訳なく思っている。

なお、この旅からかなり経ち会社人生を送っていた四十代の頃、上司の紹介がきっかけでイラン人のエマミ[3]さんと仲良くなった。夫婦でテヘラン、カスピ海、ヤズドを案内し

3　エマミさんからは、たくさんのことを教えてもらった。バス・ウィンドウ・セオリーは、「バス内から外を見ると、回りが動いているように見えるが、本当は自分が動いている」のが真実という話。世の中が動いているように見えるが自分が動いている。時間は常に過ぎて行っている。一瞬一瞬を大切に！と解釈していた。

オランへの列車から（砂漠が見えた）



アルジェ〜オランの鉄道経路
（当時入手した案内図を使用）

てもらった。また、彼の家族（ヤズド在住）からも歓待してもらった。こんなこともあり中東の人達には親近感がある。このイラン旅行の時は、本格的な砂漠にも案内してもらった（ヤズド近郊の砂漠）。そこで薬莢を拾った。イラン・イラク戦争の時のものとの説明であったが、本当かどうかは分からない。しばらくはテレビ台の上に飾っていたが今は失くしてしまった。

オランの街

ラバ君と

六　口論・アルジェリアを出国

アルジェに戻ると宿にカドゥ君が訪ねてきた。再現すると次のようなやりとりをしたと思う。

「街を案内したのに、十分なお礼をもらっていない」
「君は英語の勉強のため、案内すると言ったはずだ」
「僕は自分の時間を犠牲にして案内した。お礼は当然だ」
「食事代、交通費は僕が払った。余分なお金は持っていない」
「お金がないなら、カメラが欲しい」
「何を馬鹿なことを言う。カメラはこの一台だけだ」

こうして、だんだん声が大きくなっていき、つかみ合いにはならなかったが、大そうな口論となった。英語で口論したはずだが日本語も交えていたかも知れない。なんとか、お金もカメラも渡さずおしまいとなって部屋にも戻ったが、次第にその夜が怖くなってきた。彼が訪ねてきて、もう一度口論になったらどうしようと思った。部屋の鍵を厳重にロックしようと試みたが、ロックの調子がおかしいことに気づいた。なんというオンボロな部屋――あわてて、ドアの場所にバリケードを作ることとした。机や椅子などを積み上げた。明日は、帰りの船便がある日だ。便があって良かった。少しでも早く、アルジェを離れたいと思った。結局、彼は訪ねては来なかったので安堵した。

明くる日、マルセイユへ戻るための船着き場へ行き、アルジェリア出国の手続きをしている時だった。担当の役人と次のようなやりとりがあった。語学力のせいで正確には分からないが――

「どこのホテルに泊まっていましたか?」
「……リッツホテルとかいう小さなホテルです」
「アルジェには、そのような名前のホテルはない」
「間違いなく、そのような名前のホテルであった。発音は確かではないが、うそは言っていない」
「……」

信用されていないようである。

「別室に来て欲しい」

出航の時間が迫っているし、早くアルジェリアを出国したいのに「何てことだ」と思ったが、別室でまた似たような問答をした。後日、考えてみると、日本赤軍のメンバーと疑われていたのではと推測された。一九七五年前後、日本赤軍は、ヨーロッパや中東などでテロなど[4]を起こしていた。

結局、一時間程度の拘束で解放され、乗船できた。泊まったホテルは正確に覚えておくことが重要だと思った。

このような嫌なこともあったが、カドゥ君には彼なりの言い分があったと思う。彼やアルジェの街に悪い気持ちは抱いていない。

なお、日本赤軍は、当初、パレスチナ解放人民戦線（ＰＦＬＰ）への義勇軍として活動を開始し、一九七四年に正式の日本赤軍と名乗った[5]とのことであるが、当時、その名前は知ってはいたが自分の旅行に影響が出るとはまったく予想していなかった。今起きている「ロシアのウクライナ侵攻」や「イスラエルとハマスの戦い」のことを思うと、当時は、情報網も発達しておらずそのせいもあるだろうが、平和だったと思われる。安全に旅行ができるということはいかに素晴らしいことか、今、身に染みてそう思う。

4　日本赤軍事件、一九七二年のテルアビブ空港乱射事件、一九七三年のドバイ日航ハイジャック事件、一九七四年のハーグ事件など。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。２０２３年5月7日（日）07：57　ＵＴＣ　URL: https://ja.wikipedia.org/日本赤軍事件
なお、あさま山荘事件は一九七二年の出来事。

5　日本赤軍の名称は以下を参照。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。２０２３年10月15日（日）03：33　ＵＴＣ
URL: https://ja.wikipedia.org/wiki/日本赤軍

第九章　スペイン

一　アビニョン経由でマドリッドへ

マルセイユで預けていた荷物を受け取り、マドリッドに向かうこととした。途中、『アビニョンの橋の上で』の歌で有名なアビニョンに寄った。今度は、スムーズにアビニョンの橋を見つけることができた。

マドリッドに着き（五月二十四日早朝）、小さいがきれいなホテルに泊まった（一泊１０００円程度）。マドリッドの街は、街路などの清掃が行き届いており、大変美しいとの印象を持った。街中の公園を散策し、まずプラド美術館を訪れた。

プラド美術館には、『裸のマヤ』や『着衣のマヤ』などで有名なゴヤ[1]の作品が多数展示されている。また、エル・グレコやベラスケスなどのスペイン絵画の他、イタリア絵画なども多数展示されている。展示数と広さの関係などから、ルーブル美術館よりも鑑賞しやすいかも知れない（昔の個人的感想である）。なお、このプラド美術館でのゴヤの絵画をきっかけで帰国後、堀田善衛作の『ゴヤ』を読んだ。「不気味だが人を引き付ける絵が数多い」「数奇な運命であった」程度の記憶なので読み直してみたい。

1　代表作として『カルロス4世の家族』、『着衣のマハ』、『裸のマハ』、『マドリード、１８０８年5月3日』、『巨人』などがある。プラド美術館所蔵。これらは聴力を失って以後の後半生に描かれたものであるとのこと。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』２０２３年10月25日（水）04：59　ＵＴＣ　URL: https://ja.wikipedia.org/wiki/フランシスコ・デ・ゴヤ

二　闘牛見物

スペインといえば、プラド美術館の他は、フラメンコと闘牛程度の知識しかなかった。フラメンコはハードルが高そうであったので、闘牛見物を目指した。会場を地図で見つけその場所に行った。しかし、チケットは売り切れていた。悩んでいると、転売しているオジサンが寄ってきて、正規の値段の二倍を提示してきた。迷ったが、毎日は開催していないようなので、この機会を逃すと観られないと思い、チケットを買った。屋根と太陽の関係で、陽が射す席、陰になる席で値段がかな

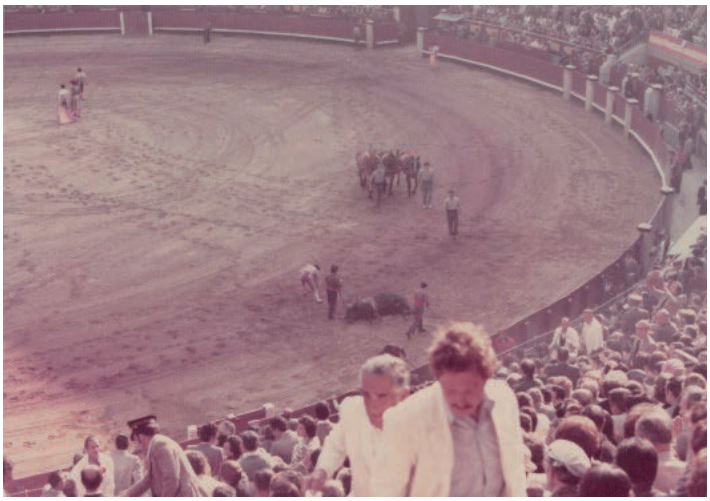
マドリッドの街

マドリッドの街

り異なっていた。もちろん、安い方を買った（約２０００円）。

闘牛が始まった。順番で出し物が変わっていく。詳細を述べることはしないが、最後、牛が殺されるのを見て良い印象はなかった。もっと、闘牛の見どころを勉強しておけば違った感想があったかも知れないがその程度の感想であった。

闘牛場にて



闘牛の最後のシーン

闘牛場のチケット

三　トレド日帰りツアー

トレドは、マドリッドの南方約７０kmにある古い街である。街並み全体の景観、トレド大聖堂、エル・グレコの絵画などで有名な観光名所である。マドリッド市内からの日帰りツアーに申し込み、訪問した。

このツアーには特別の思い出がある。昼食にパエリアが出た。大鍋で作られたものがツアーメンバーに配られたが、初めてのパエリアだったし、ずっと米を食べていなかったのでとても感激した。トレド大聖堂や街並みも良かったが、このパエリアがトレドというよりもスペインの一番の思い出かも知れない。帰国後、パエリアが福岡でも食べられるようになったので何度も食べた。

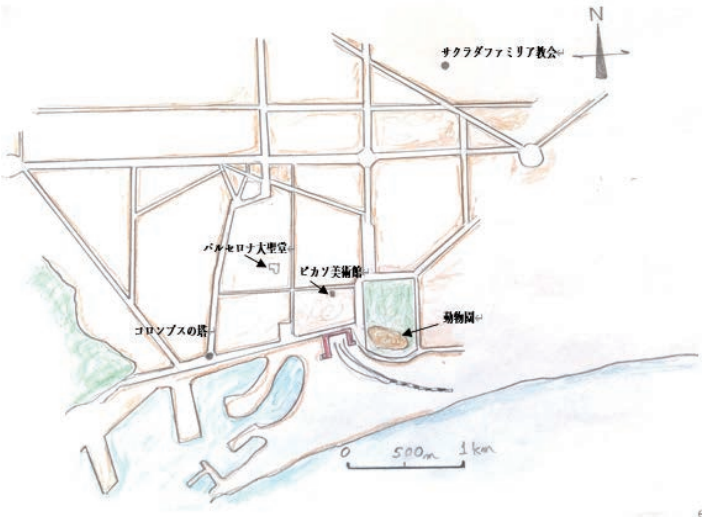
なお、西へ進むとポルトガルであるが、日程を考えて行かなかった。少し残念である。また、後日バスク地方のことを知った。今なら、訪問していただろう。そして、パエリア以外の料理も楽しんだであろう。

トレドへ向かう途中のエスコリアか

トレドの遠景

四　バルセロナ

バルセロナと言えば、今では『サクラダ・ファミリア』が最も有名であろう。当時は、そこまでは有名な教会とは知らなかった。自分の知識不足であった。ガイドブックを参照して、まずは『ピカソ美術館』を訪れた。細い路地にある古い建物に在ったように思う。この美術館は、ピカソの若い頃の作品――「青の時代」として有名な頃の作品などが展示されているとのことであった。ピカソから一般的に想像される抽象画の他に、この美術館には写実的な作品も数多く展示されており私には十分楽しめた。



バルセロナ

ピカソ美術館

ピカソ美術館

次に、港に「コロンブスが乗った船（レプリカ？）」があるとのことでそこに行った。乗船できた。

その次に動物園を訪ねた。白いゴリラで有名とのことで惹かれた。確かにそこにいた。動物園などは、公園を兼ねているような場所であるのでくつろげた。

『サクラダ・ファミリア』を訪問しなかったのは残念である。白いゴリラよりもそっちを見るべきであった（当時は、水族館や動物園が好きだった）。サクラダ・ファミリアは観なかったが、バルセロナ大聖堂は訪問した。見事な建築物であった。

コロンブスの塔

コロンブスの船

白いゴリラ

バルセロナ大聖堂

そして、次の目的地、スイスのツェルマットを目指した。

移動の列車で、欧米人のバックパッカーのグループと一緒になった。中にはきれいな女の子もいたが、そのグループの輪の中へ入れなかった。私の性格の問題もあったが、やはり語学の壁が大きかった。その後、英語を勉強する機会もあり、当時よりは少しはマシになったが、現在もまったく不十分である。

第十章　スイス・マッターホルン

一　ツェルマット

ツェルマットは、マッターホルンへのアクセスの町として有名である。フィスプ（ＶＩＳＰ）まで行き、乗り換えてツェルマットの町に着いた（五月二十九日の午後）。この町は、自動車の乗り入れが禁止されており、馬車が走っていた。また、山小屋風のきれいな建物[1]が並んでおり、これまでの大都市とは雰囲気がまったく違っていた。早速、宿を捜した。少し高かったがこじんまりしたきれいな部屋を紹介してもらった。ずっと、石材を使った山小屋風の建物からなるこの町は、心地が良かった。

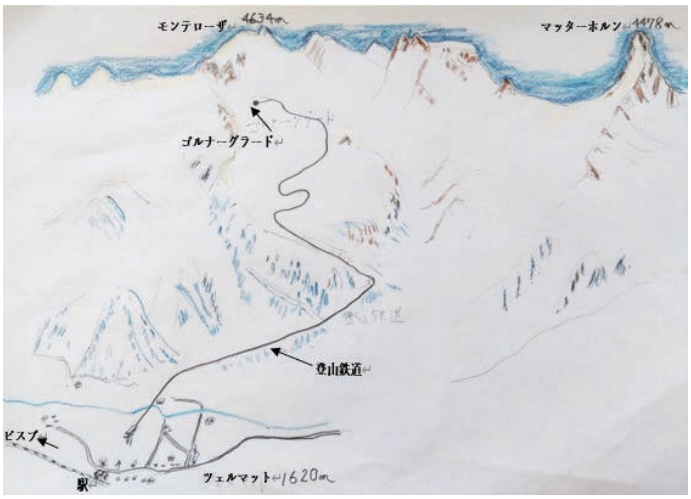
ツェルマット

1　山小屋風の建物といえば、バンクーバー近郊のウィスラーが思い出される。冬季オリンピック開催で有名だが、一九九八年の秋にバンクーバーから日帰りで旅行した。山小屋風のホテルなどが立派だったが、それと比べるとツェルマットの建物はこじんまりしていた印象がある。

二　マッターホルン

町中からも、マッターホルンが見え隠れし感激した。マッターホルンを間近に見るためには、登山列車を利用してゴールナーグラート展望台へ行けば良いとのことであった。しかし、切符の値段が高く断念した。

その代わり、町中から少し高台まで歩いて行けば展望が良さそうな場所があると思われたので一人で高台を目指した。登山ではなく軽いハイキング程度のものであり、危険はまったくないと判断した。丘を目指して登って行くと、誰もいない丘にたどり着き、素晴らしい眺望のきく場所を見つけた。記念写真を撮った。



ツェルマット（1620m）とマッターホルン（4478m）
（当時入手したパンフを参考）

マッターホルン（山頂が見えにくいが）

マッターホルン（こちらも見えにくい）

アルジェ訪問でも達成感を感じたが、マッターホルンが一望できる場所まで来て、この旅行の達成感をまた感じた。立派な建造物、街並みのたたずまい、有名な美術品などの人工物もヨーロッパならではと思われたが、アルプスのやまなみはヨーロッパを代表している景観と思う。

その後、ユングフラウへの基地があるインターラーケンも訪れたが、天候が良いとは思われなかったこと、やはり登山鉄道は相当に高かったことから、乗るのはあきらめた。今思えば、無理をしてでも登山列車に乗るべきであったと思う。スイスでは、これまでの都市部から離れ、自然に触れることができたので、都市部とは異なる新鮮さを感じた。

他の人も同じと思うが、アルプスなどの険しい山岳の景観には「何故か」惹かれる。「何故か」を追及してみたいと思うが話が難しくなりそうである。マッターホルン以外の山を少し思い出すと、ニュージーランドのマウントクック――この時はセスナ機で氷河にも着陸した。イラン最高峰ダマバンド山――この時はテヘランからカスピ海へと向かう車から眺めた。ウィスラーから望んだやまなみ――この時は雪上車に乗って氷河近くまで行った。その他、九州でも由布岳、久住連山、屋久島のモッチョム岳などなど素晴らしい景観はいつも胸を高鳴らせてくれる。

次は、山を抜けアムステルダムだ。

インターラーケンの近く

インターラーケンの近く

第十一章　アムステルダム・ケルン

一　国境を越えアムステルダムへ

スイスから次の目的地のアムステルダムを目指したが、ルートの記憶が不確かである。おそらく西ドイツを経由しないとアムステルダムには行けないと思うが、スイスと西ドイツ間の国境か、西ドイツとオランダ間の国境か、真夜中、起こされた。そして、リュクサックの中を徹底的に調べられた。ここでも、日本赤軍事件が関係しているように思われた。そういうこともあったが、無事、朝方、アムステルダムに着いた。

駅前の広場から空を見上げると、これまでの空と異なり、冬の日本海側のような雲がありかなり北に来たと感じられた。駅前では、名物のニシンの酢漬けを売っており、早速一匹買って食べた。なかなかの味であり日本の食べ物が思い出された。

二　街中とゴッホ美術館

有名な運河の風景やチューリップの花を捜した。運河の風景は至るところで見られたが、チューリップは、着いた直後はなかなか見つけられなかった。アムステルダムは大きな街で観光に値する場所はたくさんあるが、『ゴッホ美術館』を目指した。大きく、立派な建物であった。『ひまわり』など有名な絵がたくさんあった。ゴッホの絵については、「有名な作品をこの目で観た」といった程度の感想であった。情けないが、写実的な作品以外の鑑賞能力は私にはない。チューリップは、公園などに入ると多く咲いていた。その他、運河を跨ぐ「跳ね橋」なども多く見られた。

今思えば、アムステルダムには「アムステルダム国立美術館」「レンブラントの家」「アンネ・フランクの家」[1]「各種公園・動植物園」等々、多くの見どころがある。これらは訪問できなかった。南ヨーロッパと異なり、街全体の雰囲気は緯度が高いせいか少し暗いように思われた。また、人々の背丈がものすごく大きいと感じ、南ヨーロッパを懐かしく感じた。

アムステルダム（運河を中心に描いた）

ゴッホ美術館

アムステルダムの運河

公園のチューリップ

運河に架かる跳ね橋

1　アンネの日記は読んでいなかった。この家にも関心がなかった。ユダヤ人迫害の歴史についても当時は知識も乏しかった。最近、怖くて読めなかったフランクルの『夜と霧』が読めた。読むべき本と言える本だと思う。しかし、このユダヤ人の問題が現在のハマス・イスラエル戦争と繋がっていると思うと複雑である。

三　飾り窓の女とポルノ映画館

オランダには公娼制度があり飾り窓の女という場所があるのは、当時も有名であった。見物するとしても夜が妥当かも知れないが、夜の街は少し怖いので、昼間に捜してみた。手元の地図ではよく分からなかったので、近い場所と思われるところまで行き、通行人に尋ねたらかなり変な対応――というか軽蔑しているような対応をされ恥ずかしかった。それでもくじけず、それらしい場所を見つけ写真を撮った。

当時、「フリーセックス」は北欧の代名詞のように思っていたので、気恥ずかしいが、夜――夜は出歩かないようにしていたが珍しく外出した――ポルノ映画を観に行った。映画のタイトルや内容は分からず、それらしい映画館に入った。シートに座り画面に集中していると、隣に大きな西洋人の男が座った。しばらくすると、座り方を変え私の足にその男の足が触れた。最初は、体が大きいのでやむを得ないと思って我慢していたら、さらに足をこすり付けてきた。これはおかしい、ひょっとするとホモかもと思えだした。やはり不自然である。私は、足と体で大きく相手を押して強く拒絶したところ、男は座席から立ち去った。

それ以上、大きな問題にならずに良かった。ちょっとした事件であり暗くて人相などは分かなかったが、今でもよく覚えている。みなさま、一人でのポルノ映画鑑賞時はご用心を！　と言っても一人でのポルノ映画鑑賞の時代は過ぎ去ってしまったか。

飾り窓があった地区（SEXSHOPの看板が見える）

四　ケルン

オランダから北の北欧は、物価が高いとのことであった。それと予定の日数もお金も少なくなってきたので、北欧は断念し、アムステルダムから最終目的地のパリを目指したが、ケルンで途中下車した。当時、ドイツの街にはあまり関心がなかったが、パリへの経路にケルンがあったので寄ったという程度だった。観光名所はケルン大聖堂であり、そこを目指した。

また、お土産に「ゾーリンゲン製の包丁」を買いたいと思っていたので必死に探したが、中々見つけられなかった。ようやく小さな店を見つけ、あまり上等とは思えなかったが買った。

ケルン

さあ、いよいよパリだ。

第十二章　パリ

一　帰りの航空チケット

六月二日、パリに着いた。直ぐ小さいながらも清潔な宿に落ち着くことができた。宿の場所がどの辺りであったか分からないのが残念である。現時点での推測だが、アムステルダム方面からの国際列車は、「北駅」に着くとのことであるので、この北駅近くの宿を紹介してもらったのではと思われる。部屋から階段を一階へ下った直ぐところに朝食会場があり、こぎれいであったこと、クロワッサンと思われるパンが出たとの記憶がある。

落ち着くと直ぐに帰りの航空便の確認を行うことにした。当時、日本国際学生連合（ＪＩＳＵ）という組織が格安航空券販売などをしており、そこでチケットを買っていたので、そのパリ事務所を訪れた。日本で、六月七日、日本着の便を仮押さえしていたはずだ。事務所を訪ねると、運航計画が変更されているか何かの都合で、一週間遅れの六月十五日にしか飛行機に乗れないとのことであった。困った。お金がかなり減ってきており、帰国が延びるとぎりぎりに近かった。また、予定どおり帰れないとなると「帰りたい」との気持ちが湧いてきた。困ると伝えると、最終確定ではないのでまた来て欲しいと言われた。

しょうがない。再度、訪ねることにして、パリ市内を見て回ることとした。

二　ノートルダム大聖堂

パリでは、これまでの徒歩での名所巡りと異なり、地下鉄を利用した。歩いて回るにはパリは広すぎた。

路線図があったので、目的地に近い駅を地図で見つけ、そこまでのルートや乗り継ぎ駅を確認して何とか乗れた。地下通路が長かったとの思い出がある。また、地下通路ではストリートミュージシャンが演奏していたとの記憶もある。

まずはノートルダム大聖堂（寺院）を訪ねた。ヴィクトル・ユーゴーの小説『ノートルダム・ド・パリ』（「ノートルダムのせむし男」）の舞台となった寺院である。小説をいつ頃読んだかは不確かだが、この小説の舞台ということで行きたかった場所である。塔の頂上まで登ることができ、期待どおり怪物などをかたどった彫刻[1]も身近に見られ、その不気味さは迫力満点であった。写真からでもその迫力が分かる。

塔からは、パリ市内の三六〇度の眺望が見られ、遠くにはエッフェル塔が望めた。

この大聖堂については、二〇一九年の大火事のニュースが記憶に新しい。二〇二四年末までの修復完了を目指しているらしい。

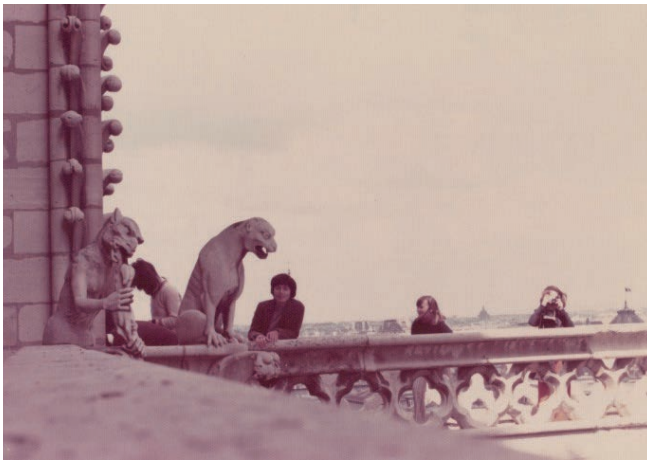
パリ

1　ガーゴイルと呼ばれる。ガーゴイルはもともと、教会の壁面に突き出した形で取り付けられ雨どいの役割があり、建物が傷まないように、雨水を集めて離れた場所に放出しているとのこと。フランスエクスプレス、https://www.france-ex.com/blog/item/12930.html、２０２３年10月31日現在。

三　エッフェル塔と凱旋門

次にエッフェル塔を目指した。塔には登れるが料金が高かったので止めた。下から眺めるだけで十分であった。また、凱旋門へも行った。

この両者については、特別に感動したとの記憶がない。あまりにも名所を見過ぎてしまったというよりも、歴史的背景など知識がなかったことが理由と思われる。



ノートルダム

ノートルダムのガーゴイル

パリを舞台とした小説と言えば、私たちの世代で言えば、『ノートルダムのせむし男』と同じくヴィクトル・ユーゴー作の『レ・ミゼラブル』であろうか？　一八六二年の作とのことであるので、エッフェル塔はなかったが、凱旋門は完成していたはずである。苦難の連続のストーリーなので苦しくて読み切れていない。ノートルダム大聖堂のあるシテ島やリュクサンブール公園が出てくるらしいので[2]、これもよく読んでいれば、パリの街をもっと感慨を持って観られたと思う。ヘミングウェイの『日はまた昇る』でもパリの情景が出てくる。『移動祝祭日』は、パリの街と若い作家時代のヘミングウェイとその妻との暮し振りなどが主題だ。やはり、好きな小説を読んだり映画を鑑賞したりしていれば、当時のパリをもっと深く味わうことができたはずだ。これも残念であった。

旅も終わりに近づき、旅そのものよりも帰国の可否や帰国後の生活のことが気になってきたことも、パリの印象に影響したかも知れない。

エッフェル塔

エッフェル塔

凱旋門

2　パリと印象派の世界へ、夫婦のパリ旅行記、https://parisit-info.com/2019/04/07/luxembourg/参照。２０２３年11月21日現在。

四　ルーブル美術館は

ルーブル美術館は、ご承知のとおり広大で展示作品もものすごく多い。有名な作品のみは見逃すまいとした。私としては『モナリザ』と『ミロのビーナス』を見れば十分と思ったが、当然のことながら素晴らしい王冠などの展示もあった。また、古代エジプトの彫像などの展示も多くあった。当然ではあるが絵画のコレクションも膨大で、有名な作品が数多くあった。また行く機会があれば、事前に下調べを十分にした上で見学に臨まなければならない。

さすがに『モナリザ』の周りは人だかりがあったが、『ミロのビーナス』の回りの人だかりはそこまでではなかった。

古代エジプトの彫像

素晴らしい王冠

モナリザ

ミロのビーナス

五　モンマントルの丘

モンマルトルの丘は、パリで最も標高が高い場所で、昔、多くの芸術家がこの周辺に集まったことでも知られている。丘の上には、サクレ・クール寺院があり、近くには、ムーランルージュもある。ムーランルージュは入りたかったが敷居が高そうであきらめた。モンマルトルの丘の上からの眺望は承知のとおり抜群であった。広場には、敷ものを広げただけのお土産屋がたくさんあった。そして、売っている人はアフリカ系と思われる黒人が多かった。

私は、記念に「顔を彫刻した金属性の首飾り（皮ひも付き）」を買った。値段は覚えていないが気に入っており、現在も金属の顔の部分をキーホルダーとして使っている。

エッフェル塔やルーブル美術館よりも、こんな記憶の方が強い。

サクレ・クール寺院

モンマルトルの丘の上

金属製の首飾り

ムーランルージュ

六　ロダン美術館

『考える人』などで有名なロダンの作品などが展示されている「ロダン美術館」を訪れた。考える人のオリジナル作品はいくつもあるとのことであるが、ここに展示されている作品はオリジナル中のオリジナルと思われた。

『考える人』は一九七五年当時、日本では最も有名な彫刻作品の一つであったであろう。ロダンの言葉「都会は石の墓場です。人の住むところではありません」は、開口健の『フィッシュ・オン』で紹介されている。この言葉と『考える人』とには直接関係はないが、『考える人』の本物はぜひ観たいと思っていた。当時の若者の迷いを象徴している作品と思っていたのかも知れない。本物は観たが、特別な感情は沸いてこなかったと思う。当時、迷っていたし、自称、考えている人のつもりだったが、『ピエタ像』や『ダビデ像』の方が、印象が大きかった。

ただし、他にも、見事な彫刻、絵画がたくさんあり、十分楽しめた。

考える人

ロダン美術館にて

七　エスカルゴの晩餐

いよいよこの旅も終わりである。お金も少しは残っていたのでお祝いにちょっぴり良さそうなレストランに入り、夕食を取ることとした。少し、敷居が高そうな店だったが思いきって入った。店員がメニューを持ってきた。フランス語のメニューを見ながらなんとかエスカルゴを注文した。

給仕が「君はエスカルゴを知っているのか素晴らしい」とか言ったように思う。私は褒められたように受け止めて嬉しかった。他に何をオーダーしたかよく覚えていない。エスカルゴは特段に美味しかった[3]との記憶はないが、帰国できることを祝っての一人での晩餐であった。

そして、旅のことを振り返っていた。新たな可能性を探ってみたいとは思っていたが、帰国が遅れるかも知れないと聞いた時、正直帰りたいと思った。モラトリアムのための旅行はその目的を果たせたのだ。

トラブルのことも思い出していた。「ベニスへの国境越え」「アテネでの万引き疑惑」「モナコでのコンプレ事件」そして「アルジェでのトラブル」と「アムステルダムでのホモ事件」。なんとか乗り越えて、今、旅の終着の地に居り、一人だがお祝いをしている。もう一度言うが「目的を果たせたのだ」、そして無事であった。

ヨーロッパ、アルジェリアを巡った少し長い旅の終わりであった。

3　この時は、エスカルゴが特に美味しかったとの記憶はないが、帰国後かなり経過したのち、イタリア料理店でエスカルゴのつぼ焼きを何度か食べた。にんにくとバターの香りの方が強いと思うが美味しかった。エスカルゴは、フランス料理として有名だが、イタリア料理やスペイン料理でも出てくる。

第十三章　帰国

帰りのルートは、アンカレジ経由ソウル一泊で羽田着であった（成田は未開港）。アンカレジで給油のために一時着陸した際、二時間程度機外に出た。滑走路から見える山々の雪景色はやはり珍しかった。

ソウルでは一泊したがソウル市内を観光する時間はなく、タクシーの中から建物の写真を撮った程度だった。

こうして、六月七日、無事、帰国となった。

帰国後、東京で二泊、また、K叔父のアパートに泊めてもらった。ヨーロッパで多くの古い建物などを見て感銘を受けた影響か、日本の古い建物や有名な観光地を見たくなった。選んだのは浅草の浅草寺である。日本らしさを感じつつ、旅行の延長のようにも覚えた。

そして、新幹線に乗り、六月九日、博多駅に着いた。

駅には到着日をはがきで知らせていた女友達が迎えに来てくれていた。

こうして、今回の私の旅は完全に終わった。

アンカレジ

ソウル

浅草

旅を振り返って

私のモラトリアムは、こうして終わった。

普通の進路から外れ、試してみて、ヨーロッパで働いてみるといった能力や志も十分には持ち合わせていないことが分かった。そして、働いて収入を得て、社会の一員となる気持ちが固まった。その前にやりたいことが何とかやれたのである。

今思えば、当時の日本は、高度成長期を迎え、きちんとした進路に乗り社会に出て、そこで活躍することが当然という風潮であったと思われる。自由度が低い社会システムと私には映っていた。しかし、ビートルズやボブディランの少々反体制的かつ自由で生き生きした雰囲気に影響を受けていた私、そしていくつかの文学作品から普通の進路ではない経験の影響を受けていた私には、望ましいと思われる進路に乗りながらの生き方は息苦しくかつ怖いと感じていたのだ。

そんな私が、この旅を終えた後では、怖いと感じながらも自分を保ちながら、日本での社会生活に挑戦していく気持ちが固まってきていた。

帰国後、再び、実家に身を寄せて就職の道を探った。地方公務員の試験を受けたが、あっけなく不合格となった。実家で近くの海や汽水の沼で釣りなどをしながら時を過ごした。

具体的な就職先が見つけられない中、大学の恩師であるT教授から電話を頂いた。福岡市内の建設コンサルタント会社を受験してみないかとのことであった。なるべく福岡市で就職したいと思っていたので喜んだ。試験は面接のみであった。過激派の学生かどうかを心配されたようだ。体制寄りではなかったが（昔の大学生はほとんどそうだったと思う）過激な思想もなく行動もしていなかったので、入社させていただいた。T先生にはまたしても助けていただいた。感謝しても感謝しきれない。

一九七五（昭和五十）年の一〇月一日より出社し、会社人生を送ることとなった。就職後、しばらくしてから絵はがきを

送っていた女友だち（現在の妻）と結婚した。

この旅行は何だったのか？

一つは、不安だった会社人生などの進路へ挑戦するといった気持ちを固めさせてくれた。

二つ目は、普通のコースからわずかな期間だが外れ、自分なりの考えを実行できたので自分にすこしばかり納得することができた。

三つ目は、トラブルの折などには、直観力や判断力をフルに働かせる必要があったが、何とか凌ぐことができたので自分に自信がでてきた。

四つ目は、映画、小説、随想などの外国のシーンや外国で起きている事件などが、身近に感じられるようになった。そして、ふとした時にこの旅のシーンやその時の気持ち、時にはにおいみたいなものが思い出され、そんな時は心持が少しだけだが豊かになれるようになった。

五つ目は、日本に来ている留学生などの外国人に接しやすくなった。そのおかげでわずかだが友達もできた。

六つ目は、私のこの旅行が、弟や息子に影響を与えたか、彼らも一人で海外を回った。息子は、私よりもかなり冒険的な旅をした。

七つ目は、飲み会の場などで、若い人と話す時、貴重な経験を自慢話として披露できるようになっていた。これは嫌がられた時もあったであろう。

とにかく、大きな事故・事件にも合わず、また体調も崩さず、無事、帰国できたことは幸いであった。冷戦時代ではあったが、日本赤軍を除けば国際テロは今のように活発ではなく、パンデミックという言葉も知らず、地球温暖化とそれが引き起こしている様々な問題も認識されていなかった。今思えば、少しぜいたくかつ幸運な旅行であったと言えるかも知れない。

亡き父や母には心配を掛けたであろうが、あたたかく見守ってくれた。当時は、父母の心境などはまったく考えていなかったが、今は子供や孫を持って少しは想像できる。

父母の他、エールをくれた友達、東京での宿を提供し横浜港まで見送ってくれたK叔父、旅先で親交を交わした方々、私を旅に誘った文学作品の数々やビートルズ、私の自慢話を聞いてくれた方々、今ネットなどで有用な情報を提供しておられる方々、この旅行記が楽しみとお世辞でも言ってくれた同世代の友人達、そしてこの原稿にアドバイスをくれた二人の弟、最後に、私からの絵はがきをきちんと取っておいてくれた妻に感謝したい。

もう一度、この言葉を引用したい――ともかく全力疾走、そしてジャンプだ。錘のような恐怖心から逃れて！

（大江健三郎の『日常生活の冒険より』）

令和五年十二月　　木寺　佐和記

資料集その1

〈モラトリアム〉ヨーロッパ旅行記1975　概略行程表

月	日	曜日	出発・滞在先など
4月	17	木	博多〜東京
	18	金	
	19	土	横浜港発
	20	日	バイカル号船室への招待
	21	月	ナホトカ〜ハバロフスク
	22	火	モスクワ着
	23	水	
	24	木	ウィーン着
	25	金	
	26	土	夜、列車でベニスへ向かう
	27	日	国境越え事件、ベニス着
	28	月	ローマ着
	29	火	
	30	水	
5月	1	木	ナポリ日帰り
	2	金	
	3	土	アテネ着
	4	日	

月	日	曜日	出発・滞在先など
5月	5	月	
	6	火	イドラ島日帰りツアー
	7	水	デルフィ日帰りツアー
	8	木	再びイタリアへ
	9	金	フィレンツェ着
	10	土	
	11	日	モナコ着、コンプレ事件
	12	月	
	13	火	マルセイユ着
	14	水	
	15	木	イフ城見学
	16	金	マルセイユ発、地中海へ
	17	土	アルジェ着
	18	日	
	19	月	
	20	火	オラン日帰り、揉め事
	21	水	アルジェ発
	22	木	マルセイユ着

月	日	曜日	出発・滞在先など
5月	23	金	
	24	土	マドリッド着
	25	日	闘牛見物
	26	月	トレド日帰りツアー
	27	火	バルセロナ着
	28	水	
	29	木	ツェルマット着
	30	金	
	31	土	アムス着、ホモ事件
6月	1	日	ケルンへ
	2	月	パリ着
	3	火	
	4	水	
	5	木	
	6	金	パリ発、ソウル着
	7	土	日本着（羽田空港）
	8	日	
	9	月	博多着

資料集その2

送った絵はがき一覧 1

送った絵はがき一覧2

⑱アルジェ
㉓着衣のマハ
㉗マッターホルン
⑲アルジェ
㉔裸のマハ
㉘アムステルダ
⑳アルジェリア
㉕1808年5月3日
㉑アルジェの海岸
㉖白いゴリラ
㉙ゴッホ美術館
㉚ケルン
㉒オラン
㉛パリ

資料集その3

使っていた地図などの表紙一覧

〈モラトリアム〉ヨーロッパ旅行記一九七五年

――木寺　佐和記――

発行日　：令和五年十二月
発　行　：木寺　佐和記
デザイン・印刷：（株）星光社